

【資料翻刻】高橋亨京城帝国大学講義

朝鮮思想史概説（下）

Lectures on the Outline of the History of Chosen's Thought (2/2):  
Typing of Takahasi Toru's Lectures in Keijo Impereial University

権 純 哲\*

KWON, Soon Chul

これは、本紀要 53-1 掲載の「朝鮮思想史概説（上）」の続きである。

以下、主な記号の説明である。

- \* ( ) : 高橋自身が追加した語句や記述
- \* — : 高橋自身が削除した語句・文章
- \* — : 権の判断による削除
- \* [ ] : 高橋自身が ( ) と記した補注
- \* [ ] : 引用文の補足・校勘、権による補注
- \* □ : 原文上の未読字
- \* 字 : 権の未確定字
- \* 頭点 : 高橋自身による、赤色鉛筆が多い。
- \* / : 改行

なお、文脈に妨げにならないように、補註など小文字にした。また適宜、一字下げの改行を行った。

朝鮮思想史概説 第一冊 昭和五年五月三日

第一章 序説

第二章 古代朝鮮の文化

第〔三〕章 高句麗百濟の漢學

第四=第二章 新羅文化

第五=第三章 新羅の佛教

第六=四(五)章 新羅君臣の崇佛と道洗

朝鮮思想史概説 第二冊 講本(A)第三冊代用  
第七=第五章 新羅に於ける三教二教調和論

高麗朝思想史

第一章 太祖と佛教

第二章 高麗の僧階

第三章 高麗の漢學と科擧

第四章 高麗儒者の佛教觀

第五章 高麗の風水説 【以上、53-1 号掲載】

第六章 高麗佛教第二期

〔一 大覺國師〕

朝鮮思想史概説 第三冊（講本 B）

二 師の宗門

第二章 普照國師と高麗禪宗の復興

〔普照國師知訥〕

師禪

〔國師寂後〕

〔大覺・普照二師出現の意義〕

第三章 朱子學の輸入及斥佛論の勃興

第一節 安珣と朱子學

一 事蹟

二 學説

三 元朝の朱子學

第二節 斥佛の議論と太學の活動

朝鮮思想史概説 第四冊 講本（麗末太學形勢

第一章排佛教政より最新）

\* くおん・すんちよる  
埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授  
韓国思想史・東アジア近代學術思想

〔斥佛の議論〕

〔太學の活動〕

## 第〔四〕章 高麗の道教及其佛教との關係

(以下思想信仰史卷八第二節)

### 第二節 高麗道教と佛教との關係【中斷】

李朝思想史

序言

第一章 排佛教政

第二章 朝鮮佛教命脈維持の理由

朝鮮思想史概説 第五冊 講本

第三章 李朝儒學の三期

第四章 朱子學の作出せる朝鮮の社會相

一 佛教排斥と巫覡及風水の流行

二 名分の確立

三 春秋大義

四 朋黨分立

五 文學の單純・經學の不發達

第五章 三教調和論 附東學

朝鮮思想史概説 第六冊 講本

一 涵虛

二 普雨

三 休靜

四 松月應祥

五 霜月璽筭

六 蓮潭有一

七 無竟子秀

八 默菴最叅

九 白谷處能

〔東學〕

## 第六章 高麗佛教第二期

前述の如く高麗佛教は大覺國師義天か天台宗を開立するに至りて第二期に入る。此に二理有あり。此以前の高麗佛教は猶新羅教派の餘流と視るべく、華嚴・律・密教・法相乃至禪宗の名匠

は何れも新羅時代の法系を引けるものなり。〔法眼宗は麗朝に至りて始めて（之を延壽禪に承けて）將來せられしも、其の傳燈今詳ならず。〕されは世は高麗に移りしも、實は新羅佛教の延長に外ならず。是れ理由の一なり。羅初に在りては羅末（佛教の）宗派の形勢を其の儘繼承し且つ太祖個人の信仰の爲、教界を禪・教二宗に縱斷して禪宗特に（宗勢）盛なり、剏寺（數）五百、王師四世を出す。光宗に至りて華嚴宗の坦文王師に封せられ、穆宗・顯宗に至りて王室の嚴宗皈依、益々篤く、遂に文宗の王子（たる大覺）國師か嚴宗の景德王師爛圓の弟子となり、斯宗を宣揚するに至りて禪宗、之に拮抗する能はず。後國師更に天台宗を開立し、華嚴と禪とより俊髦を抜き其の羽翼となし、華嚴と禪とを包容して打成一團、教觀兼修の大旆を翻すに及ひて殆と一時他宗派をして屏息せしむるの概あり。禪衰へて教盛となり。（其形勢）後普照國師か（大覺國師の教觀の影響下に）定慧雙修の標語の下に（上面赤字：禪家の立場より同じ（佛）教觀を）（唱へて）大に禪宗を復興して此と對立する迄繼續高麗禪を打樹するの根源をなす（つ。大覺國師△上面赤字：の出現に由りて從來禪教の（對抗的）争は轉して高飛車的攝融習（融）合の議論及實際となる。）是れ理由の二なり。

### 〔一 大覺國師〕

大覺國師は天台宗を開立せしと雖、是は高麗の國家か台宗の一宗派として存立するを公認するの謂にして、其の教義の如きは既に遠く羅末に將來せられしを見る。先つ台宗の所依經典『法華經』の茲に講明せられしは、實に元曉和尚の法華經宗要一卷、同方便品科管一卷〔新編教藏総録〕を始とす〔國師集卷三新創國情寺啓講參看〕。但し和尚は固より其一家の判教を以て『蓮經』を解するものにして台宗の教義を説くるには非ず。〔東文選（元曉）法華宗要序〕元曉の後、『法華』を

持する新羅僧朗智縁會あり、百濟の惠現あり。されど果して台宗を奉せりや否や明ならず。次て唐玄宗頃の天台六祖荊溪湛然の弟子に新羅の人法融・理應・純英あり。(○上面赤字:○又羅末文豪崔致遠は天復四年甲子〔孝恭王七年〕唐大薦福寺主翻經大德法藏和尚(頭:華嚴二祖)傳〔大日本續大藏第七套第三冊〕を撰し、其内に台宗の慧文・慧思・智顛の三傳及四教(藏・通・別・圓)の判教を述へたり。亦以て) ~~其の新羅佛教に如何なる影響を與へしか知るべからざるも~~ 天台教義の既に新羅に入れるを知る。(×△上面右:×『佛祖統記』第四二法運通塞志第一七之九、清泰二年に四明の僧子麟は高麗百濟及日本に遊ひて天台教法を傳へ高麗太祖十八年其の宋に還るや、太祖李仁日を遣して之を送らしむ。此に高麗初期既に天台教法の朝鮮に傳へられしを知る。△上面左赤字:△但し羅末に在りては尚華嚴宗の獨盛にして、同しく教宗の最乗教と稱せらるの天台宗は(教理批評の上よりも)之と拮對立の地位を與へられさりしか如し。『祖堂集』(右脇:高麗大藏經補遺祖堂集)に(羅末憲康王時の)順之禪師〔仰山の嗣に沔五冠山瑞雲寺和尚〕の項に禪師の教判を載するに全佛教を判沔一頓教・二頓圓教・三圓教・四三乗となし、華嚴宗を以て頓圓教となし、天台宗を以て圓教となす。亦以て當時禪家の天台・華嚴二宗に對する判斷を見るへし。斯くて台宗は禪・嚴二宗側より抑へられて終に羅末麗初を経て猶一宗と沔公認せられて開立するに至らさりし也。) 高麗忠肅・忠惠王頃の文臣閔漬の撰せる「國情寺金堂主佛釋迦如來舍利壺驗(異)記」に據れば、高麗太祖創業の時、行軍福田四大法師能競等上書して(會三歸一及)一心三觀を教義とする天台宗<sup>1</sup>を此國に開立せば、其の功德に由りて(新・後百・高麗)三韓を合して一國と成すべしと勧めたり。是時太祖之を聽かさりしと雖、爾後台學高麗に行はる。高宗朝の文臣崔滋の「萬德山白蓮社圓妙國師碑

銘」〔康津〕には天台宗史~~を~~(を略叙し)高麗天台宗師を列記して

「本朝有玄光、義通、諦觀、德善、智宗、義天之徒、航海問道、得天台三觀之旨、流傳此土、奉福我國家。其來尚矣。」

と云へり。六人の内、玄光は百濟の僧、義通は螺溪義寂の嫡嗣、支那天台宗第十六祖なり。諦觀は『天台四教儀』の著者なり。智~~光~~宗は支那國清寺淨光大師より大定慧論と天台教義とを傳へる圓空國師(碑文あり〔朝鮮金石總覽〕)なり。(德善に就ては今攷なし。)義通・諦觀の二師は今高麗僧史に其の事蹟を傳へすと雖、是等二大匠を高麗僧中より出せるは即當時高麗に~~權威ある~~

(能く)天台教義を講ずる者の存在を證す。『佛祖統記』諦觀傳に宋の吳越王・錢弘俶、天台教義を第十五祖義寂に尋ねて中國に於て求むべからざるを知り、使を遣して天台に關する文獻を高麗求めしは即是の消息を語るものなり。之に加ふるに穆宗・安宗・顯宗・文宗の諸王、『法華經』を崇尊して大乘第一經典と奉するあり。教界の形勢、台宗開立の素地をなさるにも非ず。

(×上面赤字:×天台宗は華嚴、禪と鼎立沔過去(李朝國初迄)朝鮮佛教の三大宗旨なり。今(其始祖)大覺國師を講ずる前に當り、極簡單に其の教宗學の輪郭を述んとす。勿論此は門外漢の憶説に外ならず。其の正しき説明は他日佛教講師の講席に於て聽問すへし。)

國師の傳は『佛祖統記』『高麗史』列傳、(開城)五冠山靈通寺に在る金富弼撰「贈諡大覺國師碑銘並序」、仁同南嵩山偃鳳寺に在る林存撰「海東天台始祖大覺國師碑銘」、(△上面:△朴浩撰開城「興王寺大覺國師墓誌」〔朝鮮金石總覽〕)に詳なり。其の事蹟は『大覺國師集』及支那『西湖志』、『宋史』高麗傳、『東坡集』等に出つ。最近京都の内藤雋輔氏「高麗大覺國師に關する研究」〔支那學 1923〕を發表し、朝鮮梁建植之を鮮譯して昭和三年九月より(雜誌)『佛教』に連載せり。

亦参考とするに足る。

師、諱は煦、字義天。宋の哲宗の諱を犯すを以て後世専ら字を以て稱す。文宗の第四子、文宗の九年九月生る。文宗の(子)十三人皆才質あり、義天を以て白眉となす。文宗其十九年諸王子を召して誰か僧となりて國家の爲に福田を修するかと問ふに義天于時十一歳、起ちて出家を乞ひ、王之を【第二册⇒第三册】王之を許し、華嚴宗の景德王師爛圓の弟子たらしむ。文宗廿一年丁未、僧統を授け法號を佑世と賜ふ。師當時の佛學に於て究めさるなく兼て儒老百家の書に及ふ。師夙に宗門の玄義に疑を起し、又高麗に佛典の備はらさるか故に宋に之きて道を問ひ且つ教乘を廣搜せん志あり。時に江南餘杭に法幢を樹て、大名、宋を傾けし華嚴の晋水淨源法師に書を致して道を問ふ。淨源亦之に答へ且つ親しく見を以て心符を傳へんと云ふ。

師宣宗の元年より既に渡宋の爲に諸般の準備をなし、二年正月入門懇請すれども、群臣の俗論の爲に遮られて許されず、不得已、明年四月王及王太后に留書して弟子雙谿寺大師曇眞等十一人を引具して(私に)王京を逃れて貞州より商船に托して渡宋せんとす。王其の志抑ふへからざるを知りて別に隨身として(弟子)樂眞・慧宣・道隣等を遣す。師一路平安汴京に達し、朝廷の厚遇を受け、允許を蒙りて中國(高名)佛匠に就き問道することゝなり。接伴官楊傑と共に南下して餘杭に晋水を訪ひ、悉く華嚴一宗に關する年來の疑問を解釋するを得。于時淨源七十五歳、義天三十歳。明年に至り本國王、哲宗皇帝に~~上書~~(表)し、王太后倚間の情切なるを述へ、早く師を還國せしめんことを乞ふ。師、不得已再度帝京に向ひ道に錢塘を過ぎて曩に道を問へることある天台宗名匠、後上天竺寺住持慈辯大師從諫に謁し、審かに天台宗義會通す。別に臨みて慈辯詩一首を賜ふ。又手鹽及如意を付與して傳心の意を表す。「(是れ師)後師(天台山)

天台塔下に親參して發願疏を呈して曰く

「今已錢塘慈辯大師講下、承稟教觀、粗知大畧。他日還郷、盡命和揚、以報大師爲物設教劬勞之德。此其誓也。」

と云ふ所以なり。」天祐元年二月、帝京に著き、又帝及後の優遇を蒙り淹留五日、退京し歸路、復淨源老師に參す。師一日爲に香を焚き香爐及拂子を附與して付法信となし、歸國後、燈々相紹きて敢て消するなからんことを懇屬す。轉して道を天台山に取りて(智者大師の親筆願文を覽、自ら本國に斯宗開立の)誓願を立つ。又明州育王寺の雲門の五世大覺禪師懷璉に謁し、又靈芝の大智を訪て戒法を聴き、五月二十(日)本國朝賀使と共に一帆蓋なく、其二十九日禮成江に達す。宋に在ること前後十四ヶ月、帝京より江南に亘りて名師を訪ふこと五十餘人。華嚴・天台・律・法相・禪・戒律及梵文を網羅す。是の外、僧侶及地方官に托して蒐集せる佛書亡慮四十餘卷。

師、歸國するや、宣宗の禮遇尤厚く華嚴宗大刹興王寺に住せしめ、禪・教界の俊才を募りて從學せしむ。師、王に建議して興王寺内に教藏都監をおき、更に廣く宋・遼及日本に教藏乘を求め、又三南の舊寺に就きて元曉祖師等の遺什を拾蒐し、又亡慮四千卷を獲、當時の學僧をして校正の任に膺らしめて之を刊行す。師、編纂せる『新編諸宗教藏總録』は實に書を蒐むること五千四十卷に上けり。序文に據れば、是書成れるは宣宗八年庚午にして教乘の蒐集に實に二十載を費せりと云ふ。然則師は、文宗十九年其の祝髮後、幾許もなく本事業に著手せるなり。然るに是頃、宋の禮部尚書宋(蘇)軾、書籍の高麗輸出に反對し、令を以て之を禁す[宋史、高麗史宣宗九年]。東坡は是外頗る高麗を好まず。其の何故なるか、詳ならず。

宣宗十一年、弘圓寺成りて之に移り、弟子益々進めるか、夏五月(時勢に慨せるありて)突如

京を辭して海印（寺）に退居し、一入不出の意を示す。然るに肅宗二年彼の渡宋前より宿志たる天台宗の本寺國清寺落成し、師、復た出て、國情寺第一世となる。『佛祖統記』に據れば、師は其の師慈辯從諫を以て國情寺名譽開基となせりと云ふ。

師、國清寺に住して肅宗の熱誠なる外護を受け、天台（宗學）を講するや、一代佛徒、靡然として之に響應し舊學を棄て、來從學する者幾と一千人と稱せらる。閔漬の製せる國情寺金堂主佛釋迦如來舍利靈異記に據れば台宗の寺刹は國清寺の外、六山あり（後に出す）。~~其の果して何なるか今致ふるに由なし~~師、台宗を開立してより法譽益内外に洽く、宋土の大徳は勿論、遼皇帝亦遙に書を致して大藏經及諸宗疏鈔の六千九百餘卷を贈り、高昌國の沙門亦存問せり。

肅宗六年八月、師疾を得、疾革かなるゝや、肅宗親問して其の言はんと欲する所を問ふ。

師曰く

「所願、重興正道、而病奪其志。伏望至誠外護以副如來遺教、則死且不朽。」

十月三日、國師に冊す〔墓誌銘、但僊鳳寺碑文には師死して後國師に對すとす。何れか正しきかを知らず〕。

（五日）右脇して遷化する。享年四十七、僧臘三十六。

『大覺集』に據れば、師の著書は『新編（集）圓宗文類』、『新編諸宗教義（藏）總録』、『釋苑詞林』、『成唯識論單科』、『八師經』、『消災（經）直釋』あり。外に朝鮮方言を以て經文を釋せり。其數花嚴百八十卷、涅槃三十六卷、其外合計三百餘卷に上る。但し今傳はるは『圓宗文類』の若干篇〔續藏〕（『釋苑詞林』若干卷）、『教藏總録』及『大覺國師集』の落帙本あるのみ。

## 二 師の宗門

大覺國師が高麗思想史の重要な位地を占むるは、其の天台宗開立の事業を成せるに在りて、

而洵其の台宗開立は彼の全佛教の教理及教界勢に對する深き博遠大なる識見と計画に出づるものとなす。

彼の屬する宗門は、始め祝髮に當りて爛圓に隨身し、後宋に赴きては晋水淨源に親炙して其の心符を傳へ、歸りて興王寺に住して盛に華嚴を講し新參學徒に示して

「予雖不敏、幸於晋水覺儼門下、得蒙傳授。微領大綱、平生所遇、更無過。」

と云ひ、國情寺成りて其の初住となるの後も依然、興王寺住持を兼帶して他方高麗嚴宗の法王となり。且又國情寺住持となれる翌年、戊寅四月肅宗王が第五子澄儼を以て師の弟子となすや、師手つから其の髮を落し而して澄儼を以て華嚴宗の籍に編入せり。師寂するや、骨を其の得度寺靈通寺東山に石室を築きて此に眞き、仁宗三年金富軾に命して撰文せしめ、靈通寺に「高麗國五冠山大華嚴靈通寺贈諡大覺國師」の豐碑を立つ。

翻りて師と天台宗との關係を尋ぬるに、之を初にしては渡宋當時（殆ど之か爲に渡宋を決行せる）華嚴・天台の（判）教判並教理の異同に對する疑問、乃至墓誌及林存碑に由りて傳へらるゝ仁睿王后及肅宗に向て天台開立の素志を告げたる。之を後にしては慈辯大師の教を受けて天台塔下に誓願を發せる。歸國後、國清寺を落成して遂に其の以て台宗本寺となして其初世となれる。（又師寂するや）仁宗十年、林存に命して文を撰せしめ、仁同僊鳳寺に「天台始祖大覺國師」の碑を立てる。皆師か鳳に（夙に）台宗に皈命して其の開立を半生の事業となせるを證す。果して然らば、彼の眞實所屬の宗派は何れとなすへきか。

今此の問題を解するに當り、先づ彼の天台宗開立の眞意義を檢討せんと欲す。

林存の碑銘には、彼の壯時生母仁睿王后に謁して台宗開立の宿志を述へしを記して

「天台最上眞乗、此土宗門未立、甚可惜也。臣竊有志焉。」

と云ひ、又彼の天台塔下親參發願疏には、台宗か其妙理圓滿高遠なる彼の如く支那に在りて其の盛大を致せるに、朝鮮には新羅元曉、高麗の諦觀等の精微なる研究あるに拘らず、挽今廢して復之を修むる者なきは、朝鮮佛教の一大缺點なるか故に、(先づ)自ら之を修めて之に通し而して斯宗を新に此に開立して以て此の缺點を補填せんとするなりと云へり。是れ疑もなく、彼の台宗開立の一理由なり。即高麗は常に支那を以て文化的宗主國と立る~~事~~か故に支那に現存して繁昌する文化は悉く此を吾國に將來移植して始めて甘心す。故に天台宗學か華嚴宗學に比較して一層高遠なり精微なりと云ふ宗派の實質的吟味は姑く眞き、單<sup>ひとえ</sup>其の支那に現に猶昌ゆる宗派なるか故に之を將來せざるへからすと云ふは、高麗人の考として、殊に支那の文化の輸入に熱心なる彼の考として當然なりと謂はざるへからず。夫れ台宗開立の理由單に在るか×(上面：×天台宗開立迄の高麗公認の宗門は何々なるか。今存する碑文及『東文選』に載する官誥に由りて調査すれば、禪宗・華嚴宗・律宗・法相宗〔慈恩又瑜伽〕・密教及小乗有部宗の六宗ありしか如し。而して當時佛學者の學ぶ所の教學門は、「大覺國師墓誌銘」には

「當世之學佛者、有戒律宗、法相宗、涅槃宗、法性宗(華嚴)、圓融宗、禪寂宗。師於六宗、並究至極。」

とあり。涅槃宗は『涅槃經』に依り法性常住の義を明す。天台宗に攝せらる。

法性宗は『攝論』『起信論』を主として眞如法性の諸法を緣起するを説く也。(崔致遠新羅伽耶山海印寺「善安住院壁記」の◎左脇赤字：◎新羅に流行せる宗旨を擧げて

「日瑜伽、日驃訶健拏、日毘奈耶、日毘婆沙。」と云へる、其の毘婆沙宗に當るなり。法相・華

嚴・律・小乗有部宗。<sup>2)</sup>

小乗有部宗とは東土最初傳來の宗旨にして、我空法有を立す。毘曇宗也。〔阿含・毘婆娑論・俱舍論に攝る〕

天台宗、一宗に立てられて七宗となる。後更に始興宗あり、其他猶あり、高麗末期には宗名十一宗證すへし。)

然れども余は彼の最耀ける台宗開立の事業は、單に此の(文化的)流行を追ふ意識の外に、深く台宗教理の内容に於て之を(高麗に)開立せざるへからすとす理由の存するなきかを疑ふものなり。前述の如く、新羅に禪宗の將來せられ王室の皈依を得しより、(羅末の教界は)恰も支那唐以後(教界の)禪教二宗に縦斷せられし情況を呈し、同時に禪徒と教徒と教理に在りて相角立して相抗爭し、教界常に波瀾治らず。例へば新羅第四十六代文聖王の朝の(王師)無染の王の述ふる所に<sup>3)</sup>無舌土論〔高麗の禪僧王(王眞) (忠烈王朝内願堂主呆庵) 禪門寶藏録〕ありて佛教と祖道とを峻別し、佛教を以て應機門・言說門・淨穢門となし、祖道を正傳門・無說門・不淨不穢門となし、又教と禪に分ちて教を以て百官に比し、禪を以て帝王に比せり。從て崔致遠か「新羅壽昌郡護國城八角燈樓記」〔東文選六十四〕には、當時の僧階大徳に大徳と禪大徳との區別ある<sup>4)</sup>を示し、後高麗に至りて光宗朝僧科制定まりて僧階を立つるや、亦禪宗と教宗とに別定せること前述の如し。(△上面：△又國初以來の王師國師の制度に在りても、今傳はる諸高僧事蹟に倣すれば、略歴王、教宗・禪宗に各一人宛之を置きて權衡を取りしか如し。)

高麗光宗頃、支那江南に在りて文益の法眼宗盛なり。『宗鏡録』の著者杭州永明寺の延壽亦此派に屬す。時に高麗の禪宗多く來りて會下に參す。道峰山慧炬國師〔景德傳燈録〕、靈鑑禪師〔佛祖通載〕景德傳燈録〕、圓空國師〔碑文〕等は皆是なり。就中『佛祖通載』永明智覺禪師〔開寶八年示寂〕

を記して

「師著宗鏡錄一百卷〔詩偈賦詠凡千萬言〕。高麗國王覽師言教、遣使賫書、叙弟子禮、奉金鏤袈裟、紫晶數珠、金澡罐等。彼國僧卅六人、親承印記歸國、各化一方。」

と云へり。麗朝國初に至りて俄然、法眼宗、斯國に盛なりと見るへし。而して法眼宗の宗風は禪を以て教を棄てず、巧に華嚴の理事無碍觀と禪の色空賓(-事)主(-理)<sup>5</sup>の悟覺とを融合して天然の儘に眞性を認めて迷はざるに至在り。

されは法眼宗の弘布は禪・教の角争を緩和するに力ありと謂はざるへからず。然れども兩教對立の大勢は依然たるか故に各一方に走りて佛教の修業の圓具を缺くたり。太祖(頃)は自身の信仰と如哲の勢力に由りて禪宗一門盛に、顯宗以後華嚴・法相の教宗漸く勢を得て禪宗に拮抗し、就中顯宗は法相宗を喜び、文宗は最華嚴宗に皈す。故に教界平靖なるを得ず、佛徒の修業亦禪か教かの一方に偏す。一方に偏すとは何か。大覺國師「講圓覺經發辭」第二に

「世寡全才、〔人〕難具美。故使學教之者、多棄內而外求。習禪之人、好忘緣而內照。並爲偏執、俱滯二邊。」〔文集卷第三〕

と謂へる所以なり。彼は、其の華嚴・天台を通して有する(綜合的)佛教觀は、教と觀と並行雙修して始めて佛教修業の正經(路)を得たるものなり。教を修めて觀を廢し、觀に專にして教を棄つるは共に偏執なり。教とは教理の研究なり。觀とは觀行なり。現象即實在(相)眞如即萬法と立する佛教原理に於て、現象の解釋は即緣起論にして辨證に由り、眞如の證悟は辨證を超越して(實證即)直覺(觀)體驗に由らざるへからず、觀心の內照等の所謂觀法、是なり。斯くて始めて佛祖の眞義に達して之を體得すへし。(◎上面:◎明の智旭著『台宗教觀』に説ける

「教觀綱要(宗)曰、佛祖之要、教觀而已矣。

觀非教不正、教非觀不傳。釋義云、教者聖人被下之言、觀者稟教修行之法也。)<sup>6</sup>

是の意味に於て彼は、當時の教宗徒か多く教に偏して內觀を顧みざるを戒め、又修禪の徒か只管內觀に專にして緣起の眞理を教理に就て究むるを忘るるをも取らず。(◎上面赤字:◎彼の(此)根本主張は『大覺國師集』中處々見るへし。殊に第十六「示新參學徒緇秀」、「示新參學徒智雄」、「示新參學徒慧修」等書に悉し。)是點に於て華嚴の宗密圭峰か、華嚴を以て習禪を棄てず、巧に教義中に禪理を攝して觀法を重し、能く華嚴一乘教に由りて一心即佛、萬行本清淨の理を證悟し、翻りて此を心内に觀照して本心を體驗悟領する者、即教・禪を問はず、佛徒の進むへき正路となす(主張と密に相合す)。圭峰の是意、其の名著『禪言都序』〔⇒禪源諸詮集都序〕に詳述す。故に大覺國師は華嚴宗學に在りて全く圭峰を取る。嘗て圭峰を贊して曰く

「若乃公心彼此、獨步古今。定慧兩全、自他兼利。觀空〔理〕而萬行〔事〕騰沸〔定〕、涉事有〔事〕而一道〔理〕湛然〔慧〕、悟默不失玄微、動靜不離法界者、惟我圭峰祖師一人而已。」

と云ふ。されは、彼の佛教觀に據れば、當時の禪教相争の如きは全然偏執に基き、佛教の圓融觀即綜合佛教觀に達せざるか故なるに外ならず。是に於てか華其の主宰する所、(教宗の第一宗旨たる)華嚴宗內學徒に向ては口に筆に行に、常に教觀雙修を垂示し、圓路を指示して措かず、終に高麗華嚴をして圭峰の華嚴に歸一せしめたり。(◎上面赤字:◎今高麗の華嚴學僧、忠肅王頃の體元は種々の著述を遺せるか、例へは其内、『華嚴經觀自在菩薩所說法門別行疏』〔證觀疏〕之略解は初に宗密の鈔を引きて而後に自説を述ぶ。故に教禪兼修を高調して殆と禪と教との區別を認めざるか如し。體元の傳、今放なしと雖、其の大覺國師の正(系)統を承けし華嚴の學宗なること疑なく、以て國師の高麗嚴宗改造の遺

業を想ふへし。)然れども翻りて相手方の禪宗に向けては本と是れ外宗なるか故に、圭峰の説を傳へて以て偏執を罷め教禪相和し、互に手を携へて佛化を斯土に敷かしむること難し。然るに天台宗<sup>7</sup>は本と三論宗より發達して、華嚴宗に比して一層實體論的方面を重注し、止觀の一門、天台大師の最上法門たり。修禪は該宗不可缺の修業なり(△上面:△にして、教觀雙修は天台宗學の骨髓。教觀の述語、亦元と台家に濫觴す)。(◎上面赤字:◎(南宋理宗朝入宋學曹洞禪)我朝道元禪師の「寶慶記」にも天下の寺院を分ちて寺院・教院・律院・徒弟院となし、教院は即天台教觀修行所なりとし

「道元徧觀經論、師之見解、解了一代其經律論者。獨智者禪師最勝、可謂光前絕後。」

と。教宗中、尤禪に近き者は天台宗、即是也。)彼、此に著眼し、其(後)渡宋して而慈辯從諫に謁して更に證する所あり。即高麗佛教の禪教角立の弊習を打破して教觀並修を以て(教界を)統一して平地に起れる波瀾を鎮靖せしめんには、華嚴の圭峰の宗學の外に(新に)天台一宗を開立し、其に禪・教の俊才(殊に禪宗の新進)を招集し、華嚴宗徒と相應して教學の根柢(本)を此に一定するに如かずと觀破するに至れるなり。<sup>8</sup>斯くて彼は天台宗を開立するに當りてや、第一に、法を準備してせんか爲に從諫大師に親炙して(天台教義を)[五時人教旨]を極め、第二に、伽藍を準備して松都に國清寺の大本山を建て地方に六山<sup>9</sup>を指定し、第三に、人を準備すべく、之を禪學人の淵藪たる禪宗九山の新秀禪僧より取れり。是れ(當時)禪宗の生命元氣を構成する有力有望細胞を奪取て以て、此に其の主義即教觀並修の第一原理を植付けしなり。禪宗を其儘となして此を教禪圓融教觀並修の主義をに同化せしむる能はざるか故に、禪宗より人を奪て以て新に台宗を組織し、其の結果としては等うく禪宗をも其主張に(融)合するに至らし

めしなり。皇統二年[仁宗十年]に撰文せられし長湍郡華嚴(寺)東若頭山に在る「卒國清寺住持了說演妙弘眞慧鑑妙應大禪師墓誌銘」には

「會大覺國師肇立天台宗、募集達磨九山門高行釋流。方且弘揚教觀開一物乘最上法門。宗禪師樂聞其教、遂就學焉。師亦從之。」<sup>10</sup>

と云ひ、全く予の想像説を裏書す。妙應大禪師は即教の雄師にして師の台宗門徒中の翹楚に劣善く師の眞意を諒解する者なり。又教宗元年丁卯に建てられしと推定せらるる(禪宗の大師)清道郡雲門寺「圓應國師碑文」には

「大覺國師西游於宋、傳華嚴義(學)兼學天台教觀、以哲宗元祐元年丙寅尊崇智者別立宗。于時叢林衲子、傾屬台宗者、十六七。師哀祖道凋落、介然孤立、以身任之。大覺使人頻諭而卒不受命。……我肅王四年、宋紹聖五年戊寅、大覺於弘圓寺置圓覺會、以師爲副講師。辭曰、禪講交濫、不敢當之。但參□□講而已。」

とありて、更に明瞭に當時の状況を語り、又既に當時禪門内に在りて彼の遠大なる計畫を看破し、禪講交濫は禪宗を破壊するものなりとなして之に反對せる者ありしを證す。兎に角當時彼の位地權勢を以てあらゆる方法を用ひて禪門より俊秀を招募せるか故に名利の徒は靡然として之に應し其の結果高麗禪宗頓に衰へたり。故に「圓應國師碑銘」に

「偉我大士、出乎東國。歷訪叢林、飽參本□。五家之學、了然胸臆。機敏語奇、箭箭鋒相直。五十載前、祖證將匿。匿而再明、維師之德。」と云へり。五十載前は恰も肅宗の治世に當る。大覺國師台宗開立當時なり。

師は(多く)禪宗より台宗の人を取れるか故に、天台宗の僧階名稱は教宗に則らずして反りて禪宗に據れり。是れ、恐らく(支那天台の法に則れるか、)投來する禪僧等か從前の僧階を其儘繼續して用ふる便利あれば(もあるか爲)なるへし。



是の如くなるか故に轉して彼の眞の宗旨、換言すれば、彼の眞内證問題に入るに、予は、彼の宗旨は華嚴にもあらず天台にもあらず、實に華嚴圭峰・天台智者の教義の骨髓たる教觀雙修の宗旨其物なり。更に言を進むれば、彼に（取りて）は教と禪との區別さへも無用にして其の理想に於ては高麗佛教の全宗旨をは教觀並修の新宗門に併合呑融合せんと欲せるなり（して以て△上面赤字：△三百年未了の教界の論争を根絶し、自ら統一せる教界の法主たらんと志せるものなりとなす。）惜矣哉。（旻）天壽を假さず、四十七歳にして遷化し、未~~未~~（唯）理想實現の片鱗を現して止みしや。（×上面赤字：×金富軾奉教撰「靈通寺大覺國師碑」に彼四十七歳八月示疾を叙して

「秋八月遘疾隱几而坐。或觀心或持經、不以疲憊自止。門人請修佛事。日事佛久矣。」

と云ふ。彼の生涯は能く彼の宗門を證して餘あり。）

彼の禪教融合の大理想に由り宗學としては天台・華嚴兩宗を統制したれば（又禪門にも影響を與へたれば）其の事業は彼の早死と共に挫折し、禪宗に在りては彼の歿後名匠輩出して再度其教勢を恢復せるのみならず、次て普照國師智訥の出るや、全く彼と逆に同一原理即（て）定慧並修（の語を以て標榜）主張~~ヲ以て~~（逆に）禪を以て教を攝して禪教融和を唱ひ、後武臣執政の世となるや、（特別）眷護を禪門に與へ宗勢頓に輝揚す。而して他方國師の高飛車の策略は其反動として先きに師に由りて攪亂せられたる禪宗と天台宗との劇しき争を惹起~~し~~する淵源を造り、利源の競争甚しく大寺富利を相争奪して已まず、以て麗末に至る。例~~は~~（其）尤著しき例は、熙宗七年辛未には台宗総本山國清寺に禪宗の領袖王師靜覺國師志謙を以て住持となすに至り、後又台宗に取返す〔靜覺國師碑及龍巖寺重刊記〕。又水原の萬義寺も幾度か兩宗の争奪を演

せり〔水原萬義寺華嚴法華會衆日記〕。<sup>11</sup>且又後天台宗義の研究に伴ひて餘りに禪に接近する大覺國師の宗學に慚ら~~ざる~~徒出るありて、遂に他派を開くに至れるか如し。（◎上面：◎後忠烈王朝に至り、王、元成公主を迎へて元世祖皇帝の駙馬となり、公主佛典中尤『法華經』を尊信し日夜奉持するに、化せられて後天台宗に皈依し、大覺國師以來の高麗台宗の傑物無畏（→下面右脇赤字→諱~~亦無畏~~未詳以釋無畏〔東文選〕）國師を外護し台宗を中興す。爾來宗勢復盛、麗末李朝初に至る。李朝太祖の初代の王師の一人祖丘は天台宗なり。）（上面：◎世宗朝七宗を禪教兩宗に合せる時、天台宗は禪宗に編入せられたり。其の理由恐らく義天の判教及台宗僧階に在るなるへし。）〔世宗朝の宗旨併合~~狀~~參考。]

## 第二章 普照國師と高麗禪宗の復興

前述大覺國師の全盛當時、一時教宗即華嚴・天台に壓せられし禪宗は、國師の遷後幾ならずして天台宗に内証生するあり、又禪宗内に學徳秀てし僧人・居士の出つるありて漸く頽勢を挽回し、既にして朝鮮禪宗無比恐く空前絶後の大匠普照國師智訥の出で、化を布くに至り、世は偶に武臣執權となり、武臣等は簡易直截の宗義を愛するに依り、厚き庇護を本宗に垂るゝに至りて其勢俄に張り、遂に殆と國初をも凌かんとするに至れり。

今傳はる文獻に於て、普照國師以前の高麗禪宗の支持に功勞ありしは、奇夷子李資玄及其師慧炤國師と圓應國師學一なり。李資玄は文宗三妃の父、即大覺國師の外祖父李子淵の孫なり。登第の後、世華を厭ひて慧炤國師に春川の山奧華岳寺に參し、遂に其隣山清平山文殊院に遯棲し、修禪を以て自ら樂む。道俗來參する者（甚）多し。睿宗・仁宗之を待する、國師以上なり。（『高麗史』に傳あり、『東文選』に什あり。）慧炤國師

は事蹟、今傳はらさるも、種々の碑文を綜合して、其の睿宗朝の國師にして嘗て支那に遊び、禪宗の清規を傳へて高麗禪林の儀則を整頓し、其の葬義に當りては開城に於て行はれ、滿城士女爭て盛儀を觀たり。圓應國師碑は（前引の如く）清道雲門寺に在り、姓は李氏、諱は學一、宣宗元年僧選に中り、更に支那に遊びて天台・華嚴の旨を窮む。大覺國師と時を並へて聲譽蔚然たり。睿宗晩年、王師に冊せんとして果さず、仁宗に至りて遂に王師に封す。仁宗十一年九（月）職を辭し、雲門寺に歸臥し、翌月廿八日、示寂せんとなす。門徒等厄日なるを告ぐるを以て復た脈息を調ひ、十二月九日に至り、剃頭沐浴し説偈、趺坐して逝く。世壽九十三。王、震悼して輟朝すること三日。

高麗佛教を通觀するに、天台の諦觀及義通の二師は所謂西化にして高麗佛教には直接影響を與へず。高麗本國に在りて法化の盛にして當時及後世に教界に與へたる影響の大なるより言へば、大覺國師義天と普照國師智訥を以て雙璧に推さるへからず。前述の如く義天は華嚴より出て、天台宗を開立し、禪教兩宗に接近、融和の契機を與へ、爾後高麗教宗（宗學をして）教觀並修の軌に循らしめ（◎上面赤字：◎たり。但し後李朝世宗朝、佛教宗旨合併の砌、天台宗は禪宗に併合せられし爲に、其の教法自ら泯ひて傳承せられざるに至り。）知訥は禪宗不振の世に出て、之に新氣力を賦與して鼓舞作振するに成功し、高麗獨得の禪法を開きて殆と禪を以て教を攝し、其の著作（編纂）せる諸書は爾來長く朝鮮佛教の必修教科書となり、今日猶全朝鮮の緇流は、教宗たると禪宗たるとを問はず、抑々剃髮の當時より卒業の終迄、是等彼の著篇を捧讀參窮するを法となす。されは教觀並修・教禪融合首倡の功は、之を義天に譲らざるへからざるも、後生朝鮮佛教に與へし影響は寧ろ大覺國師に軼ぐる者ありと謂ふべし。

### 〔普照國師知訥〕

師、諱は知訥、姓は鄭氏、自ら牧牛子と（稱）號す。開城の人、士流の出、毅宗十一年生る。生來多病、父成人するを得は、出家せしめんと誓ひ、遂に由りて大禪師宗暉に就て祝髮す。されは常に師なし。道の在る所、從て學ふ。故に人稱して禪門の散聖となす。明宗十二年、廿五歳にして僧選に中る。南遊して昌平清源寺に於て『六祖壇經』を閲し

「眞如自性より起念る、六根雖有見聞覺知、不染萬境、而眞如常在。」<sup>12</sup>

と云ふに至りて豁然として省あり。明宗十五年下柯山普門寺〔恩津?〕に寓し、大藏經を閲し、李長者『華嚴（合）論』を得て熟讀し、華嚴圓頓の旨を領す。承安二年四十歳春、智異山の無住庵に在りて大慧の語録を閲して更に省する所あり、乃ち大事を了す。承安五年〔神宗三年〕順天松廣山吉祥寺に移錫し、衆を領して法化を行ふこと十一年、蔚然として海東大法窟となる。往々名爵を棄て、隨身する者あり、道場に名を列する者、常に數百人。熙宗王潛邸頃より師の法名を飽聞し、即位するに及ひて松廣山を曹溪山、吉祥寺を修禪社と改稱せしめ、親ら山號を榜に書して賜ひ又滿繡袈裟一領を賜ふ。大安二年春二月〔熙宗六年〕母の爲に法筵を設行し了りて三月廿日俄に示疾、八日にして寂す（享年五十三）。王、哀悼し、諡佛日普照國師と賜ひ、明年文臣金君綏に命して撰文せしめ、豐碑を寺域に立つ。

今日朝鮮佛徒間に傳はる師の著述は『修心訣』『眞心直説』『勸修定慧結社文』『看話決疑論』『圓頓成佛論』各一卷、外に大慧書狀に釋を施す『法集別行録（節要并入）（私記）』を著して荷澤を評せり。<sup>13</sup>何れも朝鮮僧林の正法眼藏なり。順天松廣寺板、嘉慶己未即李朝正宗廿三年、水觀居士李忠翊の跋文ある『修心訣』『眞心直説』を觀るに、此二書は中頃、朝鮮寺刹に亡はれ、

反りて支那に傳はり、居士は却りて~~支那に傳はり~~居士之を燕都に獲たり。其の卷末に康熙佛弟子太學士明珠室覺羅氏祈願の旨ありて大藏經を千佛寺に印造する事を記す<sup>14</sup>。則是二書亦明珠學士及夫人の付割する所なるへし。日本元禄癸酉、僧義詮の編せる『禪籍志』にも單録禪要類に高麗普照『修心訣』一卷及高麗知訥『真心直説』一卷あり、臨濟家多く之を讀めり。但し從來未だ其の作者の傳を知るには及はず。

### 師禪

由來禪宗は教外別傳を標榜し不立文字を宗旨とす。(上面：不立文字以心傳心とは、文字言説に因る説法は、如何に巧妙親切なるも、畢竟理絡義路を出ること難し。理義に向へは、既に體驗并に行とは千里遠し。體驗と行とを通ず始めて眞の理解即證悟に到るへし。是れ、不立文字の成立する所以。其の代りに禪家に在りては修行處環境の淨化と師家の尊嚴を最要條件となし、茲に叢林の清規となり、師資道となる。然れど其實禪家亦文字甚多し。縱令路、義路に馳るを奪はんか爲、~~否~~否定的言説を立前となすと雖、兎に角言語文字に富むこと必しも他家に劣らざる也。我か國師亦其の類に洩れず。理路・義路は奈何に精察なるも、對象の説明理解の外に出ることなし。然るに禪の説明理解せんとする所は對象に非ず、我也。我の説明理解は體驗と行~~事~~の外なし。即自證也。自證の結果は力となりて現れ、智慧識となりては現れず [達磨の面相の觀察]。→下面左脇→禪家の言語は説禪に非ず、單に修行方面と所得の誤謬を説くに過ぎず。従て否定的なる多し。) <sup>15</sup>吾人門外漢の言筈を用ふる餘地あるへからず。されど不立文字を宗とする本宗に何故に斯く文字に富むや。禪宗(家)に用ふる經論は姑く之を措くも、祖師達磨以來傳燈を~~繼~~(宗)師多くは文字を遺す。縱令立言の態度消極的にして非不を主眼とするも、自ら不言非説の裡に自宗眞諦を傳ふるなき

に非ず。門内の人~~は~~之を不立文字と稱すと雖、門外の人より觀れば、到底是等文字を非文字と視做すこと能はず。普照國師は古今禪匠中、決して文字を遺すこと少なき祖師にはあらず。其の極意は、到れば亦畢竟不立文字一字不説の常套に歸すと雖、多少其禪旨の研究闡明すへきに非ず。

師の禪は(禪を以て教を攝融するに在り、~~禪~~に~~細~~に説けば)二觀念より成る定慧及三門、是なり。

師の~~禪~~禪は『六祖壇經』より悟入せるか故に、定慧に由りて開け定慧~~に由りて~~(を以て)終る。師か松廣寺に禪社を開くや、定慧社を以て之に名くるは此意を表すなり。

定慧の説、固より師に始まるに非ず。六祖を初とし、禪門先輩多く之を言ひ、又教家の所説にも頻出す。『起信論』には之を止觀と稱し、(天台の)湛然の『止觀大意』にも止觀即寂照と説き、諦觀の『天台四教儀』には明白に定慧の二字を提出して之を正修十乘觀法の第三におけり。皆全く師の定慧と其義を同うす。但た其の威儀行法に~~異~~相異あるのみ。故に師は『法集別行録私記』に教家修修理智・止觀・菩提涅槃等畢竟、是れ定慧に異ならずと説けり。(△上面赤字：△畢竟教・禪宗を通して定慧二字に於て其の修行の窮極(工夫)をおくとす。定慧到窮すれば則此に覺知に達す。)

定慧は元と戒と合せて貪・瞋・癡を淨滌する三淨法なり。又布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧と併せて六度とも稱す。師か定慧を看破せるは『六祖壇經』の

「心地無非自性戒、心地無亂自性定、心地無癡自性慧。」

及び

「師示衆云、善知識我此法門、以定慧爲本。大衆勿~~迷~~迷言~~定~~定慧外。定慧一體不是二。定是慧體、慧是定用。即慧之時定在慧、即定之時慧在

定。」

に在り。戒・定・慧三學中、特に本心（自性）の體用を提起して定慧となせるなり。即人の本心自性は本と湛然靜寂にして一切對境に~~向當り~~（對する）も毫末も起滅紊亂することなく、惺々了々として~~自覺~~（照）を失はず。即其儘に覺者の心地に在り、別に修律戒行の工を要せず。例へば鏡を磨して錆を去れば光明現す。されど光明は鏡の本具に外なら~~ず~~（さる如し）。夫れ既に佛は即我が本具自性に外ならずとすれば、如何なる修業も心外に出るを要せず。心にして散亂せしめず、充分に其の機能を發揮せしむる所に見性即成佛の途開く。念慮鎮靖して一相の起滅するなきを定と謂ふ。同時に恒常惺々了々として意識玲瓏、一切對境は空の大海に映するか如く來りて映鑑するを慧と謂ふ。衆人は我心を提けて對境に隨順せんとするか故に心常に馳騁散亂して寸時も鎮靖することなし。之に反して我心常に其のあるべき所にありて何事何物も照破して剩すなき作用を四方八面に放つ~~け~~、對境來るも宛ら其の周圍に旋轉服事し、心實に對境の主人となるなり。斯かる心的状態となるを得るは、實に坐禪辨道の第一關なり。定慧漸く熟し來るときは、心常に湛然虛明、行住坐臥萬行に即して環境の主となる。但し此に注意を要するは、世上所謂野狐禪人あり、妄計して本心既に自ら圓成なれば、唯た心の之く所に放任して百事自ら佛行に合すへし、強て之を觀照して定慧を持せんと欲すれば、却りて自繩自縛に陥るに非ずやとなすあるの一事なり。師は之を以て最魔道となし、是の如きは、富者となるの法を聞きて之に満足し自憬し、其法を行して富者となるを要せずと惟ふに均しとなす。

定慧の二字は禪の入門にして又頂上なり。坐禪の要領此に盡く。是要領を以て諸種の禪語公案に對して漸く見地を高め、終に最上乘に達す。禪家は見性即成佛と立て、見性は最初にして最

後、別に高低の階級あるへからすと雖、禪の見地の順序、客觀を主觀に攝し、終に宇宙を一心に轉歸せしむるに至りて極まる〔又無限性の完全なる擊發~~は~~見るへし〕ものなれば、自ら所證に階種なくんはあらず。

（○上面赤字：○師は之を十階に分つ。固より前人の既に言ひ著せる所なりと雖、一々之に~~解釋~~説明を施~~す~~彼の禪風の綿密なるを見る。

定慧雙修は、彼の「修心訣」及「(定慧) 結社文」に於て(徹底) 絮説する所に~~て~~、教禪及念佛諸宗の修業の窮極、此に於て合流すとす。而~~して~~彼は獨り定慧か修業人の心地状態なりとなすのみならず（○右脇：○更に其の意味を擴けて禪定慧學となし）、教禪兩宗々學の特色も此の二字に由りて表はし得、（從て其弊や）禪家は禪定を重して其弊慧學を疎し、教家は慧學を~~重し~~に偏して禪定を~~離る~~（棄つ）。共に修業の正軌に~~叛く~~（を離る故に）~~定慧~~（禪人・教人共に）慧學・禪定雙修して始めて眞の佛教々學圓成すへしとな~~す~~如し。此に大覺國師の教觀併修と全く同一觀念の存在を肯定すへ~~し~~（きか如し）。結社文中、禪人の弊を述へて心性本淨煩惱本空なるを信解し、而~~して~~此の信解を内觀に由りて證すへしと云ひ、終に

「若能若如是、定慧雙修運、萬行齊修、則豈比夫空守默之癡禪、但尋文之狂慧者也。」

と云へり。是の觀念、圓頓成佛論に至りて更に一層の具體的發展を見る。）

「圭峰も外道禪・凡夫禪・二乘禪・大乘禪・最上禪の五種を立せり。但し圭峰は禪の種類を横に擧げたるものにして目的上の區別なり。師は同一目的を有する最上禪裏に在りて到達する所の境涯に就きて縦に十種に分てり。固より其意義は古禪匠の既に道破せる所なるも、亦師の工夫の緻密なるを見る。一覺察・二休歇・三泯心存境・四泯境存心・五泯心泯境・六存心存境・七内外全體・八内外全用・九即體即用・十透出

體用、是なり。』<sup>16</sup>

(師) 碑文に曰く<sup>17</sup>

「開門有三種。曰惺寂等持門、曰圓頓信解門、曰徑截門。依而入者多焉。禪學之盛、近古莫比。」以て師の修禪に三門あるを證す。第三徑截門は、無上法門にして禪家の所謂眞覺甘露門、此外になく、第二圓頓門は、教家殊に華嚴の見地より悟覺に進む門なり。第一惺寂門は、道と言はず俗と言はず、教と言はず禪と言はず、皆修して效あり。久しうして益々安樂を得る(平等)對治門なり。第一惺寂門の消息は師「修心訣」に於て之を説くこと最詳、以て漸門劣機の行する所となす。初心の人、本門に入るには、初中夜に靜室に端坐し、散亂する心を攝収して靜寂として又昏蒙に陥らしめず、心裡一點の靈覺(惺々と沍)外を照さしむ。師、此境地を還源の妙性と呼ぶ。心の體用即如に現前して隨緣動搖散亂するなければなり。漸く工夫純熟するに從て、靜室裡に獨坐する時のみならず、行住坐臥に寂惺なるを得、終に煩惱の退治すへきなきに至るへし。

師は、「五位修證圖」に杭州祥符寺傳華嚴明義大師曇慧の序文に圓頓の語あるを擧げて以て華嚴圓頓の旨の禪の頓悟と擇ふなきを説き、圓頓信解門を開きて華嚴教より進みて見性せんとする者を接せり。蓋し李長者の『華嚴論』は華嚴教中頓悟を重注し、「衆生無明心即諸佛不動智~~なる~~又自己身語意及境界之相皆從如來身語意境界中生」と説くを引證して、華嚴教の極致は頓悟に在り、頓悟に在るか故に(◎上面赤字:◎必ず因果門の理論を離れて觀行門より菩提を速證せざるへからず。故に曰く華嚴の説理は之を悉すと雖、唯た客觀的對象の説明解釋を悉すに過ぎずして、直下に我か自性一心を了する能はず。故に華嚴の教旨を如實に奉して能く頓悟了心に到らんと欲すれば、更に)禪に進まざるへからずと斷す。之を(有名なる)圓頓成佛論となす。

(△上面赤字:△

「非謂華嚴教門、説理未盡。但學者、滯在言教義理分際、未能忘義了心、速證菩提。所以達摩西來、欲令知月不在指、法是我心、故不立文字以心傳心耳。』)

即師は、華嚴教理に依りて(佛法の理致を)悟覺せんとするは不可なしと雖、單に華嚴教を修するのみにては信解(見性の眞實證解)に於て徹底(成就)する能はず。先づ教に依りて如實知見を立て、更に進みて禪那の修行に由りて此の佛性を(我か)心裡に(證)見ざるへからず。(是れ)彼か(禪主)教從の宗風を開きて、遙に(禪を以て教を融攝せる)李朝西山大師の爲に祖師たる所以なり。(◎上面:◎果然天台の大徳多く來りて修禪社に參するや)『法集別行錄簡要』(私記)に曰く)

「上來所擧言句、雖提接來機、而旨在心識思議之外、能與人去釘、技楔脱籠、頭卸角馱。若(善)能參詳、可以淨盡前來佛法知解之病、到究竟安樂之地也。須知「而今末法修道之人、先以如實知解決擇自心、眞妄生死本末了然。次以斬釘截鏃之言、密々地子細參詳。而有出身之處、則可謂四稜著地、掀擱不動、出入生死(⇒出生入死)、得大自在者也。」<sup>18</sup>

是れ、蓋し知慧と體驗との論にして其旨大覺の教觀雙修と異なるなし。(△上面:△而して禪教兩宗を標榜する現在に至りても朝鮮佛教の教義は普照國師圓頓門の外に出るものなし。)

華嚴圓頓教も究竟地に到れば、唯佛與佛相證すと説くと雖、其の教義の立場は所謂證理成佛にして、其證入に理路義路を没する能はず。禪に至りては其標榜する所聞解思想を絶す。所謂五教の詮を忘れ~~ぬ~~て五教の旨を領するなり。此に於て徑截門立つ。最簡易直截に佛心を會得せしむる禪門と謂ふなり。師の見解に據れば、等うく禪宗中にも徑截門看破せしめて尚全く思量分別を擺脱する能はざるあり、徑截門を唱道して

在來佛心宗に百尺竿頭一步を進めたるものを宋の徑<sup>19</sup>山大慧禪師となす。彼は圓悟の上足にして嘗て師著『碧巖録』の評唱を熾きて自ら罵天翁と稱す。師は何故に大慧の禪を徑截門となすか。師は徑截門以外の話頭を大別して全提と破病となす。全提とは、一話頭内に佛法の大意を全提せるを謂ひ、破病とは、機根に應して諸種の病見を破斷するを謂ふなり。而して師は二者共に尚義路理路に渉るを免れずとなす。何となれば、共に之に參する者をして語の意義に參究せしむればなり。意義に參究する語句は、之を死句と稱す。何となれば、奈何に之に參するも意義に束縛せられて解達に到達せされはなり。(△上面：△解脱とは、自己の束縛を解くの謂にして對象を説明する謂に非ず。)解脱とは、渾身の心力を傾倒し、無二無三に參究して然後始めて得らるゝ體驗なり<sup>20</sup>。徑山、此に一轉進を試み、古來宗師の傳習的規(軌)範を脱して無味冷淡無意義なる所に話頭の活用あらしむ。參究者をして義路理路に趨く能はず、統一せる全人格(我)の力を以て參究し、寂々惺々、一念、此に凝結して終に噴地一發の機到來す。全力を盡せる場合に遭遇して我か力量を體驗する如し。(◎上面：◎(例へは)大濤の岸壁に突當りて崩れて返るか如し。崩れ返るとき、我(自性の)當體見る。絶對的定に至りて絶對的慧現す。(定慧の)絶對的境涯)之を見性と謂ふ。師、徑截門悟覺の例を擧げて曰く、水潦和尚、馬祖採籐の處に就き祖師西來の意を問ひ、馬祖の攔胸一踏倒せるに依りて直下に悟覺せる如き是なりと。其外、庭前栢樹子、麻三斤、狗子無佛性、等の如き皆是徑截門の活句なりと云へり。(上面右赤字：斯くて定慧看<sup>21</sup>(破)は壇經により、圓頓の悟入は華嚴論により、徑截門の開<sup>22</sup>(確信)は大慧の書狀よりす。)

(×上面赤字：×徑截門は是れ師の最上乘法門にして其本領此に在るなりと雖、固と大根機の人に

非ずんば、此門より入りて頓悟大成する能はず、又由りて以て教人を誘導する能はず。圓頓門か彼の三門中尤其の影響(◎左脇：◎接應する所廣く)(大)に涉、此を通して修禪社の盛なるを致せる所以も、此一門に(依)存す[定慧社結社文參照]。故金君綏の碑文には彼の一生の法門を全提して

「始於尋詮而詣理、終於依定以發慧。」  
と云へり。)

#### 〔國師寂後〕

普照國師寂し(『禪門拈頌』の著者)眞覺國師慧謔、號無衣子、紹きて第二世となり、法燈益輝き。康宗王、遙に名を修禪社人に列し、執權崔怡亦弟子と稱し、二子萬宗・萬全を送りて(弟子となり)參侍せしむ。爾後松廣寺歴代國師を出すこと十六世。麗末禪宗の三(王)師は一度は名譽住持として松廣寺を兼帶する例となれること、懶翁無學の事蹟に見るへし。後恭愍(忠肅)王朝に至りて西天の指空和尚來りて無生戒を説きて機鋒を奮ひ、(太古及)懶翁<sup>21</sup>の三(及白雲の三)禪師、元に赴きて江南臨濟第十八代の正脈を受けて返り、大に支那臨濟正宗を鼓吹し、共に恭愍王の王師となり、一時高麗の禪宗滔々として臨濟化せるか、後李朝太祖の七年、興天寺の修禪社主尚聰は上書して、麗末所謂支那臨濟の宗學傳來してより禪寺の作法威儀、濫りに支那に模して畢竟、畫虎類狗の陋に墮ちたり。如かず、普照國師の遺制<sup>22</sup>に復して朝鮮禪宗固有の純に返らんには。太祖之を允す<sup>22</sup>。是に至りて朝鮮禪寺の作法威儀、松廣寺の制度に還る。後世宗朝、七宗を合併して禪・教單兩宗となすに至りても、恐らく依然禪宗に在りては是制を襲はるなるへし。是れ、普照國師の著述の朝鮮禪僧の必修教科書となれるに就ても推知すへし。李朝に至りても松廣寺は朝鮮(寺刹中)人寶第一とせられ、現に今大本山に列す。(佛寶第一通度寺、法寶第一海印寺)

### 〔大覺・普照二師出現の意義〕

(×上面赤字：×大覺・普照二師の出現は、朝鮮佛教思想史に於ける尤重大なる事件に於、由りて明白に一時期を畫す。即其以前迄は、朝鮮は禪教對立相爭の時代に於、各々只他の我に比して劣機なるを擧論するに止まりしか、二師に至りて禪・教を視るに佛教々義の一面觀を以てし、兩宗義(の骨髓宗學)を並修雙習して始めて佛教の全義を盡すものなりとなす。所謂正・反より合の見解に達せるなり。只た其の雙修並習に於て、主とする所の教に在るは大覺に於、禪に在るは普照なるの差あるのみ。二師の綜合的佛教觀は、其後幾多の學匠(の研究)と幾百年歲月を經過して依然として朝鮮佛教の徒、最後の最上の佛教認識を形作り、他方李朝に至りて抑佛教政の終局、數多かりし宗旨を禪・教の單二宗に省減せしむるに至りて一層其の觀念的統制力を強め、遂に大體、教を主とする教觀雙修と、禪を主とする定慧並習とか、更に歩み寄りて茲に禪主教從、換言すれば、學人先つ教より入りて佛教々學の正當見解を立て、次に禪に進みて其の知解を心内に反照して體驗する所あるへしと云ふに最後の落著を見。禪教兩宗は對立二宗旨の意義を失ひ、修業の前後の名稱となれり。横の存在ならず、縦の存在となるに至れり。而して普照國師の著述、全佛徒の教科書となれり。⊖)是れ、朝鮮佛教の眞成判教にして、其の成立の淵源實に大覺・普照二師に在り。◎左脇◎李朝宣祖朝名僧西山大師休靜著『禪家龜鑑』『禪教釋』は即恰も此の朝鮮佛教最後判教建設の役目を果すものなり。)

### 第三章 朱子學の輸入及斥佛論の勃興

毅宗朝武臣(崔忠獻：鉛筆)文臣を倒して專權してより文教漸く忽にせられ、既にして蒙古の大寇、全國に瀰漫し、あらゆる教學機關を破壊

し、高麗學事の命脈縷の如し(◎上面赤字：◎『櫟翁稗說』(及安珣の學論)引用)。斯の如き亂世に在りても、獨り佛教は歷代朝廷及執權崔氏一門の厚き庇護を受け、殊に禪宗尤其の寵眷に浴せるは前述の如し。京郷の學堂は多く燬かれ、教官・訓導逃亡して復た鼓篋の人なきに至れるに、山間寺刹には法燈依然<sup>こゝろ</sup>として輝き、居僧等衣食に事缺かず(皆(豊なる)土田臧獲を占有す)。國家及崔氏一門の爲に丹誠を抽て、福利を祈祝し、且靜に其宗學を修め傳へて法統を墜さず。されは京師の文臣等も、時相の險惡なると八道亂離にして足を卓するに所なきとに由りて、祝髮して袈娑を嬰<sup>ま</sup>ひ叢林に入る者、前後相踵く。李齊賢の史論~~に~~(『櫟翁稗說』に)忠宣王一日、益齋に問て曰く、吾國古代文物、中華に比すと稱するに、今の學者皆釋子に従て章句を習ふは何故なるかと。益齋答へて、國初奎運斐然として昌なりしか、毅宗末年武人の變起りて文臣多く禍に遭ひ

「其脱身虎口者、遽逃窮山、脱冠帶而蒙伽梨、以終餘年。其後國家稍復用文之理、士子雖有願學之志、顧無所從而學焉、未免裹足遠尋蒙伽梨而遯窮山者以講習。」

と云へり。されは、高麗文教停頓時代に在りて、諸宗寺刹の學事に於ける位地は、恰も我國足利氏時代の京都五山に酷似し、一綫學脈を繋ぎて以て蒙古との和議成立し、崔氏(倒れ)國都開城に還り、國學復興し、學事再度文臣の手に歸する迄に及へり。

元世祖⊖(か)對高麗政策⊖(を)變革に由り⊖(し)武力を以て征服するを已めて、専ら情誼に由りて親善關係を締し、屬國としての形式的禮儀を執らしむるに至り、俄に(元・麗二國の)關係、本家分家の如く松都と北京との間、公私の交通相踵いて絶えず元の文化滔々として高麗に入る。然るに之を佛教に就て觀れば、麗末太古・懶翁の(江南地方より)臨濟宗將來は

ありしも、本と是れ北元の宗旨にはあらず。(元固有の)喇麻教の如きは、今猶朝具體的に是邦に入りて(或は)民信を得、或は高麗佛教に影響せるを證するに足る資料を發見せず。反りて高麗の僧徒源々として燕都に赴き、高麗婦女の元の(皇室)士大夫の嬪妾として内房の重要役目<sup>23</sup>を演ずると相應して、高麗佛教を元に於て演宣する者少からず。(又)元朝制定の巴思八文字も果して高麗にも使用を強いられしか否や(て流行を見し)をも證する能はず。然るに此に端なく忠烈王朝に至り、燕京より文臣安珣に由りて朱子學を輸入せらるゝや、其後元朝科制の新定と相須ちて容易に高麗儒學を朱子學を以て統一し、更に進みて羅・麗二代の國教たる佛教の思想的權威を顛覆し、以て遙に李朝の單一朱子宗を開く淵源を成せり。朱子學は勿論(南)宋の思想的産物に屬するも、其の高麗に傳はるは、元・麗親善關係の致す所に外ならざるか故に、姑く之を元の文化の高麗に及せる絶大の影響と視做し、(此に至りて)朝鮮思想史劃期的は一時期を劃するものとなす。

## 第一節 安珣と朱子學

### (一 事蹟)

安珣、初名は裕、晦軒と號す。李朝となりて文宗の諱を避けて一般に裕を以て稱す。高宗三十年興州城内坪里村鶴橋側の自第に生る。今の順興なり。父諱は孚、州の吏屬(醫を以て)出身にして官密直副使に至る。(晦軒)十八歳科擧に及第して校書郎を授けらる。廿八歳の時三別抄の亂あり、彼一旦捉へられしも巧に脱還り、之より王に知られ、爾後官位順調に進む。忠烈王十四年王彼を薦めて高麗儒學提擧となす。元の官に於て高麗學務の長官なり。其翌年王に従て元都に赴き、其翌年新刊朱子書を見、手つから之を抄寫し、又孔子・朱子の眞像なる者をも寫して還る[安氏家乘]。忠烈王十六年[西紀一二九〇]

なり。五十五歳世子貳保に進み、私第の後に精舎を建て、孔朱二子の眞を奉安し、尚朱子景慕の意を寓して自ら晦軒と稱(號)す。五十六歳、忠宣王に隨て復元に往く。五十八歳相に拜し、翌年俸錢を文廟再建に寄附し、又土田臧獲を太學に寄附して養賢庫の資を贍にす。忠烈王、其擧を贊襄して内庫の錢を賜ひ、又官人各資を出す。六十一歳の時、太學博士金文鼎を支那江南に遣して、先聖及七十子の畫像并に祭器樂器及經史子集の漢籍、朱子の新書を購還らしむ。是後彼の歿後、忠肅王元年には博士柳衍・學諭俞迪を江南に遣して經籍一萬八百卷を購還らしめ、元朝廷亦特に宋秘閣の藏書四千七十一冊を賜ふ。高麗の漢籍、此に至りて充贍するを得たり。六十二歳大成殿落成し、先聖の像を安置し、王に請て謁聖禮を舉行す。爾後彼は最力を諸生の教育に致し、諸方の學生の來學する者常に數百人、儒風大に振ふ。茲年致任せるも、猶其の翌々年歿する迄、一日として興學育材を怠らず。歿する年、六十四歳。文成と諡す。後十三年忠肅王の二年、彼の(學廟の)復興と儒學の先唱(の功)とに由りて彼を文廟に従祀し、子孫歷世衣冠に列す。李朝に入り、儒學を盛にせる太宗は、其二年彼の子孫を兩班清門に録し、永世賤役に服すること勿らしめ、成宗廿三年命して彼の墳墓を修し、樵牧の入るを禁し、永世守塚軍三十名をおき兵役を免し<sup>24</sup>、中宗卅七年、豊基郡守周世鵬、順興に於ける彼の讀書の地に就て白雲洞書院を建て、後明宗四年同郡守李退溪の上書に因りて紹修書院の額を賜はる。朝鮮賜額書院の權輿なり。後仁祖二十一年長湍の儒生等、彼の墓の所在地に書院を立て、肅宗王臨江書院の額を賜ふ。

## 二 學說

晦軒の學說、今傳はるもの殆となし。惟た(晦軒事蹟には)權近の『陽村集』に彼か六十二歳



大成殿新築落成の時製して學生に示せる短文一篇あり（と云ひ）<sup>25</sup>、内に佛教の夷狄の教にして倫常を蔑にす。然るに近年干戈續けるの餘、高麗學校頽敗して學者喜ひて佛典を讀むに至れり。吾嘗て中國に於て朱晦菴の著述を得て聖人の道を發明す。仲尼の道を學はんと欲せば、先づ朱子の學を學ぶに如くなし。爾今諸生宜しく新書を讀みて勉學忽にする勿れと。是のみ。（されど）兎に角本文に據りて、彼か一世に率先して朱子の新學を高麗に將來して（△上面赤字：△（以て）新羅朝以來の訓詁的漢學を一變して儒學道學たらしむるの基を開き立て）是を以て聖賢の~~心~~（心）學を開き~~て~~（丕闡して）以て佛教に對抗し、舉國溺佛の積弊より救はんと決心せるを見るべきなり。此の外『晦軒集』『晦軒實記』『安氏家乘』等あれども、太抵『東文選』『麗史』、碑誌、『益齋集』『陽村集』等に散見する彼に關する斷片的記録を蒐集せるに外ならず。

『晦軒集』に門人録を附し、彼の門に遊へる者を列記す。之に據れば、（彝齋白頤正）菊齋權漣・稼亭李穀・易東禹倬等の儒者は悉く之を籍録し、更に降りて麗末李牧隱・吉治隱に及び~~次~~（~~之~~に）~~續~~（○上面赤字：○以て直に李朝の儒者に傳承す。）學者或曰として

「治隱學於圃隱陽村、圃隱陽村之學出於益齋牧隱、益牧之學出於菊齋、菊齋又出於晦軒。我東儒學始於晦軒、而恭愍時牧隱聚士教之、一時忠臣義士多出其門。如圃隱雖不全學於牧隱、亦因其獎勵、興起而成就。麗朝學問、前有晦軒、後有牧隱圃隱、而晦軒首唱之功爲最云。」

晦軒門人録は、晦軒學統をして麗末に止らしめず、更に下りて李朝學者に迄聯絡せしめ、終に彼の中宗朝の趙靜菴をも其の源流に収めたり。即

「吉再治隱學於圃隱陽村、而金江湖學於治隱、傳于子佔畢齋。金寒喧鄭一蠹學於佔畢、趙靜菴學於寒喧。」

是說にして眞ならしめは、彼は禪宗の達磨の如く、麗・李兩朝道學の始祖にして李朝の學者も其幾代かの後裔たるなり。文獻乏しき高麗朝故、充分之に對して反證を擧ぐる能はずと雖、『麗史』列傳によれば、彝齋・菊齋・易東三人者は晦軒に従學せる事實なく、反りて三人共に其々單獨に直接朱子の（著）書によりて啓發せられて朱子學を唱道せる如く記せり。之に反して「晦軒列傳」には前引「論國學（諸）生文」~~に~~（を眞とすれば）明白に彼か（率先）朱子學將來の事を證すへきに拘らず、之を省略して單に國學文廟復興の功績を云ふのみ。此の事に關しては前引（上面赤字：白雲洞書院の建設者に~~行~~）（『竹溪志』の著者たる）周慎齋も以て『麗史』の缺典となせり。されど晦軒門人録に彝齋・菊齋・易東三人の皆彼の受學門人と云ふは、何等史實なきものとなさるへからず。同時に他方『麗史』の是等三人者各單獨に朱子（學を）將來して三人共に麗朝朱子學主唱者の稱を博するか如く記するは、亦中<sup>めた</sup>れりとなすへからず。晦軒か元都に赴けるは前後二回にして、『家乘』には彼か朱子の新書を獲しは第一回次にして、第二回次には元の學者に向て性理の説を述へて大に之を驚せりとなす。『麗史』は彼か晦軒と號し朱子景慕の意を寓せるは、彼の晩年に在りとなす。假りに彼か朱子書を獲還れるを其の第二回入燕の時なりとするも、之を三人者の朱子學唱道の年代に比較すれば、遙に早し。李益齋の麗史々論に據れば、彝齋の赴元回國は忠肅王朝に在り、菊齋の『四書集註』の鏤版は尚其の後に在るを明記す。而~~行~~禹易東に至りては其成均祭酒となりしは忠惠王朝に在り、彼に比して一世三十年を遅る。彼朱子學~~唱道~~（紹介）の三人の何人よりも早かりしは、明白にして疑ふへからず。又安軸の『謹齋集』に大元天曆己巳〔忠肅王十六年〕所撰「高麗國匡靖大夫檢校僉議贊成事兼判典儀寺事上護軍」安公于器墓誌銘あり。于器は晦軒

の子なり。簡略に父晦軒を叙して  
「文成公有中興儒學大功、食夫子廟。」  
と云へり。中興儒學は單に國學文廟校舍再建を  
意味するに非ず。朱子學の唱道に由りて高麗儒  
學を再（中）興せる意なること固よりなり。益  
齋も晦軒孫「謙齋眞贊」に

「安文成公爲世儒宗。」

と云へり。亦謙齋の所述と同意に解すへし。  
予は、寧ろ（何かの資料に據れるものなるへき）  
『家乘』を認めて、彼か元都より（新刊）朱子  
書を齎還りしは彼四十八歳忠烈王十六年庚寅に  
して、是年代は現今知り得へき朱子學東方傳來  
の記憶すへき年代なりとす。

（△上面赤字：△但し李益齋か五十六歳至正二年  
壬午〔忠惠王三年〕撰せる所の『櫟翁稗說』前  
集二に、嘗て神孝寺堂頭正文なる老僧を見しに、  
于時歳八十、善く語・孟と詩・書とを説き、『詩』  
は王安石の經義を用ひ、語孟は集注、『書』は蔡  
傳を用ふ。是時『四書集註』猶未だ東國に到ら  
ず。正文、果して何れより之を學へるかと記せ  
り。果して然らば、正文老の『四書集註』及『書  
蔡傳』を觀るを得しは、權菊齋より早きは勿論、  
安珣との前後亦俄に判斷すへからず。朱子（註）  
の經書か安珣以前、既に高麗に齎されしこと或  
はあり得へきか如し。一説として記す。）

彼一度新學を太學に唱道してより後進の文臣  
學者翕然として之に隨和し、白頤正・權溥・禹  
倬・尹莘傑・李瑱・辛威等相承けて之を唱へ、  
遂に麗末に及び（李益齋<sup>26</sup>）李牧隱・鄭圃隱・  
鄭三峰・權陽村等を出すに至れり。

### （三 元朝の朱子學）

今彼の朱子學首唱を述へ訖るに當り、（當時）大  
元の朱子學を瞥見（して其の學の淵源を簡述）  
せんとす。

元太宗は、國家守成の大業は儒臣を用ふるに非  
されは不可なりとし、其九年經義・詞賦・論の

三科の科擧を設け、儒人の人奴となれる者亦就  
試するを許し、匿して遣さるる主は死すること  
とし、凡そ（士）四千三十人を得、其中、奴  
四分一に居る。翌年燕京に太極書院を建て（姚  
樞の推薦せる）俘趙江漢を院長となし、中に周  
濂溪の祀堂を設け、配するに二程・張・楊・遊  
（上面：遊酢）・朱の六先正を以てし、宋の遺書八  
千餘卷を納む。江漢は南方の人、程朱學を奉す。  
當時、朱子卒後未だ四十年ならず。加ふるに宋  
末僞學の禁嚴なりしを以て、朱子の學未だ北方  
に行はれず、北方の學者之を知る者なし。是に  
於て江漢、義農堯舜孔顔孟以後より以て周程張  
朱に至る「道統圖」を作りて以て教授す。太極  
書院は北元理學の淵源にして江漢は其初代の夫  
子なり。彼に受學する者に姚樞あり、樞の學を  
傳ふる者に許衡（魯齋）あり。（衡）世祖の値遇  
を得、國士祭酒を授けられ、上書して國學の規  
模を立て、其弟子十二人を以て大學の齋長とな  
して學徒を教養す。十八年卒す。享年七十三。  
文正と諡せられ、皇慶二年孔子廟庭に配享せら  
る。魯齋に至りて元の國學の學規成り、~~元~~朱子  
學、元國學の正學となる。是れ、抑々後仁宗皇  
慶二年科擧の程式を定むるや、四書集註、易の  
傳義を以て擧人を試むることとし、朱子學、  
遂に大元の官學となるに至る源を成す。

安晦軒か元に赴きて朱子書を得たる忠烈王の十  
六年庚寅は、元の世祖二十七年にして、魯齋の  
歿後閏年九年。彼の弟子等、師學を繼承して益々  
之を興す。姚牧庵・耶律文正・王本齋等の諸人、  
或は大官として或は臣儒として程朱學を唱道し、  
道學漸く全元を浸灌せんとする時なり。從て朱  
子書の新刊せらるる者相踵く。而して許魯齋の學  
は『小學』より悟入し深く（確乎と云）『小學』  
に於て立つ所あり。其の學徒に謂て曰く

「昔者授受殊孟浪也。今始聞進學之序、若必欲  
相從、當率棄前日所學、從事小學之灑掃應對以  
爲進德之基。」

又曰く

「小學之書、吾信之如神明、敬之如父母。」  
蓋し儒教の爲學の順序は、『大學』に由りて定め、必ず近きより遠きに及し親より疎に及す。是れ、其道の楊・墨の兩極端に比し中を得る所以なり。苟も修身に於て得る所なくんは齊家に於て望むへからず、齊家に於て成るなくんは治人の業に施すある能はず。修身一事、是爲學の根蒂なり。  
(而シテ) 學校庠序の如き子弟教育機關は、學者をして齊家治人の練習を成さしむる能はず。然れトモ子弟をして嚴に修身を成さしむるは即他日成人となりて齊家治人の業に進ましむる楷程に外ならず。故に古の庠序學校は先づ學徒に授くるに『小學』を以てす。『小學』を訖へて『大學』に進む。『小學』は事を事として直に之を踐履實行に移し、『大學』は踐履と兼ねて其の(事の)理を發明せしむるなり。亦行を先として知解を後とす。されは、若し従前儒教的教育法の行はれさりし地域に在りて、新に朱子等の主張する所の教育法を施行せんと欲せば、先づ學徒に授くるに『小學』を以てして下學修身の様本を樹(樹)立し、以て従前の異習を洗除せざるへからず。若し是事成し得ずは、縱令上達の部に屬する諸他理氣性情の哲學を教授すとも、例へは沙上に大厦を建るか如し。行を離れたる知解に過ぎずして儒教の精神、蕩然として空し。一個の哲學思想として流行することあるも、百姓人民を感化陶冶して道儒教的國家社會を作出すこと能はず。魯齋か蠻夷の習俗なる北元に教學を打樹つるに當り、『小學』を以て教科基礎となし、行より入りて學徒を儒化せるは、深慮ありて其定礎宜しきを得たりとなさるへからず。是れ、一には魯齋其人の性格、元來德行の人にして言語文章の人に非ざるにも因ると雖、元に朱子學を移植えて百年教化の基を開きし卓見を推さるを得ず。

(×上面赤字：×晦軒果して燕京に在りて魯齋の

學に接する機會を得るに及へるか否や、今徴するなしと雖、前後二回の滯燕中、若干當代元の學者の力を注く點的那邊に在るかを會得するに至りしかとも想像せらる。晦軒か日常子弟の禮に就て責むる所峻嚴なりしは、諸生の先進を禮せざるや將に罰せんとし、生誓て纔に免せるあり。又列傳に彼の人物の評に

「珣莊重安詳、人皆畏敬。」

とありて、彼か小學流の持敬嶄々、一言一行、苟もせさりし人なりしを記す。されは晦軒か果して魯齋の影響を受けしや否やは、今日何等之と與否を決すへき資料なしと雖。されトモ、晦軒か元初の朱子學萌動の氣運に感じて之を受學せりとすれば、許魯齋の學の外に之を源を歸すべき者なく、又魯齋の學風を受け歸れりとなすも、彼の所説及踐履に照して矛盾する所なきは、之を承認せざるへからず。

翻りて(思ふに)晦軒當年の高麗は、甚た魯齋當時の元に類す。羅・麗七百年の崇佛は社會の禮俗をして多く佛教に循らしめ、吉凶の禮行住の追遠の禮習、儒教に準據すること稀なり。是の國に於て儒教を興し風習を一變せしめんと欲せば、同しく魯齋の前踵を履みて先づ學徒に教ふるに洒掃應對日用行事を以てし、修身の規模を確立せしめざるへからず。斯くて始めて新學々徒は其の作法威儀に於て既に舊學徒と飄別せられ、形式(外觀)にも其立場を定むるに至る。されは、晦軒か魯齋の學風を輸入して先づ踐履を以て學徒を教導せりとせば、高麗新儒學をして佛教と對抗して順當なる發達を遂けしむるに極めて適當なりしとなさるへからず。是の學風、其後元の儒學の益々朝鮮に輸入せらるるに從ひ、益々其の特色を發揮し、麗末鄭圃隱より吉再を經、李朝の金叔滋、(其子)金宗直と傳承して更に寒金宏弼・鄭汝昌・趙光祖に及ひ完全に『小學』學派の實を備へ、中宗頃迄儒者と言へは『小學』奉持者を意味し、小學宗

を以て道學（者）の異名となすに至れり。

## 第二節 斥佛の議論と太學の活動

忠烈王朝、安珣太學を復興し、新將來の朱子學を此に講（唱道）し、（後）進之に隨て朱子學漸く高麗に興るを見たりと雖、其の高麗國の官學となり、苟も挾冊の子弟、學へは即朱子學の外なきに至れるは、忠肅王朝以後の事に屬すと推定せらる。即『麗史』に據れば、忠肅王元年、元朝、使を遣し來りて科擧に關する詔書を頒ち、王、權漢功を元に赴かしめて初めて科擧を行ふを賀せしむ〔以前太宗朝の科擧は漢人多く及第するか故に蒙古人の不滿を招き未幾に停止せり〕。其翌年は從來高麗の科擧を東堂試と稱せるを改めて應擧試と謂ひ、之に及第せる者は元に之きて應擧せしむることゝなせり。其春、朴仁幹等に及第を賜ひ、仁幹等三人を元に遣して科擧に應せしむ。

（然れど第せず、◎上面赤字：◎制科及第は其四（五）年應科及第せる安震に始まる。）忠肅王元年は即元の皇慶二年にして其前年仁宗皇帝は中書省の上奏に聽きて愈科擧制度を全版圖に施行せることとし、慎重に立案審議せしめ、皇慶二（二）年即詔書を全版圖に頒つ。此科擧の制度、經義に在りて、『四書』は朱子集註、『詩』は朱註を以て主となし、『書』は蔡傳を以て主となし、『周易』は程朱の傳義を以て主となし（△上面：△尚古註疏を兼用するを許し）、『春秋』は三傳及胡氏傳、『禮記』（〔朱註なし〕）は古註疏を用ふることゝ定む。而して高麗は女眞・契丹・中國の一部人と共に所謂漢人中に編せらる。従て科擧、中國人と差違なし。是の科制一定して高麗に頒たるゝに及びて、高麗の國試の自ら之に則りて經書解釋を主として程朱の註釋に限定し、施いて國學の研經窮理、悉く朱氏の學を用ふるに至る。されは、安珣の唱學は、忠烈王朝燕京滯留當時、朱子學【第三册⇒第四册】流行に感發せる

ものなるも、彼の首唱か爾後益々忠實に有力に後進に由りて隨唱せられ、遂に高麗の儒學を完全に朱子學に由りて統一して以て李朝儒學の原を開きしは、其實際の源因は元朝科制の確定、換言すれば、元朝か朱子學を官學と立てしに在りと謂はざるへからず。前述白彝齋か忠宣王に從て留元（十）年、多く程朱の性理の書を求めて歸り、又權菊齋か四書集註を鏤版せるは、皆皇慶二年以後の事に屬し、高麗も元に倣て朱子學を官學と定めしか故に、程書の弘布の必要起り。之に應せんか爲（に）彝齋・菊齋（二氏か其の）事業（を成せるもの）にして其の朱子學普及に大功ありたるをは、『高麗史』に誇張して性理之學此に開くと記せるなり。

元滅び朱明天下を統一するや、朱子と同姓なるを縁とし、一層朱子を尊宗し、元朝の科制を踏襲して科擧章程を立つ。是の謀に參畫せるは、宋濂其人なり。茲年即恭愍王十九年、太祖侍儀舍人ト謙を遣して來りて科擧程式を頒たしめ、詔して曰く

「高麗・安南・占城等國、如有經明行修之士、各就本國郷試、貢赴京師會試。不拘額數、選取。」と云へり。其後暫く科擧を行はさりしか、洪武十五年復た設科、士を取り、洪武十七年に至りて愈々三年大比の制を確定し、詳細に章程を確定す〔明會典に~~三三~~。其の經義に關しては『四書』は朱子集註を主とし、『詩』は朱子集傳を主とし、『春秋』は左氏・公羊・穀梁、胡氏・張洽、『禮記』は古註疏を主とす〔後四書五經は『永樂大全』を主とす〕<sup>27</sup>。是に於て朱子學は、明朝擧士の爲に官學となり朱子學の天下の經學を統（る。）洪武十七年は辛禡の十年なり。當時高麗は明の正朔を奉す。明朝科制は直に高麗國學に影響し、朱子學に非されは儒學に非すとの觀念を鞏固にせること疑ふへからず。李朝に至りて事大の誠意、益謹み、終に朱子學に非ざる者を視るに殆と異端を以てするに至る。是の狹隘固陋なる學

風の起源は、實に元明二朝科制の章程に在り。但し明朝賓興科應試の事、李朝に至りて輟む。永樂年中、李朝世宗王、請て之を復活せんとし、舉人迄も選定せしか、何故か事按するに朝鮮に於ける地理風水の歴史由來する所極めて古し寝みて終に行はれず。是事、朝鮮文學の發達に重大關係あり、(其の一面より言へば) 惜むへしとなす。

### 〔斥佛の議論〕

朱子學官學となるに及びて、朱子の言論の權威、直に孔顏思孟に次ぎ、一々儒者爲に規範を提供す。而して朱子其人の哲學の構成に當りては甚多量に佛教々理を取入れ、其の理氣心性の說、靜坐の儀の如きは、之を華嚴・禪家より得來るとなすも、辨解難 (の辭に苦む)。然るにも拘らず、彼は盛に斥佛の議論を立て機會毎に之を發表し、佛教の異端の主なれば、之を揮斥するは即儒者の第一次的義務なりと稱揚す。是の風、朱子學の輸入と共に高麗儒者間に移植えられ、他方國末佛弊の百出すると相須ちて漸く斥佛の議論、儒士の間に發興す。

麗末斥佛の論、大段之を二類に分つへし。其の一は、佛法既に像末澆漓となり、僧徒の戒律を守らず、國政に害ありこと、之なきに非すと雖、佛法其者は人間界に於ける無上聖教なり。されば、佛弊は宜しく之を洗除すへきも、佛教は依然之を國教として奉すへしとなす者なり。其の二は、今の佛弊を視て即之を佛教の本質的罪惡（より生するに）外ならずとなし、彼は人倫を滅し國家を蠱毒する邪教なれば、宜しく其教を禁し其人を還俗せしむへしとなす者なり。前者の論主は李穡牧隱に於て、後者の主張者は前出安珣に始まり、中頃忠肅王朝の崔漚あり、恭愍王朝の楊若齋金若恒あり、國末に至りて鄭道傳及太學を中心とする年少過激の儒生輩あり。而して年所を経るに従て後者の議論漸く勝を制し、終に李朝抑佛廢寺の教政の源をなす。而して其の

基く所は、朱子學の勢力 (の言論) に在るは論なし。約言すれば、朱子學、朝鮮佛教を抑斥すと謂ふも可なり。明陳建の『學部通辨』の終篇下に支那斥佛說の歴史を述へて唐韓退之「原道」は其肉を得、二程子に至りて其骨を得、朱子に至りて其髓を得と (○移動: 故に佛學は朱子出るに至りて始めて衰ふと)。朱子に至りて始めて充分に佛教々理を諒めて而して鋒を倒にして之を攻撃し、之に抗辨する能はさらしめを云ふなり。

「(○) 故に佛學は朱子出るに至りて始めて衰ふと」朝鮮の學者も朱子學を輸入して此を研鑽を重ね、漸く其の學理を解するに至りて始めて斥佛の主張亦學的に進歩し、佛教々理の痛切處を衝き、人をして首肯せしむるに至れり。李穡の論佛は、恭愍王元年四月時事を論せる上表に在り、佛弊を歴叙して其の決して佛法本來の教に出るに非ざるを言ひ、是弊を矯正せんか爲に度僧を嚴にするに、寺刹新創を禁するの二法を擧げたり。辛禡の江華に遷るに及びて、典法判書趙仁沃の上表亦牧隱と同類に於て、彼は更に進みて國家より寺刹の財政を監督すへきに言及せり。

安珣の斥佛意見は、前已に述べたり。崔漚は現存『拙藁千百』に於て敢然と斥佛を痛論し、泰定丙寅貢舉試官となるや、一代崇佛の風潮を慷慨する題を出して答を求め、又「送僧赴金剛山序」に於て辛辣に佛弊を切論す。降りて (末期) 恭愍 (讓) 王立ち、王權益々微なるに至りて、佛徒愈々禍福の說を以て宮廷を迷はすや、成均博士金貂及成均生員朴礎の二人は、上疏して激烈に佛法抑斥すへし、僧人還俗せしむへしと急言す。然れども此等の議論は、何れも高麗朝に在りては實行せられず、國祚 (既に) 傾きて、王廷に於ける溺佛、依然たり。されば、完全に佛教を抑斥して公認宗教としての位地を喪失するに至らしめし所の思想信仰上の革命は、之を李朝儒者の事業に遺せり。

### 〔太學の活動〕

安晦軒の力に由り復興せる高麗太學も、恭愍王朝、紅賊の兵亂に由りて其十年開城陥落し、市民慘殺せられ、重なる建築物多く兵火に罹り、成均館亦燒失す。然れども國幣窮乏するを以て十六年（初）に至り始めて重營の案立ち、其の十二月成す。一代の學宗李穡~~を~~（に）大司成を兼帶せしめ、生員數常養一百人となし、五經四書の九齋を設け、經術の士金九容・鄭夢周・朴尚衷・朴宜中・崔彦父・李崇仁・鄭道傳等を學官に補す。『麗史』は特に此盛事を筆して「程朱性理之學始興」と云ふ。固より一流の誇張なりと雖、太學々官に朱子學に通達せる者の任命せらせし事、是時より盛なるはなく、其の講義の能く學者をして（~~深遠なる~~）宋學を理解するに至らしめしなり。前~~朝~~述元朝科擧法施行後、高麗に在りても程朱の學を官學に立るの實、是に至りて完成す。恭愍王其人は、他方には太古・懶翁の二禪師を禮遇し、深く皈依して王師・國師となし、支那正統臨濟宗を高麗に盛にせりと雖、同時に此の國學の再興と學官の選任に由りて朝鮮儒學の發達に寄與する所、頗大なる者あり。而して其の國學に於て講せる所の朱子學淵源となりて遂に他年佛教排斥の事業成就するに至らんとは思掛けさりしならん。

恭愍王、太學再興の時、大司成に任せられし李穡は當代の學問文章の山斗なり。以下、鄭夢周・李崇仁・鄭道傳は其後進と~~して~~之を補佐す。事は、權近の製せる牧隱の碑文に詳なり。然るに今の李崇仁の『陶隱集』の「贈李生序」に據れば、當時太學に在りても學官中、自ら二派あり。一は即道學派に~~して~~程朱道學を講して性理の哲學及存心養性の修養を主と立る者なり。他は則文辭派にして詩文を主とし専ら製述に力を注ぐ者なり。牧隱老は則其中間に在り（共に之を能くす）。而して二派相對抗し、一派有勢なれば他派衰ふ。從て成均館に於ける道學の講究も時に由りて盛

衰の波瀾ありしか如し。即初鄭夢周を先達となし、崔彦父・朴宜中・李~~陶~~崇仁等の學官に列せる七八年間は、經學盛にして此を業とする學生尤進む。是れ、恭愍王の十六年より晩年なり。其後辛禩一年に至りて鄭夢周・李崇仁等か、元使受くへからず大明正朔奉すへしと強硬に主張し、杖流せらるゝや、道學派、頓に不振。遂に其翌年政堂文學洪仲宣上書して、復た~~進士試を~~~~行ひ~~（李穡等の議に由り改められし元制に倣ふる科制を變し）、専ら詞賦を以て士を取り、太學々生皆詞賦に巧なる者に從て遊ぶ。而して辛禩三年、鄭夢周宥されて京に返るや、復道學派勢力を盛返し、五年に至りては諫官等上疏して「詩賦取士、專尚詞章、經學漸廢」を改めて、李穡等の主張する舊制に回らんと請ひ、辛禩之を納れ、是に至りて道學派再度勝を制し、經學太學に盛となる。以後恭讓王<sup>かわ</sup>を歴、李朝に移りて（形勢畧）渝らず、程朱の學、完全に太學の唯一官學となる。畧同一事を鄭道傳も其著『朝鮮經國典』貢擧の項に述へたり。

### 第〔四〕章 高麗の道教及其佛教との關係

（前に三國時代の文化に於て詳説せる如く）道教と概言する内、三部（あり）即老莊哲學・神仙煉丹派及（狹義に於る）道教、是にして、狹義に於る道教は、（玉皇）上帝を主體として其下に種々の天尊仙人・天象山川、天神・地祇・人鬼を祀禱し、人をして善因を修し善果を得しむる通俗教に~~して~~、佛教傳來以後、後漢の張道陵之を蜀に~~に~~創め、晋の葛洪『抱朴子』を著して其の神學を立て、北魏の寇謙之、大に之を布教して支那人の實際的通俗的宗教となせ~~し~~（るものなり）。老莊哲學及煉丹派に~~就ては之を説くを止め~~此には（高麗に於る）此の道教に就て畧説し、其の佛教に與へし影響を併述んとす。

前述高句麗末年（蓋蘇文か）唐より將來せる道

教は、高句麗滅亡と共に道觀・道士の如き宗教的外觀方面は消滅したれども、其の（上帝天象）山川鬼神等を祭りて國及個人の福利を祈り、凶災を避くる信仰内容は、其の儘新羅にも傳承せられ、道教なる教名は維持せられざるも、朝廷及民間の宗教的行事に残りしは疑ふへからず。但し此等の鬼神の祭祀崇拜は唯た道教に由りてのみ（始めて）教へられしには非ず。道教傳來以前、既に半島の各地の~~三~~（原）始的信仰として存在し、道教來りて容易に之と結著きしものと視るを至當となす。事は、新羅朝の朝廷の行事たる八關齋か元と高句麗の道教の齋事なりしか<sup>28</sup>、新羅眞興王十二年、高句麗沙門惠亮か新羅に來り、王以て僧統となし始めて百座講會及八關法を設く〔三國史居漆夫列傳〕。後、高麗太祖亦之を襲行し、其天授元年より毎年宮廷に八關齋を設行す。而して八關齋は、燃燈會か佛に事ふるに對して、天靈五岳山川龍神に事ふる者にして、其の内容全く道教の齋會なるに明なり〔但し今の『高麗史』八關齋の禮記には道教の儀らしき所は見えず〕。

爾後高麗歴代闕庭に在りて天~~帝~~（地）山川を祭り、肅宗七年には玉皇上帝を禁中に祭りて太祖を以て之に配す。唐の儀に従へるなり。其外、或は老人星・本命星・北斗星・太一星・三界百神等あらゆる道教の諸鬼神を醮して福を祈り災を攘ふ。但し其の起源の系路、明ならず。恐く支那より將來せるものなるへく、在來の天帝鬼神の信仰の素地あるか故に極めて容易に上下に由りて受入れしものならん。

斯の如く高麗道教の鬼神仙人は盛に宮闕内に祭られしも、道教の道觀は國都内に一所もおかれず。（從て道士亦なし。）其は『宋史』にも高麗王城に佛寺七十區ありて道觀なしと云へ、又『高麗圖經』にも大觀年中〔宋徽宗、睿宗二年～五年〕朝廷初めて道士を高麗に派し、乃ち福源院を始め羽流十餘輩をおくとあるに徴すへし。されは

睿宗朝、始めて宋制~~に~~に倣ふる道觀及道士なり其の儀、備はるに至れる也。福源觀と院は又福源觀、福源宮とも云ふ。『中京誌』卷四によれば、王府の北太和門内に在りて廟内に（三）清の像を繪す。睿宗・毅宗嘗て此に親醮すと云ふ。三清とは太清・玉清・上清にして玉皇上帝の三位（居る所の宮なり。上帝の三體即）一體なり（佛家三身に模す）。

高宗四十年には（執權）崔沆、九曜堂を闕西に始め、~~王此に~~都の開城に復するや、亦開城にも之を建~~て~~て、醮星の所となす。『李朝實錄』太宗四年一月〔⇒二月〕に禮曹主事金瞻か上書して道教の崇奉を述し中に高麗時代道教諸殿を記し

「太一、天之貴神、自漢以來、歴代奉事、屢獲嘉祥。是以前朝、置福源宮昭格殿淨事色〔係〕、別建大清殿。又於良〔和寧〕（東北）、箕〔忠州〕（東南）、坤〔富平〕（西南）、乾〔龜城〕（西北）方逐所次之宮、營建宮觀以行醮禮。而每當厄運及災變、則行祈禱別醮於大清觀。若行兵則將帥詣大清觀、齋宿設醮而後行。蓋以太一仁星之所在之地、兵疫不興、邦國人安故也。」<sup>29</sup>

之に由りて高麗道教の祠觀か福源觀・昭格殿・淨事色・大清殿・九曜堂及和寧忠州富平龜城に各一所の太一殿ありしを知るへし。尚是等道觀祠の祀る所に付ては、高麗文獻徴すへきなきも、高麗制度に則れる李朝國初の模様は（成宗朝）成倪の『慵齋叢話』に之を記す。

「昭格署、皆憑中朝道家之事。太一殿、祀七星諸宿、其象皆被髮女容色。三清殿、祀玉皇上帝太上老君普化天尊捧幢諸君等十餘位、皆男子像也。其餘内外諸壇、設四海龍王神冥府十王水府諸神題名位版者、亡慮數百。」

~~大清殿は即太一殿は即太一~~（大清）殿なり。是等諸神の内、太一殿の七星及諸宿と三清殿の玉皇上帝を主尊となす。他は附祀なり。之を『東文選』及『李相國集』に檢するに、北斗延命道場文・五星祈禱道場文及玉皇上帝祈禱文、最多

し。是の中、北斗及五星の祈禱は延命雩儀・禳災・鎮火の効、著しとせられ、終に別に九曜堂を立つ。九曜は北斗九星にして貪狼・巨門・祿存・文曲・廉貞・武曲・破軍・左輔・右輔なり。麗末恭愍王十九年、明太祖、道士徐士昊を遣して高麗の MAIN 主水及諸(大)山川、道教祭儀を致さしめたり。是れ、朝鮮か明の屬國となりしか故に、天子其の域内の山川を祭りて之を報告せるなり。

(以下思想信仰史卷八第二節)<sup>30</sup>

## 第二節 高麗道教と佛教との關係

道教は、高麗國初より既に古俗を受けて其信仰は内容的に鬼神山川天象祭祀の形に於て行はれ、後宋より諸種の道教の像繪齋來られ、又道士の派遣せられ、道觀の設けらるゝに至りて即、高麗王は其都城内に佛殿内と並へて道教の鬼神を祀り之に祈禱せり。然るに高麗道教と(其傳來するや)高麗佛教とは別種なる徑路を取りて發達し、唯た王に由りて迎へられ、王に由りて觀祠を建てられ、王に由りて道士を任命せられ、全宮然王宮直轄の祈福禳災の官署となるに至り。民間に布教し民間より道觀を立つるの事なし。故に麗朝の制度に襲へる李朝昭格署官制には

【中斷】

## 李朝思想史

### 序言

李朝に於ける思想變遷に關する文獻は頗る多く、之を高麗及以前に比して將に幾百千倍に上る。朝鮮研究の(朝鮮に於る)文獻は(殆ど)其の全部之れ李朝の文獻なりと稱するを得へし。從て本期の思想史は之を架説せんとすれば、歳を換へて猶完結する能はず。其の佛教、其の儒學、其の特種宗教、其の政治對外思想而して終に李

朝末造政治的大變革の前後に於ける思想的現象等述來れば、何れ各々も一個大なる研究對象に價せざるはなし。今は唯た其變遷の大綱を領提して其筋道を示すに止まる。

高麗思想史と李朝思想史との橋梁的大事件は、佛教の八百年國教的優越地位より墜されて、之を儒教、朱子學に頼る儒教に譲り、漸く單一朱子學の國家社會とならんとするもの、即是なり。儒佛對抗の機運は、前述(の如く)高麗の文臣等夙に先聲を揚げし所、殊に朱子學輸入の祖、忠烈王朝安珣に由りて力強く其の再興せる太學に植付けられ、漸く妥協の餘地なからんとす。而して此の争、畢竟佛の敗亡に終結すへきは其宿命とも見るへし。何となれば、佛教八百年の全盛は漸く精神的物質的深弊を教内に(醞)醸し、或は發して政治的僭上となりて、王師・國師、政界に於ける一種の勢力より進みて恭愍王朝には遍照即辛屯の黒衣宰相に擢かれて勢道たるあり。充分に教法本來の領域を逸出して全國士流に深き(衝動的)戒心を惹起し、又土田奴婢の占斷、鹽盆の課税、長利の穀、院宇の新創重修の大工事の(強請)寄附等は漸く寺院獨り富みて國幣及民力を糜するに至り、其の現實的弊害顯著にして掩ふへからざる(す。例へば)(上面<sup>31</sup>:松都狹斜の巷に黒衣穢遷として脂粉に戯るれ、僧侶か妓生の第一得意たりし如き)に對し、儒教は新興教法の鮮新なる意氣潑瀾、未た其の既成團體通有の弊の附みさくものなく、堂々として社會の(社會)一般の認識する所の社會的公正公義を提けて立つ。其の公正公義とは、抑々新羅上古より政治(經濟)及道德は儒教の教學の領分に屬すへく、現末の安心を與ふる宗教こそ佛教の領域なると云ふ、所謂教法と教學との區別的認識なり。此の區別は如何に佛教全盛の羅・麗の世と雖、渝ることなし。而して今や佛教は積年全盛の惰性の所致、何時ともなく二歩三步、此の當然の領域圏外に踏出せる者あり。是



れ佛教側の大なる不利の陣勢なり。次には、朱子は支那思想の全部の集大成の位地に在る(偉)大(なる)思想家にして、其の説きし所の宇宙觀・人生觀乃至修養の學説及實踐は、其の想源佛教に在り(取る所少からず)と雖、兎に角能く華嚴・禪等大乗佛教の其と對立して譲らざるを得る丈の組織と内容を有し、從前の羅・麗訓詁の學者か佛徒の儒佛比較説に、儒は單に其(道と)平庸を説き、佛は道の高(深)遠を説くと云ふ(の俛焉として服從せし)ものを轉覆して、佛の説は單に荒誕怪奇なるの外、其の學の深さ高さに在りて毫末も我儒の上に出るなしと主張するを得るに至りて、此に儒佛對抗に向て學的根據を與ふ。更に進みて(△上面赤字：是方面に於ける尤大なる存在は、麗末李初の鄭道傳に於て『三峯集』中(「心氣理篇」と)「佛氏雜辨」は即其代表作なり。)故に麗末鄭道傳(圃隱)か豪傑の資を以て道學派の棟梁となり、成均館を打ちて一團となして堂々佛教に抑壓の戦線を張るに及びて佛徒頓に萎靡逡巡の色あり。後圃隱宰相となり、(國內)禮俗に於て朱子の定むる所に從て追遠慎終の喪祭の儀を改め、躬自ら之を行ふ(△上面：△ひ、縱令固より全國に行はるれすと雖、(都城)士大夫の禮俗、爲に變する)に至りて(⊖)兩教勝敗の數、既に畧定まる。而して恭讓王、猶麗朝宮廷の傳習に導かれて佛法の國祚裨補を信して寺刹の建立法會に鉅費を投しつゝある間に、李成桂一派の策謀成功して王氏血食せず、五百年尊佛の國家一朝滅びて、夢の如く王氏の子孫殘存する者殆となし。此の世代變更の絶大事實は、李朝初業主李成桂及其一門と其の臣從即前に王氏の臣たりしもの今李氏の臣となりし者とに向て、對佛教對蹠的觀念を發生せしむ。即李氏は元來熱烈なる佛教信者なり。數代佛に祈禱(皈依)して家門の繁榮を祈る。故に今の王業成就是是れ、偏に佛法の加護となし、心魂に徹して教法の靈驗を感激

し、益々報謝的(に護法的に)事業施設を起さんとす。然るに臣下等より觀れば、麗朝一代彼の如き(五百年)無上の奉佛崇法も、畢竟今となりては其國祚の滅亡を拯と王氏一門の死没とを拯ふに由なし。果して然らば、佛法か國祚裨補の法力ありと云ふは、一個の迷信に外ならず。國家は政治(經濟)道德に由りて立つものなり。其の軌範は儒教の説く所、宜しく崇佛の迷を惺(さと)して儒教立國の公義に復るへしと。而して李氏と雖、表向の議論としては群臣の主張に賛成せざる能はざるか故に、茲に李氏一門の私的生活の許さるゝ範圍内に在りては依然、佛教奉せられて祈禱法會引續き行はると雖、國家教政上には斷然抑佛揚儒の方針を宣明す。李朝王家は故に佛教に對しては表裏内外兩面の使分をなせり。此に李朝に於ける佛教の生命維持の餘地保證せらる。王家既に表裏二面を使分け、兩班富豪亦之に倣て表に佛を排し裏に佛に祈る。國家亦表に度僧法を廢止し、合法的僧種の發生の道を絶ちて山間峰頭、梵唄の響・法燈の輝、五百年毫も衰へず。李朝教政、佛教(の)公認教法たるを罷め、道教は僅に昭格署に形骸を留め、獨り朱子學、國家社會の思想及信仰を統制し、(中央の文廟大成殿)成均館、地方の郷校・文廟、唯一の教學の聖地たるに至りて、朝鮮の國家及社會に於ける思想的現象は、皆朱子學に於て其の起る所以の理由を發見おかさるはあらず。朝鮮は正に朱子學的(國家相)社會相を明白に示現せる者と謂ふへし。故に予は、李朝五百年は朱子學(説)の試験場たりしと稱す。朱子は唯た學説として支那南宋に於て其の哲學(及經綸)[政治學經濟學]を唱へ、未だ支那に在りては(國家の)實際施設に之を具現する能はず。從て(或る國に於て)朱子學を純一無雜に他の(教)學に沮礙せられず(國家(社會)に於て之を奉行(持)實行せは、果して如何なる國家社會を現出するに至る

へきか。實驗は之を猶未濟なり。實驗未濟なるか故に（支那及日本の）朱子學者及反朱子學者は共に唯一個の想像として或は其説を讚美し或は其説を攻撃す。然るに朝鮮は正に四百年の實驗濟なり。是點に於て朝鮮の思想史は朱子學研究者に向て非常に貴重なる研究對象を提供すと謂はざるへからず。今~~之を~~簡單に李朝思想史(上)の重要現象を擧ぐれば、曰く巫覡及風水説の大流行、曰く佛教存在の繼續、曰く諸種三教調和説の唱道、曰く朝鮮特有新宗教の發生、(曰く文學に於ける道文一致論、曰く~~服制の決定~~三年服喪の實行)曰く名分論の勢力、曰く春秋大義説の流行、曰く道學と節義の一致説の主張等、(或は)表面の思想の流となり、或は裏面の信仰を形作り、單調なる裡に波瀾あり、平靜なる間に變遷あり。而して是皆な朱子學の(思想)統制を離れては其の思想的存在の意義を(解釋し)説明する能はず。

## 第一章 排佛教政

李朝太祖の私的生活か高麗王家の後を追ひて奉佛崇法其物なりし事は、前に序言に於て一言せる所なり。彼の崇佛(佛)の理由には二あり。其一は即、彼の~~朝~~朝成業は彼(家)及彼自身多年崇佛の誠心に報けられたる法力の加護なりと信する者にして、此の意義の發露は彼と無學王師との關係に現はる。無學と太祖との奇怪なる物語は、王建太祖と道誥和尚との先蹤を撫して其の王業の迹を神秘にする爲の構成によると雖、然れ~~ト~~或は無學か太祖の爲に何かの豫言を與へし事は認めざるへからざるか如し。其は無學の碑文釋王寺の縁起は~~勿論~~(や)肅宗・英宗の釋王寺に降せる御製には等は皆信すへからずとするも、『太祖實録』元年諸州の山川城隍を封するに當りて、安邊城隍を啓國伯に封せるの一事は、何か當時太祖の心中一點、王師無學との關係に

神秘的なる者ありて、無學の天機の泄洩によりて既に佛力の我に加はり、王氏に取りて代るへき者我なりとの確信を得、此に一層密謀策畧に希望を持つに至れる者と解せらるへきか如し。『李朝實録』太祖元年に曰く

「吏曹請封境内名山大川城隍海島之神。松岳城隍曰鎮國公。和寧、安邊、完山城隍曰啓國伯。」和寧は即永興にして全州李氏此に移來りて此に發祥せるの吉地なり。完山は即全州、李氏の本貫と信せらる。安邊は、何等之に類する太祖の(郷)族的因縁なきに、同しく啓國の功勳ありと認められしは、必ず無學の啓示的物語の事實を承認せるを肯定せざるへからず。<sup>32</sup>釋王寺縁起に太祖か此の歡喜を謝し、佛天に報する爲に伽藍を此に建~~つ~~(て釋王寺と名く)と云ふもの、亦之を證す。

其第二の理由は、彼か王氏を倒して新朝を創め、臣下に要せられて王氏を族滅して遺孽なからしめし所行か、其の良心に向て常に呵責を與へ、此の報應か其の子孫に加へられて、復た何人か其の王氏に向て加へし所の者を以て彼の子孫は加ふるなからんかと危懼し、茲に靈驗顯著なる佛天に向て免罪加護を誠願するもの是也。彼の即位三年秋八月、權陽村の(奉教)撰する「別願法華經跋」にも

「爰發予以否德、迫於群情推戴、代王氏以有國。茲不獲已、慚德是多。將欲保全其族、與國咸休。<sup>33</sup>不期小腆、反生疑懼、潛謀不軌、自速覆亡。……爰發誓願俾以全書成法蓮(華)經三部、欲令王氏宗族より普及<sup>ぶ</sup>まで法界含靈、俱伏(⇒伏)眞麻<sup>34</sup>、速證妙果。」

と。是れ、彼か謀臣鄭道傳に(強)勸められて心ならずも王氏の遺族を皆處刑せるの時なり。同しく權陽村の奉教撰に係る「大般若經跋」あり。

「[右大般若波羅密多、我大上王殿下願成也。既己卯成、粧背訖功。傳旨臣近若曰] 予賴祖宗之積德、佛天之

密護、肇造邦家、永垂統緒、乃倦于勤、用釋重負。惟欲專心事佛、晨夕頂禮。上以報祖宗之恩、下以冀邦國之永安。殲除既往之罪愆、〔種〕植將來之德本而已。〔載惟大般若經、其旨宏博、諸經最勝。普利幽明、莫此爲大。爰捨私帑、俾印此經。惟願先代祖宗考妣、先亡子婿眷屬。普及法界含靈、皆仗勝緣、乘般若航到正覺岸。三寶長興、法輪常轉。干戈永戢、國步永康。現增福壽、終證涅槃云爾。汝宜書之、以跋其尾。臣近方居憂制、言不敢文、承命感涕、姑記所論焉耳。丙戌六月日。〕

是の崇佛理由を以て、彼は新都に於て興天（興德）興福の三大寺を建て無學・祖丘の二王師をおき、殊に晩年には太宗の野心に由りて一層人生の無常を感じ、（高麗太祖の廣明寺に倣て）其の（開城に於る）住邸の東に新殿德安を作りて之を佛に喜捨し、此に入りて靜に念佛三昧に日を送れり。（上面：建文三年（正月）〔定宗三年〕には五臺山中臺獅子庵を願堂となし、其冬十一月親臨之を落成し、權近をして之を記せしむ。王者を以て此の絶險を冒す信心の（甚）篤きに非ずんば能はず。）

然るに之に對して他方、彼の公的生活即（國家）教政の決定者としては能く群臣の議を容れて高麗朝の佛弊に深鑒して漸く抑佛揚儒の方針を立てるに至れり。事は『實録』及龍飛御天歌に記する所に詳なり。即太祖元年には既に司憲府は長文の上疏をなして、其の第九條に「汰僧尼」の題目を掲げて僧尼の淘汰を斷行し其數を減せんと乞ひ、（是時王許さず。次て）又宰相趙浚も意見を上りて度牒の取締を嚴にし、僧侶の猥りに諸寄附を勸募するを禁せんと乞ひ、允許を得たり。是れ、李朝第一次の（教政に於る）抑佛方針の明示なり。されば龍飛御天歌然れども、王は（王自身の）個人の信仰と荆業の時人心の動搖を恐れて鄭道傳・趙浚・河崙等儒臣の急激なる抑佛意見を採用せず。儒臣亦表に抑佛を主張して、裏に太祖の（私）命に應して或は高僧の碑

銘を製し或は祈佛誓文を作ること、前引權近の二例の如し。陽村は當代の學宗、成均館長として學生教養（薰育）の重任を擔當する者なり。故に李朝教政の明確なる抑佛施設は、太宗王に至りて乃ち著々として行はる。是れ『龍飛御天歌』に太宗を頌して

「滿朝請置、正臣是許、十萬僧徒、一舉去之。滿國酷好、聖性獨關、百千佛刹、一朝革之。〔一百七章〕<sup>35</sup>

洙泗之正學、聖性自昭晰、異端獨能斥。

裔戎之邪說、怵誘以罪福、此意願毋忘。〔百二十四章〕

猶李朝の儒者等は、太宗か父の志に背きて篡位せるに對して議論あるも、斥佛揚儒の名君としては千古一人となす〔崔恒太虛亭集、丁克仁不憂軒集、實録世宗辛酉司憲府上疏、許筠海東野言、正宗（命撰）養端錄の斥異端〕。太宗斥佛施設大要、左の六項に約すへし。

一、寺額を減革して沙門をして還俗せしめしこと

一、寺屬土田を國有に収めしこと

一、寺刹附屬の臧獲を擧げて軍丁に充てしこと

一、度牒制を嚴重勵行せること

一、王師國師封君の法を廢して僧侶の待遇を降せること

一、陵寺制を廢して人心を一新せること

是なり。何れも斥佛に向ては有力なる施設にして、由りて以て國家佛教を待する方法を革めて國家と（の）佛教との對する公認信教的（皈依的關係）を（斷）絶せるを公表せるなり。就中、僧侶に取りて最苦痛なるは、王の六年斷行せる寺刹數を減し、寺刹附屬（土）田を削れるの一條にして、其正月『實録』に

「曹溪宗僧省敏、擊申聞鼓。僧徒以減寺額削民（寺）田（民）、日訴于政府、求復古。政丞河崙不答。於是省敏率其徒數百、搥鼓以聞。上終不許。」

蓋し寺額を減し土田を削れば、僧尼は依怙を喪ひ生活の途を絶たる。然れども既に國家か佛法の法力か國祚の裨補に何等利益なしとすれば、専ら其の弊を視て以て其の勢を抑ふる施設を取るは不免の所なり。而して是の如きは（反面的に）彼の高麗佛教か從來、主として王室に對して現世利益を以て皈依を博する方法となせるを證する者なり。是時殘留せられし寺刹は~~十一~~宗合計二百六寺、官に沒收せられし臧獲六千六百口、田結一萬三千二百結と註せらる〔詳細は拙著李朝佛教〕。

但し此の二百六寺と云ふは、國公許の大刹にして土田を厚くし、居僧數も或は五十或は三十なり。其他の公認を與へられざる~~小~~寺は此數に入らず。是等も勿論、直に撤廢毀却せられしにはあらず。但し從來の土田（臧獲）を沒收せられたれば、將來の營生甚困難となり、大部分の僧尼は還俗の外なきに至る道理なり。

次代世宗大王は、朝鮮の堯舜と呼はる。王の治世、國家泰平にして上下相和し、生民其堵に安し、文教大に興り文章~~宗~~輩出し、斐然と~~文~~明なり。太祖初に儒教立國の國是を立て、太宗之を承け、世宗に至りて完全に之を政教の上に實現せり。其即位第三年辛酉、文宗を立て、王世子となすや、成均館に入學せしめて大成夫子文宣王の位牌を拜せしめ、爾後李朝立世子の定式となる。按するに、高麗忠烈王十二年世子國學に入りて六經を講ずるの事あり、又恭讓王の元年金瞻等上書して元子及宗室子弟の國學に入學するを請ひしありと雖（◎上面赤字：◎李朝太宗元年躬ら文廟に謁し、元子を~~文~~就學せしめしと雖）、尚未た麗（李）朝王世子の定規となるに至らず。是に至りて王世子文廟に謁して先聖の位を拜し、李朝儒教立國の大國是は形式的にも確立す。

李朝文教史上、如是地位に在る世宗王の斥佛の施設を取りて以て太宗の教政を繼承するは當然

なり。今『實錄』に據るに、王の斥佛は大體左の八項に括するを得へし。

- 一、寺社の奴婢及僧侶相傳法孫の奴婢を革して之を公に屬せしめしこと
- 一、寺額を減革せること
- 一、~~五教兩宗七~~（七）宗を派を省革して單に禪教兩宗となせること
- 一、内佛堂を廢せること
- 一、京城内に興天・興福（德）の二寺を留め、他は悉く撤廢~~文~~公廩となせること
- 一、廢革せる寺刹の佛像鍾磬を鑄潰して兵器を製せること
- 一、佛事を減して費用を節せること
- 一、僧徒の恣に京城に入るを禁~~文~~度僧制を嚴にせること

是なり。就中、其六年甲辰四月斷行せる七宗を減革して合併して禪・教單兩宗となせるは、最英斷なり。七宗とは曹溪・天台・摠南・華嚴・慈恩・中神・始興の七宗にして<sup>36</sup>其の曹溪・天台・摠南~~を~~三宗を合して禪宗となし、其の華嚴・慈恩・中神・始興四宗を合して教宗となす。爾來（三年一回の）僧科に在りて禪宗に在りては『景德傳燈錄』及『禪門 拈頌』を試し、教宗に在りては『華嚴經』及『十地論』を試むることとなせるか故に、及第~~文~~住持となるを以て一生の目的となす。僧侶等は禪及華嚴宗以外の宗學は之を罷廢するに至り、終に朝鮮佛教をして現在の如く禪宗・華嚴宗二宗外に宗學なきに至らしめたり。されば、世宗大王六年の本改革は、朝鮮佛教史上畫期的大事件にして今朝鮮佛教（教學）凋落の根源、亦實に此に存~~在~~（し、△上面赤字：△後更に禪教兼修の單一宗となるの基を開く）。世宗の留めし（本山格）寺刹は僅に三十六寺、土田七千九百五十結なり。爾他の寺刹は寺格を認めず土田を沒收せられし者と視做すへし。

然るに是の如き斥佛揚儒の世宗大王は、其晩年

に至るや、豹變して非常の崇佛王となり、興天寺大修理を始め種々の佛堂營造の大工事を起し、大法事を修し、僧尼を尊ひ、僧侶を濫度し、前半生間に抑へし所の佛教を又自ら起して之を庇護し、其極、廿五〔⇒四〕年壬戌興天寺大工事竣功の慶讚會の啓佛文には「菩薩戒弟子朝鮮國王李某」<sup>37</sup>と稱するに至れり。

次て世祖大王、潤達豪邁の資を以て一層力強く（公然）興佛の施設をなし、兩王の力に依りて朝鮮佛教垂死の命脈を取止めて延命するに至る。然れども二王の前後卅年の擁佛施設は（其）實時勢に逆行する者にして澎湃たる儒臣等の揚佛（儒）抑佛の輿論公議には敵すべからざるか故に、次て睿宗・成宗に至りては共に儒學を崇尊し、前代崇佛の施設を改めて完全に斥佛を成遂けたり。睿宗は在位僅に一年、成宗は十四歳にして即祚し、其後七年迄は世祖の妃貞熹王后尹氏、政事を聽斷し、其の還政に及びて初めて成宗親政し、斥佛施設を斷行せり。成宗の僧政の要目二あり。其の一は度僧法の勵行、其の二は舊寺址以外に寺刹を立るの禁令、是也〔成規備齋叢話、許筠海東野言〕。

度僧事は太祖元年貞民（兩班）子弟布百匹、庶人百五十匹、賤口二百匹と規定し、世祖の『經國大典』には布三十匹を納め、『般若心經』及『金剛經』并に經「薩怛陀呪」を誦すへき規定となり、居るに拘らず兵丁を逃れんとする者共は（或は）諸種因貧を辿りて度牒を得、或は恣に祝髮して僧形となり。又世宗・世祖は盛に佛宇造營を起して度牒を懸けて以て遊手壯丁の來りて工役をなすを勸募し、其の爲に兩朝の間僧侶の數幾萬に至〔れ〕りかを知らず。世祖三年より成宗二年迄十四年の間に『經國大典』所定の章程に従て禪・教兩宗々務所即興天・興福（德）二寺に來りて經呪を誦し丁錢を納めて僧となれる者は僅に十二人のみ。成宗七年親政に至りて乃儒臣の説を容れ、『經國大典』所定の度法を勵

行し、同時に（度）牒を有せざる僧形を還俗せしめ、更に進みて度僧法を停止し、其廿四年には『續大典』に明記して

「軍額敷盛間（[迄]）、勿許度僧。違法者、囚一族督現。」

と云へり〔攷事撮要參考〕。斯くて從來の違法僧形の強制還俗と度法の停止とに由りて僧侶數一時に減少したり。之を朝鮮僧史に有名なる成宗沙汰と稱す。

七年には大司憲尹繼謙等上疏して、舊址に非ずして寺を創むる者を嚴禁せんことを請ひ、王の允許を得たり。而して（且）又巫覡を京城外に放逐すると共に僧侶の猥りに城内に入るを禁せり（◎左脇：勿論城内寺刹の僧にはあらず）。されは成宗朝には既に度僧法を罷革したれば、爾後合法的手續に由る僧種發生の途、杜絶せられ、大部分の僧形者は即違法人と認めらるゝか故に其地位俄に降りて賤類に伍せしめられ、士流の家庭に出入する資格なき者となるに至れるなり。成宗は、度僧法を罷革し行はざることをなせるも猶僧科を廢するに至らず、依然三年に一回文武式年（上面：子、卯、午、酉）と同年に興天・興德禪・教本社に於て僧科を行ひて登階を取れり。朝鮮の如き官權獨り隆なる國柄に在りては、國家試験に及第せるは非常の名譽にして殆ど士人科擧及第に匹すへし。僧侶自身も縦ほしいままに同年と思ふあり、一世の尊敬亦此に集まる。勿論純理より言へば、度僧制の廢止と共に僧科も廢止すへき者きく、少くとも何年後には廢止すと規定すへきに、成宗の（僧）政此に出てす。故に有學僧は依然禪・教の宗學を勉強して應科し僧階を得、住持となる。而して斯かる僧侶に對しては一般社會亦尊敬を拂ひ、俄に賤類を以て視ること能はず。故に儒臣側よりは夙に僧科を以て無用の制度となし、其の廢止を強言す。而して行はれず。燕山君に至りても其の三年藝文館待教鄭希良の上疏の第八條に試僧と兩宗とを罷革すへき

を述べ、引續き同種の意見の上らるゝあり。然れども當時猶祖母仁粹大妃存命す。大妃は例によりて信佛王妃なるか故に燕山憚りて之を採用せず。十年四月大妃歿するや、燕山誰憚ることなく放縱の生活を開始す。其七月には成均館か後宮に近く、宮女と遊樂する醜態の館生に見らるゝ憂あるを以て命じ、成均館を撤して之を其の地域を宮園に合併し、孔子像を他に移し、斯くて盛に宮苑を擴張するの結果、司瞻寺及興天(德)寺亦撤すへきに至り、興德寺の佛像を圓覺寺に移す。興德寺は即教宗の本寺なり。次て三角山藏義寺の佛を他處に移さしめ、三角山に在る寺刹の僧侶を悉く放逐す。三角山を遊田地に編入せるなり。後又圓覺寺の佛を他に移し僧を放逐し、此處を妓生を掌る局となす。次て禪宗本寺興天寺の佛像を檜巖寺に移し、馬廐となす。是に於て兩宗本寺共に亡ぶ。『實録』中宗四年十二月には

「自廢朝後、都城寺刹皆廢爲公府。兩宗托虛名於外、清溪寺號爲禪宗。」

清溪寺は廣州に在り、禪宗號を擧げしは、教(宗)をも含ましめしなるへし。兩宗佛像を清溪寺に移して昨日に變る哀れなる有様となれるなり。斯くて燕山君か兩宗を没収せるは、其の十年より十一年に在ること疑なく、而して其の十年は恰も式年に當る。然れども兩宗共に都城内に在らざれば、事勢固より僧科を舉行する能はず。是に於てか高麗光宗以來、行はれ來りし僧科、終に廢止せらるゝに至る。(◎上面赤字：◎『實録』によれば、十一年十二月には寺社田は悉く取揚げて公に屬せしむ。されは是よりは朝鮮の寺刹は皆在住僧侶の種々の若干特別施主の寄進に係る土田を有する者の外は皆在住僧侶の(祈禱時)種々の労働の所得によりて立行くことゝなれりと視るへし。)然れども此に注意すべきは(△上面赤字：△燕山君其人、元來佛を好まず斥佛を主義となしたれども、此の場合)燕山君の僧試廢止は、

單に興天・興德兩寺撤廢の結果起れる者に於て、兩宗の没収は必しも斥佛の意義を有するに非ずして、成均館の没収と同しく荒淫無度の爲なること、是なり。故に後中宗二年正月貞顯王后は、兩宗再興の傳旨に對して大臣等反對するや、答へて曰く

「祖宗豈不知異端之爲非乎。以我國山川險阻、故立寺刹以鎮之。此(〔兩宗])亦爲國都而設也。且子孫不可永廢、載在祖宗遺教、而爲燕山所廢。燕山豈爲闢佛而然也。廣撤家舍以爲出遊之所耳。其得罪於祖宗爲大。」

と。以て見るへし。斯くて燕山の荒淫無道は、偶然にも李朝國初以來儒臣の希望を達し(尤重大なる)斥佛施設を遂行せり。此に至りて僧侶等身分最後の保障地亦奪はる。然るに次々王明宗王に至りて幼沖に於て即位し、生母文定王后尹氏權を乗るや、悍剛の資性、佛教を酷信し、李朝宮闈積年の執念願實行の任を擔當し、傑僧普雨大師を得て之に信任し、遂に度制僧科の復活を斷行す。

明宗大王、仁宗の早急なる昇遐に繼て即位す。于時、齡十二歳。生母文定王后尹氏垂簾す。尹氏は歴代王后中に在りて特に信佛篤き人なり。中宗在位中、既に内需司を通して諸方の寺刹に祈願の密使を絶たす、諸所に内願堂を指定す。文定王后は、當時佛僧界の戒行の墮落、教法の澆漓は主として『大典』所定の度敷(僧)法・僧試・兩宗等の法制を停めて遂に(優良)僧種の發生を防ぎ、又僧徒内に統制機關を失はしめしに在りとなし。此を匡救せん爲に三者の復活を計畫し、幸に報恩寺の僧普雨なる傑僧を得て之に充分の信任を與へ、一世朝臣及儒林館生の大反對を押切りて遂に其五年報恩寺に禪宗事務所、奉先寺に教宗所をおき、度僧法を復活し、七年壬子式年には五十年停止せる僧試を再行す。以て二十年文定昇遐迄に至る。茲年文定薨し、外戚の勢道尹元衡失脚し、普雨濟州に謫せられ

死し、明宗朝一時的興佛も煙火線香の如く消えて迹なし。されど是間前後五回の僧科に由りて僧徒の元氣を作振し、宗學の研鑽に精進せしめしこと尠からず。往々にして人材を出し、以て朽腐根に入り自然に倒れんとせる大木に一脈生氣を興へ、兎に角爾後の枯槁を救へることは、看過すへからず。即李朝佛教中興大祖師にして現在朝鮮僧侶法流の二大祖たる清虛休靜と浮休善修とはと、壬辰役僧侶義勇軍大將に於日本に於て使命を全うせる泗溟惟政は、共に第一回僧科の及第者なり。彼等に由りて僧(界紀)綱及學行、如何許り刷新振作せられしかは想像するに餘あり。蓋し文定明宗即位當時には五十年間抑佛の施設の結果(は善惡共に)著々として僧界の實際に現れ、僧種の墮落甚しく、盜賊(不逞徒)にして捕へらるれば、大半是れ僧形者なり。されば此の對策は唯た二途あるのみ。其一是、全然朝鮮佛教を根本的に顛滅して一ヶの寺刹半個の僧形をも朝鮮に留めしめざるものか、或は可成僧種を改善し、僧徒を監督して以て其の本然の清淨生活に回らしめ、漸く人民教化に貢獻せしむるか、是なり。而して文定は第二途を擇ひ、之を斷行無疑はさりしなり。若し果して(又)第一途か百五十年の經驗(に照し)到底(實行)不可能とすれば、對第二策を以て上策となさざるへからず。然るに當時は既に時勢代思想(既に深く)狹隘なる抑(朱子等の唱道する)排佛即是揚儒の説に浸染し、國家教化の大所高所より佛教を料理す(對策を立)るを忘れ、只管感情的に文定を非難し普雨を妖僧呼をなし、復た兩宗を廢(撤)し、度僧を輟め僧科を廢して得々たり。文定の興佛施設は既に時代に容れらるへからざる思想なり。

爾後、反動的に社會は益々僧徒を逆待し、階級的に愈々遞下す。(◎上面赤字：◎僧侶の都城通行は嚴禁せられ、都邑内(に)は寺刹一も殘留せず、只た人烟遠き山中に僧尼等の集團して私に

信法勤行するを默許するのみ。言はゞ寺刹は異教者に於違法者の只た默許せられたる集團たり。) 只た壬辰の大役起り、官兵何等國防に無力なるを暴露し、平素名分論を切言する士流の畢竟言論の人たるに過ぎざるを現す。時に當りて、僧侶の棟梁西山大師は、宣祖大王の附託に感じ、全國僧侶を總動員して王の軍事に勤勞し、處々戰功を立て一世をして愕然たらしむ。此に士流の僧侶に對する認識不足を悟らしめ、一時僧侶待遇を改め、泗溟大師・晦隱大師の如きは堂上卿に准せらる。然れども仁祖を過ぎて肅宗となり、外患熄みて國家太平の續く時代となりて階級觀念愈々固著し、僧侶は人外の賤類として八賤<sup>38</sup>に伍せしめらる。従て僧種益々下落し、戒行弛み學業降り、朝鮮佛教は教學として觀るべきなく、朝鮮僧侶は宗教家として取るべきなきに至る。以て現在に至る。

## 第二章 朝鮮佛教命脈維持の理由

前章李朝四百有餘年斥佛の教政は、或は土田臧獲財産の上より或は宗學の上より或は法制の上より、四方八方より之を抑へて唯た絶對的禁教の擧に出でさりしのみ。然るに五百年を経し今(併合前迄)の朝鮮佛教の情勢は、猶依然として寺刹僧侶の數に乏しからず。爾後年々寺其數遞減すれども、昭和元年十二月調査にも寺刹數千三百六十三、僧數六三一四、尼數八六四人と註せらる。△(上面：△文無)又朝鮮民間歲時を見るに(◎上面：◎「元日曉、山僧下閭閻、作隊而行、大呼齋米差下。家々給白米凡三百」[李韶九、朝鮮小記『小方壺齋輿地叢鈔』十帙[1897]]。或は四月八日釋尊誕生日は浴佛日と稱して晝は餅を作り夜は燈を燃し、中元には百種節と稱して盛饌を設けて山に登りて歌舞す。其外、婦女の上寺祈禱、士庶を通して釋尊の尊敬等、猶佛教は朝鮮社會に全く滅びて單なる過去の教法とは

視做すこと能はず。焚火の灰の底に猶團火残り、灰熱亦失せざるに似たり。是の如きは、朝鮮人の如何なる信仰上の要求を満す點あるに由るか、朝鮮人の廣義に於ける生活は（如）何なる欲求を佛教に由り満足せしめらるゝか。

佛教本來の純信仰より言へば、彼の『悲華經』の無諍念王と其大寶海梵志の卷に在るか如く、信者か其の三寶皈依に由りて何等か現未に於ける物質生活の幸福を其功德として（期待）欲求するは（申しむべき）~~迷想にして申しむべき~~なり。反りて教法の垂示する所の淨戒善行を常住不斷持守し實踐して、其に由りて持來さるゝ我心の易安狀態其物こそ眞の功德に外ならず。此の功德積り積りて益々心地安樂清淨、遂に菩提を成就して涅槃に到るなり。然るに如是完全、超功利的超物質的教義か一旦世俗を對象として布教を開始するに至れば、忽ち非常に方便的となり、直に三寶皈依と現未の生活の福利とを不可分的に結着けて、茲に廣汎なる佛教功德の觀念を構成す。今諸種經文を觀れば、大・小乘を問はず、殆ど此種功德の説かれざるはなく、又諸佛の願にも必ず其の重要事項として我刹土の人民に物質的幸福を與へんことを加ふ。故に深く佛教を窮めざる人は一見佛教を以て極端なる方便教となし、同時に非常に荒誕なる事柄を平氣に説く超理教となす。亦已むを得ざる所なり。然るに此の佛教方便の一面（か）教法宣布の實際的重要内容を形作る故に、本來の教法義は、縱令或は國家社會に由りて排斥に逢ひ衰亡に赴くも、此の功德的信仰は其國家社會内の人々の生活意識の最強烈なる部分たる功利的欲求心と結合して直に民間信仰と化し、或は其儘の形に於て、或は他の信仰と混して何時迄も其地域内に殘存し、變則乍ら微弱乍ら、佛教々法の迹を留むるなり。而して現世の利益と未來の利益とは、固より其一方を偏廢すへからざるも、前者に對する人間の欲求は後者に對するより強烈なり。

少くも支那人・朝鮮人に於て然るか故に、前者に對しては後者に對するより一層大なる奉仕獻誠をなすは當然なり。未來の福利と云ふは、畢竟現在の其を通して類判して之を求むるに外ならざるなり。<sup>39</sup>

前述李朝國初抑佛方針の樹立は、前朝滅亡の事實か佛法の國祚裨補の現世的功德なきことを的證せるに在り（◎上面赤字：◎太祖元年九月〔21日〕大司憲南在等上書）。高麗佛教は、現世功德を信せられて興り、現世功德を否認せられて滅ひたり。

（△上面：△道教醮祭の振はさる、亦茲に其の理由をおく。巫覡は、此の利益あるか爲に依然李朝に在りても民心を繫く。）然れども佛教所説三世因果輪廻の妙想は、（人間）未來の禍福を巧に理由付けて、佛法か能く死後の招福免禍の功德あることを信せしむ。而して未來の禍福なる者は、其の眞否有無、之を實證する方法なく、全く人の信仰内の問題なり。而して一度未來の禍福の存在を認め（て）之を信するに至れば、科學の發達低き上代に在りては、之を（根蒂的に）否定することは至難なり。既に其の根柢除至難なりとすれば、之に拘はることは已むを得ず。殊に人子として父母の死亡に際して、此に向て出來る限の力を竭して以て長き未來の幸福安樂を亡者に捧げんとするは當然なり。殊に佛教に取りて代りし所の朱子學も、三世輪廻は説かずと雖、其の（禮中尤重する）祭祀追遠の儀は、死者の靈魂の其の絶命と共に消散せず、其の（墳）墓に留まり、其の祠堂に寓して、例へば香の焚盡して香氣猶室内に漂ふか如く、約五世の間は存在すと説き、又風水説に至りても、死者の靈魂の骨に著きて數百年消散せず、暗に子孫に向て働き掛くるを肯定す。（巫覡の鬼神教に至りては勿論なり。其の最崇ふ所の荒神は △上面：△或は英雄豪傑或は忠臣烈女の（不滅の）靈魂なり。）故に佛教所説人間死後の禍福は、李朝の人士によりも決して受容れ難き信念（仰）にはあ



らす。而して士流儒人は、常に口に筆に佛教輪廻説を攻撃して迷妄なりとなすか故に、公然之に關心を有して之に要する諸種祈禱供養等をなすを憚る。然れば其の辨解を容るの範囲内に於て、之に向て有形無形の力を竭す。而して茲に李朝に於て佛教の猶上下より全く排斥し了する能はさりし核心、存在す。

朝鮮の王家は、新羅・高麗を通して陵寺の制あり。(支) 那帝陵の制に襲へるなり。高陽郡の正因寺は、睿宗の陵寺にして(信佛文臣) 金守温乖匡の「重勅記」あり。其の内に

「寢園有寺、何也。蓋嗣王追孝先王側近陵寢制爲仁祠、以崇三寶以導冥遊也。自漢唐以來、英君諒辟、莫不皆然。乃帝王報本追遠、無所不用、其極之道也。」[輿覽卷十一]

と云へり。崔致遠の撰せる慶州大崇福寺碑文に據れば、本寺は元聖大王陵追福の爲に建てられしなり。又高麗顯宗十二年、歸化文臣周佇の奉教撰せる開城玄化寺碑文に據れば、此寺は安宗及王妃追福の爲に初められしなり。~~爾後麗朝歷王陵園に寺社をおくを法とす~~(△上面: △△『輿地勝覽』卷五(開城) 雲巖寺は恭愍王玄陵の齋宮なり。[牧隱集參看] 赤字→ 又世宗二年七月『實錄』太宗陵寺を置くの可否を政府六曹に議せしむる條に柳廷顯・朴訔・李原・許稠等の啓に據れば、高麗九十餘陵中、寺を置く者は只三陵のみとあり。されは高麗の歴代陵寺をおきしにはあらざるも、恭愍王の陵に於ては陵寺をおけるか故に、李朝となりても太祖以下の陵に之に倣て陵寺をおけるならん。) (△) 然るに李朝となりても此の制は依然とし踏襲せらる。史を案するに、洪武廿二年太祖の正妃韓氏開城に歿し、豊徳に葬り、墓側に衍慶寺を立つ。是れ固より高麗の制に従へるなり。太祖國を肇むるや、其五年繼妃康氏歿し、之を貞陵に葬り、陵東に巨興天寺を建つ。次て揚州の太祖建元陵と文宗の顯陵に開慶寺あり、豊徳の定宗の厚陵に興教

寺あり、驪州の世宗の英陵に報恩寺あり、楊州世祖の光陵に奉先寺あり、高陽の徳宗の敬陵と睿宗の昌陵に正因寺あり、獨り廣州の太宗の獻陵には王の遺命に由りて陵寺を立てす。既にして成宗・燕山・中宗三代、排佛の施設、著々實行せられて遂に陵寺の制亦罷む。爾後排佛益々進み僧徒は益々賤しく、儒教獨盛なるや陵園追福寺の制度名稱は廢止せられしか、其實、殆ど歴代の王・王妃・王子等の陵園には或は廢寺の重修と稱して地域内に新に寺刹を立て或は附近の寺刹を指定して、或は修福の願刹或は造泡寺となせり。造泡寺とは、豆腐を造る寺の意味にして、其寺の僧侶は四季及忌辰・寒食の六回の祭享に必ず供ふへき豆腐と菓菓の製造に任し、又祭時に時刻を報する任に役に膺る。李王職禮式課に依頼して調査せる所によれば、現在六十一所の園陵に於て全く造泡寺の傳録のなきは、咸南安邊郡西端谷翼宗の智陵、京畿楊州南群場里端宗妃宋氏の思陵及清涼里の嚴妃の永徽園の三所のみなり。陵園の造泡寺に就ては現在の參奉等は單に祭享時の造泡の爲に置かれし如く謂なすも、此の如きは李朝末期の人々の考に於て、仔細に之を調査すれば、斯かり簡單なる性質にはあらず。第一に、現在造泡寺の内、或者は前には陵寺なりしか、陵寺廢止の後、唯名稱のみ變更せるあり、殊に水原隆陵の龍殊寺の如きは(名は)造泡寺なるも其の實陵寺なるは其の(初)建の緣起に視て一點疑なく(き者もあり) 第二に、其の建勅の由來に檢するに、全く陵寺と同様と見るべき者少からず、第三に、國家の待遇も其昔の陵寺と差別なしと認めらるゝもの亦少からず、第四に、造泡寺住僧の生活亦前の陵寺と大差なしと考へらる。王・王子・妃・妃嬪の神位を安置し、日夕其の冥福を修す。王家の陵園、既に此の如く、陵寺の制轍むと雖、其實、之に代りて造泡寺設けられて以て(佛の法に由りて) 先人の冥福を修するの儀は依然廢

せられず。士大夫の家亦同様なり。大姓世家の墳塋には齋宮と稱して墓事の僧侶をおく庵室(宇)をおく(設る)を常法とす。其の本の意味は、陵寺同様に専ら死者の追福の爲なること『李朝實録』(×上面赤字:×太宗十八年誠寧大君の宅を捨て、寺となす代に、其の墳墓につきて庵を營みて僧をおきしか如し。されは世宗五年十月『實録』に<sup>40</sup>(世宗五年十月[卷廿二四枚]「禮曹啓、新造寺社之禁、載六典。然無識之徒、寺社及墳墓齋庵續々新造。甚爲未便。)」世宗二年七月太宗(か其妃の)陵寺をおくの可否を問はれしに、世宗の述へし意見に「上曰、置寺非是好佛。健元陵齋陵亦皆有之。今上皇帝立報恩寺。今士大夫爲其父母、皆置齋舍。若不置。至于大妃陵、若不置寺、深以爲憾。」とありて、當時の士大夫の墳墓側の齋舎なる者の其實、追福の寺庵なることを言ふあり。)中宗廿年政府に於て寺刹撤廢の議起りしに、左議政金安老上書して意見を述べ、士大夫墳墓の齋宮に言及して

「凡寺社與稱齋宮新創者、並重治。撤廢毀則庶可消戢矣。」

と言ひ、遂に行はれさりしに徴して知るへし。現に齋宮僧侶の實際生活も、一室に佛を安して日夕修法讀經し、以て亡者の爲に追福するを法とす。従て有識僧は齋宮僧たるを好まさるを普通とす。今余の知る範圍の朝鮮士大夫の墳墓に就て觀るに、齋宮を有する者極めて多く、其慣習の來るや遠く高麗に在りて、踏襲して以て現今に至れるなり。即彼等士大夫は、朝廷に在りては正面端笏、以て排佛(撤寺)を論し(之を實行し)、其の私墳に在りては齋宮は、之を珍重して依然之を存して五百年を經過せるなり。例へば豊壤趙氏・韓山李氏・横城鄭氏・延安金氏・延日鄭氏・東萊鄭氏・厲山宋氏(皆)然り。又眞室李氏退溪先生(兄弟)の家亦退溪先生(兄弟)に至りて先塋を安東より禮安の北境樹谷に

移し此に(の先塋に)齋宮を設け、僧德淵なる者を住せしむ。『退溪集』卷四十二「樹谷庵記」あり。先生爲に齋宮をおき僧を住せしむるを辨解して曰く

「夫既祭於野則齋戒滌濯、宜有其【第四册<sup>41</sup>⇒第五册】所、釜鼎牀席、宜有其藏。典守之人、不可無所於寓。此又齋舍之所以不得不作也。惟世之爲是者、或出於佞佛求福之意、則大不可。今是菴也、未免守之以其徒、故置僧寮。然堂爲主而寮爲附、一嚴於奉先之禮而供薦之事未嘗及焉、則亦何嫌之有。」<sup>42</sup>

蓋し退溪の是の如き辨解をなすの已むへからざるは、當時士大夫大多數の齋宮か祈佛追福の爲に墳墓におかれ、爲に僧をおきしか爲なり。猶又(恩津宋氏)宋尤菴の墳墓にも亦齋宮を設け僧をおきしは金春澤の『北軒集』「送戒環遊湖南序」に

「水原萬義寺僧戒環、即守尤齋先生墓者也。昔年、吾弟仲施爲水原府使、余與之往拜先生墓、退而宿於寺、從環問先生遺事。環嘗爲擔先生籃輿、夜則侍宿。故其言先生事甚詳。」[復會徳に移す]

今朝鮮社會(宮中(及普通)家庭)に於ける死亡ある場合の實際を見るに、其臨終に當りては其側に在る婦女子は皆例として念佛を唱へ阿彌陀を呼びて亡者を托し、人死して三日目には例と汚竊に使を有縁寺刹[단골]に遣して現王齋を修す。現王とは、詳しくは普現大王又は普現天子と稱し、此世と彼世の中間に在りて、五人の判官と五個鬼王を隨ひ、死者あれば鬼王往きて之を捉へ來り、判官之を審判し、判決書を作りて大王に呈す。大王、之に憑りて或は地獄に送り、或は極樂に送る。或は人間に返す。<sup>43</sup>されは、先づ寺刹に人を遣して盛齋を設けて大王に供へ又『地藏經』を讀む。斯くて初七日より大祥に至る滿二ヶ年間、寺刹に就て十王齋を設け『金剛經』『地藏經』を讀む。十王は一七秦廣大

王、二七初江大王、三七宋帝大王、四七五官大王、五七閻羅大王、六七變成大王、七七泰山大王、第百平等大王、小祥都市大王、大祥都轉輪大王、是也。此の内七七日に祭る變成大王こそは、輪廻決定の權ある者とせられ、最恐れられ、此齋に尤資力を竭す〔十王經〕。又『豫修〔十王〕生七經』附『壽生經』ありて生年干支に由りて寺に納むへき錢額定まり、之を納めて始めて地獄に墮るを免る。其爲に（婦人等は）豫修齋を寺に設け、其夫其子の爲に之を修して其の錢を納めて領取證を受取り、死時、棺に入る。但し豫修齋は生前一度にて可なり。所聞によれば、李王家にありても先年高宗及純宗の昇遐に當りて直に宮中より私に使者を金剛山長安寺に遣して爲に鄭重なる齋祭を設行して冥福を修せりと云ふ。

（×上面：×『李朝實錄』太宗十二年冬十月に司諫院上書沔王の斥佛の猶足らざるを言ふ。太宗中に専ら王の太祖・神懿王后・定宗妃安定（？）王后の忌齋、~~七七~~（十王）齋等を前例に循て厚く之を修沔、施いて士大夫民間亦之に倣て、追善供養の儀、前代（の慣習）を革めざるを擧げて王の反省を促し、上下一齊『朱子家禮』に循りて慎終追遠の儒儀に革むへしと云ふなり。中に曰く

「今我殿下、以英明之資、窮性理之源、曉然知佛氏之爲妄、禁人爲僧以絶其本、革諸寺社以削其居。此歷代人主之所未能行、而我殿下之所能獨斷、誠千載之美事也。然爲死者供佛齋僧之事、因循未革、而人死則皆欲薦拔而爲七七之齋、間設法華（⇒席）之會。至於殯處、掛佛邀僧、稱爲道場。無間晝夜、男女混處、妄費天物、曾不顧惜。或有無識之徒、專尚浮華、極備供辦、誇示人目。其於存亡、有何益哉。」

○頭赤字：○又十六年・十七年項を觀れば、其の舊と讀書之地原州覺林寺に種々増築をなし、土田奴婢を寄進し、經典を納め以て考妣の冥福を

修し、全く其平生主張を反古に沔恬然たり。）亦以て現世禍福に對する佛教功德は之を信せざるも、未來福田の信仰は、太宗其人及當時斥佛を禮讚する士大夫間にも猶心底に力強く存し、其爲に寺刹及僧侶か重要必要物たりしを證すへし。）

以上の事實は、李朝佛教か永年政府の抑壓に堪へて而も猶能く其伽藍・僧尼及教法を其の最終迄傳へたるは、其大なる原因の一として、新羅以來の佛教に對する傳習的鞏（信）念、即人間死後の禍福は佛家に一任す、儒家に非ず道家に非ず又巫覡に非すと云ふ信仰か、終に君臣上下の心底に依然と沔泯ひざるに因る者なるを證する者なり。而して此の傳習的信仰と此の信仰の爲に起さるゝ護法的熱誠とは、朝鮮に在りては男子よりも女子に於て（殊に）具體的に現さる。換言すれば、衰滅沔表面社會的に教法の宣布を禁せられし佛法を猶裏面に保護して其の命脈を維かしめしは、主として朝鮮婦人の信心に因る。前述の如く太祖は表向、朝廷の公議に在りては抑佛教政方針を決定し、退きて宮闈に在りては其妃嬪と熱心に佛を奉信して個人及國家の爲に法の加護を求めたり。彼の繼妃康氏の如きは、彼か王師の（説）法を聽くトは彼と共に（之を）聽けり（上面：〔太宗實錄〕。一度李朝宮中に種子を植付けし〔恐らく是は單に高麗宮廷一俗習の引繼なるへし〕信佛は爾來~~四五~~（五）百年枯萎せず培養せらる。（◎上面赤字：◎太宗十三年五月〔6日〕中宮の疾の爲に藥師會を設くるや、王は明に「予固知佛氏之誕也。然婦人信之、故有此禱也。」と云へり。）國初に淨業院なる尼院あり~~五~~（◎上面：◎初め李齊賢の女に沔恭愍王の惠妃となりし人、此に住し、後代に貴顯の未亡人、此に住し〔太宗八年二月〕、宮女の老いし者は多く此處に入りて晩年を送れり。端宗妃も王か無慘の最後を遂くるや、侍女若干と共に此處に入りて剃髮し王の後生を修せり。又世宗朝、城中北學の

墟に就きて慈壽宮を營みて尼院となす。世宗薨するや、後宮剃髮する者十數人。普雨の『虛應堂集』によれば、慈壽院は其盛なるや五千の尼僧此に居れりと云ふ。成宗朝に至りて淨業院、廢せられ、其後明宗朝に文定（王后）攝政するや、淨業院舊址に復た仁壽宮を構へて尼院となし。此に慈壽・仁壽の二大尼院、城中に對立し、宮中老女官は奉仕せる所の國王薨すれば、剃髮して此に入るを慣とす。されは男僧の寺刹は、國初太祖建てし興天・興福・興徳、世祖の（再）興せる大圓覺寺の如き由緒ある寺刹さへ燕山君朝廢され、男僧は城中に住するなく又城中通行も禁せられしに拘らず、是等二大尼院は、歴代儒臣の抗議に堪へて顯宗二年迄存續せり。是れ歴代國王か後宮の長き歴史慣習の力に負け、王妃宮女の哀願歎講（願）に動かされて廢止するを得さりしなり。『實録』によれば、顯宗二年兩院廢止の時も舊宮人に於茲に居る者なかりしなく、斯くて此等尼院の尼僧は、城外僧侶と宮中との連鎖となり、種々の法事祈禱を<sup>たむ</sup>寺に於て設行<sup>せ</sup>寺刹を潤せり。尼院廢止後も尼僧の京城通行は英宗廿五年迄禁止せられず、其禁止後は宮女等、妃嬪の代理として乘輿して寺刹に赴きて盛大なる法事祈禱を設行し、遠方の寺刹に至りても所謂願堂と稱して宮中より某宮某王子の祈禱（願）所たる指定を得、之に由りて年年若干の財物の寄進を得、又地方官憲・豪族・大姓の不當誅求を免る。京城に限り門外近處に數多く寺刹の殘留を許されしは、實に宮中祈禱の便宜の爲なり。李朝佛教に對する宮中の擁護の力の莫大なる、想ふへし。文定尹氏の出るは決<sup>て</sup>偶然にあらず。士人の家庭亦之と同様也。家人臨終に念佛を唱へ齋會を寺刹に設行するは皆女性なり。子女を得ざる<sup>は</sup>、（◎右脇：◎又延命の爲に）七星閣に祈願し齋醮を設くるは亦皆女性なり。主人たる士人は、之を知りて知らざる如くし、（婦）女の爲す所に一任す。されは、併

合<sup>の</sup>明治廿八年乙未四月、日本日蓮宗僧佐野前勵〔1859～1912〕師の盡力に由りて僧侶入城解禁せられ、明治四十三年磚洞に覺皇寺建てられ、此に約五百年に於て復梵音說法、都城に聽かるゝに至りて、之に參詣する者は皆是れ婦女子なりき。而<sup>して</sup>現在猶賽寺信徒は~~婦女子と制限せらる~~大抵是れ婦女子なり。

蓋し婦人は、男子に比し心弱く<sup>すが</sup>居常何物に縋りて以て生活し行かんとする意識あり。△（上面：△王妃王嬪等殊に然るは、光海君の妃柳氏の居常に見る~~へく~~（→右脇→佛菩薩に祈願<sup>せ</sup>願くは、後世生て復た王妃となる勿れと言ひしに見るへく、又是等（後）宮信佛の力の偉大なるは）鄭曄の『守夢〔集〕』卷三戊午閏四月光海十年「金剛録」楡岾寺項に曰く、恰も再建の落成會に當る。

「今初七日、將爲無遮會以落之。僧俗自遠近來、雜沓填門溢寺。噫此寺創於新羅、今已千餘年。我世祖朝火而重新、萬曆乙未火、甲寅又火。天之屢示火〔⇒災〕、抑有意於其間耶。何崇奉之愈久而不已耶。今茲復建、費皆出內賜。至於營立浮屠、伐石椽庫、村踰狗嶺峻坂四十里、有若神運鬼輸者。不知費却幾許財力而就斯役耶。國家祈天永命之道、果在於此歟。」

而<sup>して</sup>朝鮮婦女は、古來（何等）教育を與へられざるか故に、其一度縋處として得たる佛菩薩乃至神鬼等への信仰の迷なるを悟りて之を改むるの機會なし。故に現今巫覡信仰の如きも漸く男性間には衰え行きつゝあるに拘らず、婦女は依然と<sup>して</sup>之に溺信し、此文明施設日進月歩の朝鮮に在りて奇怪なる習俗を展開しつゝあり〔村山文學士編『朝鮮の巫覡』四二九—四七四〔現在の信巫狀況〕參看〕。李朝佛教命脈維持の思想的根據は、未來禍福は（之を）佛教に托する一般朝鮮人の信念に在りて、其の信心的行爲は婦女子の擔當する所なり。

### 第三章 李朝儒學の三期

李朝儒學の發達は、之を三期に分ちて觀るを得へし。第一期は國初より李退溪以前迄に於て、第二期は李退溪より宋尤菴以前迄に至り、第三期は宋尤菴より國季に至る。

李朝國初に在りては、麗朝儒學を其儘繼承して太學を中心として朱子學を以て官學と立て、他方佛教の教化上に於ける勢力を日に月に奪取して駭々と沚單一儒教、詳言すれば、朱子教即(朱子を通沚のみ)孔子を觀る儒教の教化を奉する所の國家社會となすべく進めり。されど、此期間に在りては國家尚創業建設の時期を距ること遠からず、所謂學者と稱する者も其の型、(鄭)圃隱・(鄭)三峰・趙浚・河崙等の如く、主として學問上の所得をは之を政治上に施行して以て治國の事業を成さんとする者にして、謂はゞ儒學の本體をは經綸の一面に在りとなし、『大學』の所教の修身齊家治國平天下は連貫して切離すべからざる一學路なるか故に、學問の士、唯た修身齊家に止れば、猶是れ成學と稱すべからず。従て大體より言へば、朱子學の哲學的〔形而上學的の意味也〕方面、即理氣心性・窮理持敬に於ては(の研)思索と體驗に就ては、未だ尚充分に之を覈明して領得するあるに至らず。故に之を儒者とは稱すへきも、道學者とは稱すべからず。勿論其間には李晦齋の如き〔彦迪中宗明宗朝〕、徐花潭〔名敬德、同時代〕の如き、沈潜窮理工夫して道學の最高原理に透徹せるに庶幾き者、若干なきに非ずと雖、花潭は其學尚粗雜に沚其の説理も論理的に明晰で修辭的に學的ならず。秀てし自得の境地ありと雖、學者の典型たるには尚遠き者あり(従て門下亦振はず)。晦齋は(説理の)文章の暢達明瞭、前後比類少しと雖、一生の大部分を内外の大官に費せるか故に、靜思默考の暇に乏し。又門戸を開きて子弟を取りて道統を後世に傳遺す餘裕に乏しに缺く。畢竟其生涯

は道學者たるよりも官人として視るべき所多し。されば、此期の代表的學者としては、彼の金寒喧堂宏弼の門人に沚風采・辨論と誠忠に於て一代に山斗と仰かれ、中宗朝一時異常の拔擢を受けて(言用みられ計聽かれ)一味の徒黨を率ゐて朝廷に立ち、無遠慮に儒者政治を布きて種々風俗を儒教的に改良せしめ、畢竟職業的政治家(客)の陰謀に罹りて立朝僅に三年にして(一朝)失脚し慘死せる(趙)靜菴〔光祖〕に求めざるべからず。前述李晦齋、亦靜菴に(畧)類する經歷を有す。彼二人者は必しも名利をのみ求むる儒者には非ざるも、其學問(に於て取る所)の立場、經綸を主とする事功派に屬するか故に一旦時を失へば、世と相乖きて末路悲慘に終れるなり。

然るに李退溪〔明宗宣祖朝〕に至るに及び、初め尋常士流家庭の習俗に従て科擧に應沚官場の人となりしと雖、最初より中宗己卯の士禍の趙靜菴、明宗乙巳の士禍の李晦齋の悲慘なる前例に鑑みて、深く此世の實際に眞實儒者政治、即儒教の理(想)的政治を行ふにはあまりに事情複雑にして人心陰險なるを悟り、又一方では儒者の眞事業は、學問中途にして朝廷に出て、治人の地に即くよりは、經傳を參究して修養の道程を辿り、終に内省して自己の心地境涯、古人と比較して大差なきに到れるを認むる地位に迄到り。而沚其の修養の心要を今の人・後の人に傳ふるを以て一層醇正に沚貴き意義ありと信し、乃ち専ら辭退不出を以て處身の經となし、一生を捧けて道學の究明に委せり。此に至りて李朝儒(學)者の型式一變して事功以外にあく迄山林に在りて藏修する道學者の出現を見るに至り、従て學問研究の最適處最高處も京城より山秀水明(淨)の田園郷に移るに至れり。而沚彼は林下五十年の參究は朱子學理の奥蘊即理氣心性の原理を徹底に究明し了り、朱子の哲學思想の頂上を究め、此に朝鮮道學の發達をして其の絶

頂に達せしめたり。

朱子の著書の訓詁解(釋)も彼に至りて始めて圭碍なく成し了せられ(或は△左脇:△四書の諺解に或は朱子書の節要及解釋、『心經』の講説となり)、宋儒の使用する哲學的術語も正格に自由自在に使用せられて其の闡明講説に於て遺憾なく殆と支那道學者の著什と匹敵し、此に完全に宋の道學か朝鮮に移植えらる。更に破邪的方面としては陸象山・陳白沙・王陽明・羅整庵及禪學等、朱子學に似て其實非なる者を學的に批判し論駁して以て學人の方向を正しうし。又其人温粹、玉の如く(道)徳面に溢れ體に滿ち(面に溢れ)、文章の(正格)巧妙なる、前後其比を求むること難く、時望國を掩ひて官位亦高く、國王の禮遇其崇を極め、門流大に振ひて或は師に倣て嶺南村里に師道を尊嚴にして風化を延へ、或は科擧に及第して官場に翱翔し、流化長く後世に遺る。

退溪に由りて李朝儒學其の發達の頂點に達せる時、此に彼の後進にして少壯、道を彼に問へる一秀才李栗谷[名珥、宣祖朝]あり。亦退溪の如く師承なく獨學、程朱子の學に悟入し、夙に豁然として所得あり。退溪の理氣論に對して疑團を懷き、遙に退溪の門流に滄嘗て師と往復して理氣の互發・俱發を論せる奇大升高峯に左袒するあり、端なく統一せられたる朝鮮道學界は一大波瀾を捲起し、二大學派對立の源を開く。故に李朝儒學發達の極點に達せる時、既に分裂の機を孕みしは、實に多趣と謂はざるへからず。斯くて退溪は儒學の發達を其極處に進めし意味に於て、栗谷は別派を開きて朝鮮學界縦斷の基をなせる意味に於て、李朝儒學は二氏に到りて其の第二期に入る。二氏以前は此の頂上に到る迄の上り道なり。二氏以後は頂上と山腹との間を或は上り或は下る往來なり。二氏を中心として(儒學者)輩出し、或は事功に或は道學に各々其の全能力を發揮す。

退溪・栗谷二氏の學説(の相違を概括して述べられは、心の動なる)情に四端と七情とのあるを着想の區別あるは(心に)理と氣との二(部)分<sup>44</sup>あるに原因し、四端は是れ理の發にして七情は是れ氣の發なりとし、心中に亦理と氣との互發を認むるは退溪にして、其の典據とする所は『朱子語録』輔漢卿録孟子部「四端理之發、七情氣之發」の語に在り。(△上面:△從て宇宙の理氣論に於て、退溪は理を以て(一層)根本的なりとなし、先<sup>45</sup>理氣決て混論すへからず、理先つ在りて而後に氣在りとなし、修養論に於て深く心の發動を觀照して理發をして氣發を率ゐしはめ理發に由りて氣發を導くへしとなす。)之に對して退溪の門人奇高峯は、情は即(兼理氣なる)心の發なるか故に如何なる情も理氣の共發ならざるはなし、四端は單に七情中の善なる部分を剔撥せるに過ぎず、七情の外、別に四端なしと主張す。

栗谷は退溪生時既に此の退溪の理氣互發説に疑義を懷きしか、猶先輩に對する禮儀を思ひて公然發表するに至らず。退溪沒後即ち其の主張を發表して其の究道の同志成牛溪渾と數次往復辨論す。栗谷は四七か理氣俱發なるを唱道すると同時に、形而上學的原理に於ても理氣の(絶)對的二元を以て主張し、決して理前の氣なきと同しく氣前の理なし。若し理氣何れか、他より前に存在せりとなせば、宇宙には一時理のみ氣のみの時なからざるへからされはなりと(◎上面<sup>45</sup>:す。從て修養の要諦を氣の澄治におき、氣さへ(清)澄にして荒るゝことなくは、心の動は一切理に従ふとなす。)而して退溪も栗谷も共に朱子を以て學祖となすか故に各其主張を朱子の言論に證して以て(各自説を以て)其の正統思想なりとなすなり。而して此二氏の學説終に調和を得ず、其後宣祖栗谷生存時より既に其機運動きて宣祖中年以後、益々劇烈となれる東西兩黨の分争か偶然、東人は退溪の門人を以て中

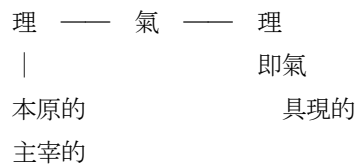
堅となし、西人は栗谷の知友及門人此か中堅たりしか故に、自然に學説と政争と結着くに至りて三百年未了の論案となる。(◎上面：◎退溪の門派は主理派となりて主として嶺南に行はれ、栗谷の門派は主氣派となりて主として畿湖に行はる。)

蓋し朱子の理氣説は、古來或は絶對的理氣二元論と視る學者と、理を以て一層根本的(と)なす理氣二元論と視る學者とあり。更に一轉すれば、理一元論、氣一元論と迄進む。予自身の意見は、朱子の理氣説は其の形而上學的宇宙觀の關する限、理を以て一層根本的なす理氣二元論なりとなす。勿論朱子の如き偉大なる學者の所説は多方面にして(間々)臨機の應答に在りて(互に)相反する(副はざる)(矛盾するか)如き言論をなす事あり。然れども靜に朱子の思想の開展の次第を放ふれば、主理氣従なること疑ふへからず。朱子晩年の説を録せる游敬仲・林夔孫の録中、明白に天理の先有了之而後に氣あるを謂へる者數項ある外、其の「答趙致道」書に「蓋理爲氣之主宰而氣爲理之形體。凡物之生、必有所以生之理。而氣聚以成質、理亦隨以具。故微分前後耳。」

と云ふあり。此に彼の理氣説の最後の觀念を道破す。蓋し朱子の宇宙觀は『易』に淵源して宇宙を以て一個活動體と觀る。活動するが故に固より無始より無終に(無始より無終に亘る)無限の流行活動と觀る。既に(深然たる)無限の流行なるか故に其内に理氣二元の分觀を要せず。勿論、何れか先何れか後、何れか主何れか従なるの時間的區別を立つるを要せず。只た一個流行生々の大作用に即きて其の法則ある方面を指して理と謂ひ、活(其)質的方面<sup>46</sup>を指して氣と謂ふのみ。且又轉て眼前歷々と認識せらるゝ具體的天地萬物の存在に即して言へは、各々其の形質生して然後に其の性即理を賦與せらるゝとなさるへからず。然るに理氣二元の

觀念を極度に推擴して歸一を要求する人間思考の本性に從て思辨し、假りに太初源頭、若くは萬有の本體と云ふ觀念を許すときは、初より(活動の)法則と質と資料とか同時に成立して一々の活動の法則となり資料となると觀るべきか。

(△上面：△換言すれば、理氣は單に實在の兩面となすべきか。)將又資料先に存在して其の活動の具現する裡に法則現はるとなすべきか。將又先に法則打立てられ、其法則に隨順して合則的に資料運營して(はれて)以て活動となると解すべきか(の)三様の見解、生すべきなり。朱子の思索の結果によれば、宇宙の流行と云ふ無限の鎖に就て假りに之を中義(斷)して(其)端の一環を始・起端となして言ふときは、其の一環の他の一環と結着けられ、又其の他の環の(次の)他の環と結付けられて以て鎖の全體を形成する前に當りて(全)鎖を一貫するプラン即理の存在を許さるへからず。此のプラン<sup>47</sup>(豫め)存在するか故に之に循て其一環は他の一環と(次々に)合法則的に結着けられて以て無限の鎖を形成す。故に全鎖を貫統する計畫は鎖其物に先ちて存在し、勿論個々の環の前に存す。然れども之を客觀的(即具體的)に觀れば、各環が結着けられて完成する所の一個の鎖其物に即てのみプラン其物が歴然として現るゝ者にして、理の當體をは氣の形成する所の鎖即環の集(結)合以外に求め見(ん)とするも到底不可能なり。故に朱子の理の觀念には二様あり。一は本原の一理、他は形に即して現るゝ理、是なり。是に至りて氣に對して理の主宰的地位を認むるに至る。



故に本原的主宰的理を認め得ざるときは、氣反り

て根本的と認めらる。更に即氣具現の理を認めて以て唯一理となすは、理氣常に並存して絶對的理氣二元論となるか、或は氣を以て先となす。

朱子の理氣説は、獨り朱子の獨創に出るに非ずして（其の思想の淵源<sup>△</sup>は）古來支那の正統宇宙觀に<sup>△</sup>（在る）者なり。即宇宙條理觀とも謂ふべきものにして、太初天〔人格的に帝〕か萬物を生するや、其意<sup>△</sup>（思）に由り（て之を生ず）。其意<sup>△</sup>思は即是れ條理に外ならず。宇宙萬物生して然後天之を<sup>△</sup>法理を以て主宰するに非ずとなす所の者なり。是れ支那思想檢討<sup>△</sup>（に於ける）重要著眼點なり。

光海君を歴て仁祖の世となり、丙子の役、清朝に屈服し、孝宗立つや（深恩ある）大明の爲の國讐と、其瀋陽に囚はれし間の私怨とを報せん爲、實際的には無謀なるも道學的には所謂春秋大義を伸ふる所の對清（北伐）の空想を懐くに至り。其説に深く共鳴せる宋尤菴を拔擢して日夜謀議を凝らし、尤菴、山林道學先生を以て一躍して孝宗の顧問となりて水魚の誼を締す。彼は西人なり。此に對抗して其勢力を競はんとする東人あり、絶えず諍議を惹起す。而して其の諍議の（表面の）問題となれるは禮論と經義なり。

（△上面赤字：△是に至りて學説と黨論と完全に結合す。而して黨籍か固定する以上、學問の自由研究亦止む。）尤菴の禮論・經義は、栗谷の傳心弟子金沙溪・慎獨齋父子に受け、之に反對する南人に許穆・尹鑰等あり。例へば（禮論を擧ぐれば）孝宗の薨去に際して<sup>△</sup>（繼）母慈懿大妃は（如）何（なる）喪に服すべきかの問題に對して、孝宗は第二子なるか故に『儀禮』の「喪服」疏に縱令大統を繼承せる人も、其死後三年の喪に服するを要せざる場合<sup>48</sup>に當るとなし、服喪一年に<sup>△</sup>可なりとなすは、宋時烈にして、『儀禮』斬衰章の疏に第一子死せば嫡妻生む所の第二長者を取り~~之を取り~~て亦長者と名つくと

あるに循りて、孝宗は繼體の義第一子と異なる所あるへからず、大妃は三年服喪せざるへからずとなすは、南人の論なりしか如し。又尹鑰は白湖と號し、朝鮮學者としては比類少き獨創の見に富むと稱せられ、其の四書の解釋往々集註と異義あり。退溪・栗谷等の先輩を眼中におかず、新説を唱へて終に尤菴と相容れず。傳ふる所の『論語』〔鄉黨〕「厩焚。子退朝、問傷人乎、不、問馬」章を、人を傷けたるや否やと問ひ（次て）馬を問ふと訓讀せしと云ふか如し。要するに禮論・經義共に是れ學説の争なり。更に進みて尤菴は、栗谷の四七理氣論を奉るか故に『朱子語類』輔氏録の四七（理氣）互發の語を以て朱子の語となすことを厭ひ、『朱子大全筭疑』一二一卷を著して『朱子大全』中の難字難句及疑義なる者を逐卷拾集<sup>△</sup>之を註解すると同時に『朱子言論同異攷』三卷の（著作の）事業に着手して、朱子の言説の時に由り矛盾するあり、（語類）悉く以て朱子の<sup>△</sup>眞實言（本思想を表はすもの）となす能はざるあるを證し、以て四七理氣互發の一行の尤疑ふへく、朱子の（雅）言と認め難きを斷せり。爾來南人は益々主理<sup>△</sup>（を唱ふる）退溪説を固執し、西人の學祖栗谷の主氣に陥れるを攻撃す。されば、李朝儒學の第三期は宋尤菴を以て之を代表し、他の無數の學者は、或は之に隨倡し、或は之に反對して以て其地位を作れる者なり。而して彼と反對派の相主張する所の學説に至りては、退・栗二氏の思想の外に出てざるなり。

朱子學派の外に異學の行はるゝに至れる、亦此期の特色となさるへからず。王陽明の學問は既に退溪の當時『傳習録』と共に將來せられ<sup>△</sup>（△上面：其門人柳西厓の如きは好みて之を讀しも）朱子學と齟齬するか故に退溪先づ之を斥し、爾來士類にして公然之を研究し之を奉する者なかりしか、東人政争に破れ、次て少論亦老論に對して劣者の地におかるゝに至りて、彼等



一代不平兒は、或は官學に反抗せんか爲に（陰に）陽明學を修め之を奉する者を生ず。少論の鄭齊斗霞谷<sup>49</sup>の如し。（但し『霞谷集』には別に其の主張を載せず。）少論名流の子弟陰に之に従學する者少からず。（今猶其學系、係る鄭萬朝の如きも幾許其の系を引く。×上面：×

明齋－霞谷－李匡呂〔參奉〕

李忠翊〔椒園〕－李建昌〔寧齋〕

椒園玄孫

襲家學

茂亭從學寧齋）

其の學、陰に少論家に行はる。既にして在清教會士を通して西學即天主教の半島に輸入せらるゝや<sup>50</sup>、老論に比ぶ研究心知識欲に富み又常に時代の趨勢に反感を有する南人等中、之を喜ぶ者輩出し、延いて地方に及ぶ（李家煥・丁若鍾等）。他方清朝乾隆・嘉慶文化の爛熟は自然に之に對する朝鮮學人等の興味と尊敬とを喚起し、清朝經學・清朝詩文亦漸く入燕の學人を通して朝鮮に將來せられ、又地理・天文・算學等も在清宣教師の漢文にて物せる著述に由りて稍々半島に輸入せらる。既にして儒教側（洪大容・朴燕巖<sup>51</sup>・（○下面左脇：○洪良浩〔卷十九陳六條疏述自清致國俗可改者〕）李書九・（南公轍）申緯・金正喜・申綽）より斥邪の主張、猛然と發し、遂に純祖・憲宗朝の教獄を煉成す。されは第三期に至れば、朱子學の思想信仰上の統一的權威、實際には稍や仄き異學異教の私に奉せらるゝを見るに至ると謂ふへし。<sup>52</sup>

（上面左脇赤字：然れども如是新經學は京城縉紳學人に限り、地方には波及せず。故に闔國の意見を導くは、依然舊學間なり。）

#### 第四章 朱子學の作出せる朝鮮の社會相

余は平素、朱子を九泉より起たしめて（及支那朝鮮（日本）の朱子學派の學者をして）李朝末

造の國家社會の實狀を目撃せしむるを得ざるを遺憾とする者なり。朱子は其生存時に既に其の學説に賛成せざる學者あり、又其の政治の意見に反對する政治家もあり、殊に其の晩年は所謂僞學の禁の爲に生活甚蕭條寂寞、殆と形影相對する如くなりき。其後、元に至り（△上面赤字：△許魯齋の力に由り）朱子學、大に興隆したるか、（佛・道・ラマ教固より盛）明清となりては復た王陽明學・攷證學等流行し、縱令科擧の經義に朱子の解釋を用ふるも儒學界の思想は決して朱子學に由りて統一せらるゝに至らざりき。

日本亦然り。（陽明學あり古學あり古文辭あり）

（上面赤字：神道學あり國學あり）畢竟儒學界に於ける最有力の一學派として存在するに過ぎざりき。然るに朝鮮に在りては前章述ふるか如き經過に由りて、先づ朱子學に由りて儒學を統一し、次に朱子學に由りて佛教を倒し、道教を倒し、其他苟も朱子學以外の學説も思想も皆之を禁塞し、以て完全に朱子學をのみに由りて闔國古今（現未）の思想及信仰を統一せるなり。李朝政治も畢竟朱子の懷抱せる所の政治思想を如何にして此國に實現して獨り國民の精神生活のみならず、有形生活即風俗禮習に至る迄、朱子の立言に準則せしめ、以て朱子の夢寐せる理想の國家社會を出現せしめんかと努力せる施設に外ならず。（△上面赤字：△（例へば支那にも未嘗有、朝鮮人の常に誇る所の）自天子至庶人皆三年服喪之實施。）約言すれば、李朝は國を擧げて朱子學の鑄型に容れたるなり。朝鮮は實に競争者なき朱子學獨占の天地となれり。思の儘に朱の思想を具現せしむるを得る事情となれり。反對派か存在する場合には、現れず已むべき本質まで明白に現はるべき機會を與へられたり。朝鮮は朱子學の試験場たりき。此には其利病共に明瞭に驗出せられたり。「故に若し朱子をして李朝末造の朝鮮を目撃するを得しめば、彼は自己の學説思想か遺憾なく實際的施行に移されし場

合、果シ如何なる國家社會を出現するに至るか  
を（驗）得したるならん。勿論朝鮮の地域や禹  
域に比して極めて小規模なるも、一學説の試験  
場とシは充分ならさるへからず。余は朱子をシ  
朝鮮を目撃せしめざるを遺憾とす。」<sup>53</sup>茲に朱子  
の學說思想の障碍なく具現せられし朝鮮の國家  
社會の特異的相の輪郭を叙せんとす。

### 一 佛教排斥と巫覡及風水の流行

（李朝に至りて）佛教排斥の迹は前章之を詳述  
せり。今重説するを省く。

巫覡の（原始的）鬼神教は、支那朝鮮の古代に  
在りて深く民信を集め、巫覡の位地の甚尊貴に  
シ社會の神聖にシ（視せられ）指導的權威を興  
へら（れ）しは、今鏤述するを要せず〔狩野學博  
士の研究<sup>54</sup>〕。朝鮮の三國及新羅時代に國王か巫覡に頼みて治病禳災をな  
せるは、『三國史記』に其の例少からず。高句麗  
本紀次大王三年には「師巫」の字あり、寶藏王  
四年には「神巫」の字ありて高句麗國俗、尊巫  
の盛なるを證し、又新羅本紀第二代王南解次々  
雄の名に金大問の註に「次々雄或慈充」の金大  
問の註に

「方言謂巫也。世人以巫事鬼神、尚祭祀。故畏  
敬之。遂稱尊長者、爲慈充。」

とありて高句麗と同様の風俗なりしを證す。百  
濟亦恐く同様なるへきはし。（△上面：△馬韓天  
神の儀、恐く巫覡の祭る所ならん。）高麗に至り  
ても巫覡の信仰衰へず。（太祖の勅めし）八關祭  
の天神山岳河川龍神等は、恐く道教と巫覡との  
混合の鬼神なるへく、（△上面：△『高麗圖經』  
第十七卷祠宇に「高句麗古俗、男女群聚爲倡樂、  
好祠鬼神社稷靈星、以十月祭天大會、名曰東盟。」  
の迹を繼承せる者、即高麗太祖朝より朝廷の大  
行事八關齋にシとなし

「其十月東盟之會、今則以其月望日、具素饌謂  
之八關齋、禮儀極盛。」

と云へり。）『麗史』に現はるゝ國家の禳災祈雨  
の爲の大規模の巫覡儀も少からず〔朝鮮の巫覡第  
四章第二節〔古來の神事〕〕。李朝となりて朱子學は  
表面巫覡の妖教を排斥するに拘らず、宮中には  
道教の昭格署と並ひて星宿廳ありて、此に國巫  
を置くは『實錄』太宗十八年、燕山君九年に明  
白なり。況んや民間に於てをや。數次京城内の  
巫覡を逐出して而シ（せトモ而モ）其の禳災招福  
祈禱の爲に城内に來往已ます。士大夫商家にし  
て一年數次定期<sup>なんご</sup>壇<sup>なんご</sup>巫覡を招きて巫儀を行ふ習  
慣をなす者頗る多し。現在に至りて其數益々増  
加し、村山氏の調査によれば、全道巫覡數一萬  
二千三百八十人に達す。治疾・禳災・招福・祈  
雨・占トは皆彼等の專業とする所なり。實に朝  
鮮に於ける凡百新時代施設の逐年の進捗に對す  
る一個皮肉なる時代無視的奇現象なり。

蓋し（朝鮮）巫覡は、其の起原はサーマンの鬼  
神教に在るも、現在となりては既に其の原始色  
を多方喪失し、佛教・道教と混淆雜揉し、其の  
醜する所の對象も其の諷誦する所の經文も、或  
は佛教の佛菩薩神衆、或は道教の鬼神〔觀音、帝  
釋、關帝、星辰、龍神〕あり、或は佛の經典あり、  
或は道教の經典あり〔玉樞經、天地八陽經等雜經十  
數種、祈禱經文集參考〕、實に雜然たる者あり。是  
れ一方に於て巫覡か佛教・道教の衰亡して（其）  
社會的宗教性を喪失せるに乘し、之に代りて其  
の本尊乃至經文を收取れて一層其の機能を多樣  
にし、其の尊信を大にせるものなり。蓋し前述  
の如く、高麗朝に於ける佛教は、其の現世功德  
の一面に由りて民信を繋けり。今佛教排せられ、  
寺刹は都市より撤却せられ、僧徒の城市に入る  
を禁せらる。然らは何に由りて多數民は現世の  
福を招き災を禳はんか。是に於て特に現世の禍  
福禳招を以て其の教旨と立する巫覡教か大に民  
信を博し、駭々として民間佛教に取りて代りて  
（民間）祈禱を一手に収むるに至れるも怪むに  
足らず。故に大體論として李朝の佛教排〔斥〕

は、巫覡（信仰）をして益々博く深く以て今日に至らしむと謂ふへし。

風水説は中、陰宅風水は郭璞『古本葬經』〔内篇一卷〕に

「氣乗風則散、界水則止。古人聚之使不散、行之使有止、故謂之風水。風水之法、得水爲上、藏風次之。」

と云ふか如く、善地を擇ひて（墓を作り）其處に適當に水氣あり（又風の吹荒しを防ぎ）て骨をして乾きて（腐朽せず）塵化飛散せしめず、以て死者の靈魂を永く留めて後孫の爲に冥助を與へしむる術なり。黄海道延安普通學校の調査によれば、某氏の先塋の緇禮に當りて檢するに、二百五十年を経たる骸骨潤澤にして黄色を有し、完全に原形を保存せりと云ふ。風水は、儒・佛・道三教の因果應報を無視し、唯た墓地の吉凶に由りて家（其子孫）の禍福を取るとなす。由りて之を「奪神功改天命」と稱す。されば風水は人間寂滅の觀念に於て根本的に（△上面赤字：△佛か火葬を行ふに見るべきか如く）佛教の涅槃か眞空に歸し（するを意味し）、死すると共に皮肉毛骨、一切皆眞に滅ひて一塵一滓の残るなきを希求すると正に相反す。従て佛教盛に行はるゝ社會に在りては（墳墓）風水の迷信は猶さ迄深く行渡ること能はず。高麗朝に在りても其の末王恭愍王陵に明に風水の相を見ると雖、之を陽宅風水に比すれば、史上傳へらるゝ所、頗る簡にして疎なり。反りて幾多の大官たりし信佛居士の（遺言）火葬に附せしめしを傳ふ。然るに李朝に至りて佛教を排する施設の進行するに（朱子學の權威嚴立するに）従て（陰宅）風水の迷信愈々深く、遂に現今の如く苟も朝鮮人にして其の心底に墳墓の吉凶に無關心なる者全絶人無の状態となるに至れり。風水の原理より言へば、吉地さへ獲は、由りて以て子孫の福田となすへきか故に、佛の功德福田を取去られし人民に向て誠に心強き依恃者たるを得るに、

朱子其人の風水に對する觀念、頗る方便的にして、毫も其の（之を）迷信なりて（なりとなして）排斥すること、司馬子・程子・張子の如くならず。反りて『語類』に於て微温的なから子孫として父祖墳墓の吉凶に關心するは、一概に迷信なりとて排貶すへきに非ずとなし、又實際傳ふる所によれば、朱子も父母の墓に就ては風水に由りて二吉地を収めんか爲に父母を分葬せりと云ふ〔毛奇齡西河集喪禮吾説〕。是に於てか朝鮮の士流亦相率ゐて風水の迷信に陥り、憑託するに朱子を以てす。

今佛家に近く明治四十四年（◎上面：◎即朝鮮寺刹令發布せられて此の經の諷誦を禁する迄）迄朝鮮寺刹にては毎年春秋舊二月十月の中日三日間、其の伽藍神の爲に大祭齋を設け、又神衆壇の神將に供養す。其の時誦する經は『佛説天地八陽經』なり。本經文には唐三藏法師義淨奉詔譯とあるも『大藏』には収められず、『(大日本)續大藏』に収録す。然るに『古今釋經（譯經）圖記』の義淨譯經中には本經目を載せず。『大唐内典録』にも本經目なく、『貞元釋教録』には「偽妄亂眞」となす。然れども石田茂作氏の『(寫經より見たる)奈良朝佛教の研究』〔1930〕によれば、奈良朝時代、本經既に日本に將來せり。以て其の支那上代に於て作れられし偽經たるを知る。

（◎上面赤字：◎又羽田〔亨〕博士の研究〔回鶻文の天地八陽神呪經『東洋學報』1915〕によれば、回紇語譯あり。）此の偽經か何故に佛教衰亡して其の社會的機能を喪失せる朝鮮に在りて近代迄續きて諷誦せられしか。今其の内容を觀るに、佛世尊か舍利弗等諸（無礙）菩薩に告ぐる所に汚東方八佛土に各一菩薩ありて（の現在人間の苦患多きを見て如何に汚救濟せんかの△右脇△問に對して答へ）常に人間に（間々雜）居る八大菩薩か本經を諷誦するを聞けば、即時來りて其の苦患を救ふと云ふなり。而して其の苦患の内に（特に）殯葬時讀誦の功德を高調して

「善男子日々好日、月々好月、年々好年、實無間隔。但辦即須殯葬。殯葬之日、讀誦此經七遍、甚大吉利、獲福無量、門榮人貴、延年益壽。命終之日、並得成聖。善男子殯葬之地、莫問東西南北、安穩之處、人々愛樂、鬼神愛樂。即讀此經三遍、便以修營安置墓田、永無災障、家富人興、甚大吉利。」

と云へり。即本經讀誦七遍に於て殯葬し、三遍にして窀すれば、能く風水の障を除きて（時は何年何月何日にて、處は）東西南北到處の山野皆吉地たるへしと云ふなり。是れ、佛の法力の能く風水の術に對抗して優越なるを得るを宣する者なり。李朝佛教極衰し、風水専ら盛なる時勢に在りては、本經の如きは佛徒として尤尊崇すべき（内容を有する）者に屬す。恐らく獨り（上代は）伽藍神の齋會のみならず、又殯葬窀窆の際にも讀まれしならん。本經の諷誦は高麗朝より既にあるは、高麗本重刊と認めらるゝ本經板あるに知るべく、又其の効驗あらたかなる經として佛家及一般に認められしは、巫覡の常誦經となれるゝに知るへし。

## 二 名分の確立

正名分とは、名に由りて（分の）實を責むるか故に果して名か（其分の）實を著はすかを嚴重に正すの謂にして、儒教の政治學に在りて第一義なるは言を俟たず。（△上面赤字：△司馬光『資治通鑑』首章に

「光曰、臣聞之天子之職、莫大於禮、々莫大於分、分莫大於名。何謂禮、紀綱是也。何謂（分）、君臣是也。何謂名、公侯卿大夫是也。……夫禮、辨貴賤序親疎、裁群物制庶事。非名不著、非器不形。名以命之、器以別之、然後上下燦然有倫。此禮之大經也。名器既亡、則禮安得獨存哉。」）。

朝鮮に在りても（『漢書』地理志）箕子の西來と共にして立てし八條の教中に「相盜者、男後入爲其家之奴、女子（爲）婢」の一條ありて、

奴婢なる淺民階級の存在を許し、良賤の名分定まると、朝鮮人に由りて傳へ信せらる。『麗史』刑法志奴婢に

「夫東國之有奴婢、大有補於風教。所以嚴内外、等貴賤。禮義之行、靡不由此焉。」

とあるは、即此意を表はす也。されは羅・麗・李三代を通して憐むべき奴婢は、或は公賤或は私賤と於て虐使に沈淪し、而も何人も其の解救を主張するなく、明治廿七年甲午大改革に開化黨か軍國機務處議案として其の解放を決定する迄に至れる也（り）。

斯く箕子に由りて蒔かれたりと信せらるゝ名分説は、朱子學の傳來に由りて一層牢く強く生長し、正名分は社會の最有名（力）なる統制思想となれり。其尤顯著なる現れは、庶孽の賤待、是也。高麗時代に在りても固より嫡・庶の區別のありし事は、國家制定の服制に徴すへしと雖、然れども未だ法典に表して庶子の公權を制限<sup>55</sup>するの事は、之を聞かず。李朝太宗十五年正言〔⇒右副代言〕徐選、上言して庶孽は清官に叙用する勿れと言ひ、遂に由りて庶孽を清顯に通せざる内規生し、其後朱子學の愈々深く人心を支配するに従て、名分論益々勢力を得、世祖朝『經國大典』を制定するに當りて選舉部に於て庶孽子孫は、罪犯永不用者、贓吏之子、再嫁失行婦女之子孫と並へて文科生進試に應ずるを禁ずるに至れり。後宣祖壬辰役より仁祖にかけては擧國一致を要する國難に直面せる爲、此禁稍や緩みて許通の恩典に浴び文科に及第する者も若干之れありしか、幾ならずして亦何時とも門戸を杜塞せられ、英・正祖の進歩主義を以ても遂に之を解くを得ず。斯くて（宣祖以後は）兩班は庶子ありて嫡子なければ、養子するを通例となす。是れ、實に天秩人倫を無視せる殘酷なる法なるも、此亦奴婢同様、名分論よりして如何ともなすへからさりしなり。

其他凡て社會階級、兩班と中人、兩班と平民、

官と吏、良民と淺民類の如き等分、亦又同し名分の範圍に屬し、五百年此の關係に動搖なかりしは、亦朱子學に於ける正名分思想の偉大なる力にして、此の目に見えぬ大なる力か社會を統制して絶大なる社會力となり、以て彼等庶流・中人・平民・賤流幾千萬人をして身を焦す如き怨恨を耐へしめしなり。

同様の原理に由りて朝鮮の君臣の名分も神聖不可犯にして李朝五百年を通して眞の意味に於ける亂臣賊臣は實際未嘗て出てさりとて言はる。普通朝鮮人の手に成る朝鮮史籍を繙けは、逆賊逆臣なる文字は容易に頻使せらるゝかれ、殊に黨論の過激に趣きてよりは反對黨を呼ぶに例として逆賊を以てす。然れど熟々之を検討すれば、彼等は必しも叛逆を企てしにはあらず。只た時の權者を倒して之に取りて代らんとせる迄なり。國王李氏を倒して以て新朝を建てんとせるには非ず。朝鮮唯一の教學朱子學に在りては、臣下として君を倒す之に代らんとする如き名分を無視する思想は、其發生を許さるなり。是れ、李朝末造政治(事)彼の如く腐敗し糜爛し、人民の怨嗟、野に充滿しなから猶容易に滅亡に至らず、國運不振、國力萎微を極めて、君權常に隆、爲さんとして爲す能はさるなかりし一の有力なる理由なり。予は、李朝五百年國祚維持の一半は、朱子學の教化、殊に其の正名分思想の力に係依すとなすものなり。

### 三 春秋大義

朱子、南宋の末期に生れて眼に神州の陸沈を見、慨然と汚春秋大義を唱へて立ち、朝廷に用ひられざるや、『通鑑綱目』を著して志を現す。(△左脇赤字：△勿論『綱目』は盡く朱子の手に成れるに非ず。唯た凡例一卷手定に出て、其綱は門人等の凡例に依りて治むる所、其目は趙師淵の執筆する所なり。) 朱子の政治論の骨子は胡・漢の別、攘夷斥和の二大主義なりき。

朱子學の朝鮮に傳はるや、此の朱子の正統思想も直に學者によりて諒解せられ、其後朱子學の理解の深く廣きに從て、春秋大義は全朝鮮學者の骨髓に填するに至る。此の最初の表れは麗末鄭圃隱に於て、彼は辛禡元年に「請勿迎元使疏」〔圃隱先生文集卷之三〕を上りて元使斥くへきを切論せり。(△右脇赤字：△辛禡は親元主義の最後の王なり。)

李朝となりては、屢次此思想の發揮せらるへき機會あり。其の第一は、即宣祖壬辰役なり。日本は胡夷にして、其の不法侵入に對しては擧國底死戰ふへきあるのみ。苟も乞和の如き事あるへからず。是れ春秋の大義なり。されは初は無準備を以て日本の強兵に對し一溜もなく敗北せるか、既にして國民漸く覺悟を定むるに至りて、各地に義兵なる者蜂起し、義兵の大將は多く是れ儒生にして李退溪・曹南冥・李一齋・李栗谷等の門徒に屬し、師教を承けて胡・漢の義理を唱へて身命を惜まず、國家の正氣猶泯ひざる者あるを示せり。儒生の壬辰役に於ける義勇の事蹟は一個の著述を成すに足る。正祖朝大提學洪良浩耳溪の「梁青溪倡義檄跋」に

「壬癸之難、慳矣。再造我東方者、實賴皇朝之力。然余嘗謂、雖微天兵、國無終亡之理。何者、於人心見之矣。始島夷之蔽海來也、民不見兵、久矣。長劍毒丸、莫之與櫻、則列郡之瓦解、固也。及至三京淪沒、乘輿播越、則八域含生、莫不嘔血磨〔⇒摩〕拳、北首爭死。而時月之間、我之喘息稍定、彼之長技〔⇒短〕自見。於是乎義兵起矣。斬木揭竿者、蜂涌而雲合、前遮而後扼。賊不得寧息、則彼懸軍深入者、其勢自不能支耳。此實我祖宗、固結人心、培植士氣之功也。」

正に吾意を得。而汚祖宗人心を固結し士氣を培植するに最與りて力ありしは、朱子春秋大義の思想なるに言及せざるは見得て徹せざるゝ憾あり。

第二次は、光海君より仁祖にかけて明朝顛覆し

清朝の正朔を奉するの不得已に至れる際なり。是時、國論は政治家と儒者の二派に分れ、儒者は極力、國滅ふへし、大義没すへからすと唱へ、政治家は、最後の決定は力に在るを思ひ、適當の條件にて降服せんとす。茲に種々慷慨義烈の物譚を傳ふるは、黄江漢〔景源、1709～1787〕の『陪臣傳』に載するか如し。當時の朝士は道理と沚は儒者に共鳴し、事實問題としては政治家に従へり。而沚和議既に成立するやし清兵撤退するや、道理の議論、勝を制し、或は明の年號衣冠を襲用し、或は明帝の爲に祀廟を立て、孝宗王の如きは北伐の志を定め、斯く沚春秋大義の思想は、國隅々に行亘り、八道の草木も大明の爲に哭するの有様なりき。

第三次は、即大院君の攘夷斷行なり。大院君攝政となるや、即ち耶蘇教の大蔓延と外國の交通貿易請求の二大事件に遭遇す。彼は此二件共に春秋の義より觀て許すへからすとなし、敢然と沚西教を芟除し攘夷を行へり。爲に幾萬の耶蘇教徒を虐殺し佛國軍艦と交戦す。是時、山林李恒老華西は、當代儒生の意見を代表して攘夷の上疏をなし、開城・嶺南儒生等皆之に響應す。大院君の果斷決行も、此の力強き思想的後援あるに由りて成されしなり。

第四次は、明治卅八年日韓新協約成立より併合迄なり。明治卅八年には李恒老の門人崔益鉉勉菴は、國亡ふへし、島夷に降るへからすと唱へて、遂に對州に謫せられ、次て嶺南儒生許蔦・李某等、義兵を起糾合沚所在亂を作し、三年に亘りて官兵を惱す。併合成るや、任鼓山の門人全羅道儒生の棟梁田良齋は、東海を踏みて世を避くるの意を以て嶼（群山）島に遁し終に群山（界火）島に於て死す。彼の文集を看れば、到處節義と道義とを不可分となし、節義に於て缺くる所ある者は道に於て得る所ある者に非すと絶叫す。同時に嶺南儒生の棟梁居昌の郭鍾錫は、經學院祭酒を以て召されて應せず、居昌に退居

し、其の文集を看れば、易理を述へて坤☷（より）復に進むか故に、今の坤の世に當りて靜に一陽來復の時節を俟つと云へり。（彼亦先年逝けり）。現在朝鮮儒者の（開）正統思想間、朱子春秋大義の正統思想は、道即節義と天運循環の二形式に於て猶活ける者ありと視るへし。

#### 四 朋黨分立

戴東原『孟子字義疏證』中に朱子學派の學風並に朱子學者の通習に就て評論を試みし如く、朱子學の行はるゝ社會に於ては、一方には利義の辨の思想、甚力強きか故に士風嶄々たる者あると同時に、他方には理性を偏重して情誼を容るゝ餘地を與へざるか爲に、小人をして時を得しむる事罕なる代に、各己の意見を以て正しとなして他の意見を排し、而かも各々我見の偏する所あるを知らざるか故に協調に難く、遂に元と小人にに向てのみ蒙らすへき非難なる不義とか欲とか云ふ言辭を、君子互に交も用ふることゝなり、殘忍刻薄、風をなし、遂に往々同臭相牽き一味相求めて朋黨對立を見るに至る。即朱子學か他學と對立する場合には、朱子學派の人相一致團結して理論を以て他學と戦ひ、毫も讓らざるか、一旦他學派降服し朱子學のみの世となれば、従前他學を許さゝりし同一心理に因りて同一學派に在りて分黨を生し、争鬪して息まさらんとす。朱子其人の至正至剛、苟も道理に當りては天下何物にも讓らさらんとする崇偉卓犖たる性格か末流に由りて惡模せらるゝなり。朝鮮は、宣祖朝に至り、右文二百年の治化の効果現れ、奎運方に隆に、學者作家前後輩出し、李朝の盛代となれり。而沚此に端なく朝廷士君子の間に朋黨對立するに至る。勿論官場に於ける朋黨なる者は朝鮮の學者も屢々評論せる如く、其の眞の起因は朝士の權勢競争に在り。權勢の競争始まれば、其の獲得及維持に最有力なる方法として朋黨の發生を見る。但し朝鮮の東西分

黨は、李栗谷も其當時の批判せる如く（此の）以前迄の朝廷内の分争、清流・濁流と判然區別するを得、君子と小人との争なりしか、學問開け人才進み、君子朝廷に盈つるに及びて、乃ち（君子間に）東西の分黨生し、此れ眞の朝鮮の政黨となりて爾來三百年、調停蕩平するを得さりしなり。政黨對立し言論戦開始せらるゝか、其言論は何れも理性上に立つ道理上の主張なり。而して此を草する者は何れも當代に名ある學人なり。而して敵も味方も極力朱子の言論行蹟を引用し來りて以て理論の證據となす。~~本編の冒頭に~~

（其の魁をなす者に宋尤菴あり。）然らば則、朝鮮に於ける朋黨分立は、其思想的起因として朱子學其物の本質的傾向を擧ぐるは、蓋し穩當の見と信す。（○左脇赤字：○李建昌の『明美堂集』卷十一論<sup>○</sup>中原〔⇒「原論」中〕に朋黨の猖獗永續の理由を列擧して八項とし、一道學太重、二名義太嚴、三文辭太繁、四刑獄太密、五臺閣太峻、六官職太清、七閥閥太盛、八承平太久とし、第一に道學太重を擧げしは我意見と符合す。）

朋黨の争、既に君子間の争なり。又其言論は朱子を以て證權と立つる所の義理に在り。是に於てか當然の成行として、學者か黨論に於て重要な役目を演ずることゝなり、いつともなく學說と黨論と結著くに至る。其の學說の分岐點は前章に畧述せり。

斯の如く朝廷に於ける政論か學說の論争と結著き、學說攻撃（か）彈劾の一具たるに至りて、茲に學者政争に重要な役目を演ずることになるや、更に一轉して朱子の名代を活ける當代の學者に求むるに至りて、遂に朝鮮獨得の山林なる制度を産出す。山林とは、山林儒の畧稱にして不事王侯、高尚其事者の棟梁の尊稱なり。（斯かる者は）朝廷頻りに清要職を以て招きて出でず。出でざるも其官位相當の待遇を賜はる者にして一代學界の山斗なり。抑も李退溪に朧まりて宋尤菴・尹白湖皆是れ山林なり。降りて大院

君時代の李恒老、近~~年~~（年）の崔益鉉・郭鍾錫亦山林と稱すへし。所傳によれば、老論の始祖宋尤菴の遺訓なる者に、老論は必ず國婚を~~繼~~（繼他）黨に渡す勿れ、常に山林を背後に控ふることを忘るへからすと云ふ二條ありと云はる。其の史的眞偽は保すへからさるも、尤菴以後老論~~擅權~~（優越）の歴史は鑿々として此の二條を實現し、王妃は（殆ど）皆老論の出、山林亦殆ど皆老論の學者なり。

## 五 文學の單純、經學の不發達

文學の單純とは、朝鮮は李朝となりて文學は孔子・韓退之・朱子乃至清朝桐城派の主張する所の道文一致、文は載道の器なり、道立たされは器獨り美麗なるも（文と~~し~~）空疎なり。眞の古文は必ず經術に基きて製作せられざるへからず、詩亦然り。性情の醇正を以て原となし（詞を主とせず、意を主とせず）、以て天機を發すへしとなす。故に爾他種々所謂純文學なる者は、賤視輕蔑せられて其の發達を見ずして止めり。是は、實に國初以來現在に至る朝鮮學人を一貫する文學論にして、今の詩文壇の領袖鄭萬朝の如き、亦此を信して疑はず。故に茂亭は、朝鮮文章を代表する第一人者は誰そと言へば、彼の崔簡易・張谿谷・李月沙・申象村・李澤堂・朴燕巖等を擧げずして退溪を擧ぐ。されば是國の文學に於て稗史・小説・戯曲等興ることを望むるは、恰も海に入りて林を求むるか如し。

既に朱子學に於て學人の知信を定め、只た如何にして個人的には之を修養（踐履の實際）に移し、~~社會~~國家社會的には之を政法習俗に現して以て教化の實を擧げんか~~は~~と云ふ點に向て思を凝らし工夫を積み、從て支那思想の歴史的研究の必要を認めず、此方面に極めて空疎なる朝鮮の儒學に向て經學の發達を望むを得ざるは亦當然なり。されば清朝の進歩せりと稱せらるゝ攷證的經義は、是國の儒學に向ては殆ど影響を與

へす。依然朱子の經註を金科玉條、一字渝ゆへからず一語叛くへからさる者とし、之を奉せり。例へは、彼の近來南人出色の官界の成功者にして又當代の碩學たる星州の凝窩李源祚か、純祖・憲宗頃攷證學の派の學問を輸入し其詩文書乃至生活まで清朝學者の其に酷擬せる阮堂金正喜か濟州大靜謫裡に（『書經』の）「偽古文十六言説」を著して送示せるに對して「偽古十六言辨」上下〔凝窩先生文集卷十六〕を作りて之に酬い、其の全く無用の業たるを攻撃し、中に曰く「攷校名目、前所未有。特以近日清儒之專事攷證、較同於白虎、發幽微隱於丹鉛。其源出於漢儒之（專）門。故〔⇒設〕不得不以攷校爲學名、以明其非朱非陸。……凌駕前輩、別立門戶、功力倍之、氣勢張焉。合經術文章而爲一、誠難矣。然終於本根上欠却平穩工夫、騁雄辯而誇獨見。翻掀噉嚙、使人不敢開啄。即此氣像、已非儒家法門。雖說得寶花亂墜、非知道者所願聞也。未知辨僞書之功、果可以能補世教而明儒化耶。」是の如きは朝鮮學者の公議輿論と視るべきなり。

56

## 第五章 三教調和論 附東學

此に三教調和論と謂ふと雖、主とする所は儒・佛二教調和論に在り。何となれば、前述の如く朝鮮に在りては道教は宗教としても學問としても微々として到底他二教と並論するに及はされはなり。又道教を奉する所の道士乃至道家者流なきか故に道教側よりして三教調和の論出づる（事）も（~~固~~）なし。

吾家の垣根に紅白薔薇を交植して生垣となせるに、歳を経るに従て、何時~~ト~~なく相互に影響し、白は往々紅の斑點を帯ひ、紅は往々色薄らき、中には完全に紅と白と調和して桃色花を咲出せるもありき。思想の對立若くは鼎立の場合、亦之と同様の思想的現象を呈す。相競争し相排撃

し乍ら何時~~ト~~なく相互に影響し彼我の長所を取り合ひ、又時として相違中の共通點を見出して調和合一的思想を發生す。是亦人性（永く）相反相争に止まる能はず、盛に相反對し相争論しつゝある間に、既に相和し相合せんとする意識働き始め、其熟するを待ちつゝあるを證するなり。朝鮮に於て彼の如く儒教（か）佛教を抑壓排撃を重ねつゝある數百年經過の中、調和論亦比較的佛徒側より唱へらるゝは趣味あると謂はざるへからず。

支那に於ける三教調和論の歴史は、其の經過年數悠久にして其の思想亦多様なり、今精説するの違なし。後漢永平年、佛教支那に入りて此に三教鼎立を見。三國時代、既に吳の康僧會は孫皓の問に答へし所に儒佛二教調和論の黎明（的思想）見る。次て魏晉六朝に至りて明瞭となり、隋唐宋明歴代（佛・儒の）巨匠に由りて唱へられざるはなし。此に三教若くは二教調和論と云ふ其内容に二様あり。其一は、道教を老莊哲學と觀て三教は其の教義の表現に於て各殊なるも、其根本原理の一元に~~に~~至りては相一致して始より相乖馳する所なし。藝（故）に三教は其の立教の精神に徹して達觀すれば、決して相排撃する必要なし。寧ろ手を携へて調和し各其の長所を發揮して以て人類の爲に教化を布くへしとなす也。例へは傳大士〔497~569〕、梁武帝に謁するや、儒冠道履して袈娑を披す。帝問て曰く儒かと。大士其衣を指す。帝問て曰く佛かと。大士其履を指す。又張融〔444~497〕は臨終に遺言して、左手に『孝經』『老子』を取らしめ、右手に『法華經』を取らしむ。其の著書『通源』に於て周顒と問答して、道の本體三教共に一極に投ず、異なる所は其迹のみと謂へり。此意味の調和論は、唐の華嚴宗の學匠宗密圭峰に至りて大に發達し、彼は學~~三~~三教を極めて儒の易理を以て佛道と罣碍なしとなし。乾は即涅槃にして、乾の四徳元亨利貞は、涅槃の四徳常樂~~樂~~我淨な



り。乾は一氣を體となし、固より道教（老子の）沖氣と一致して而して佛に在りては一心を體となす。一心と一氣と其實異なるなしと斷す〔圓覺經畧鈔卷一〕。圭峰の此調和論は後世（後宋・明に亘りて佛教界繼承者多きのみならず、又）大に宋儒に影響を與へ、朱子か華嚴に（◎上面赤字：◎更に日本北條氏時代（より南北朝にかけて）禪宗及朱子學の傳來と共に盛に僧と儒とに由りて唱へられたり。〔忽滑谷快天氏『禪學思想史』／足利衍述氏『鎌倉室町時代の儒教』／『支那儒佛道三教史論』久保田量遠／參考〕たり。第二は）三教を（各）其の教學の一元に立ちて調和を試むるは哲學的調和説に對して、三教の（相殊なる）迹を検して其の目的の相乖せざるを認め、三教其一を缺けは社會教化全きを得ず。社會教化の事業は鼎にして三教は其の三足なり。故に相領域を定めて（共存共榮的に）提携すべく、決して相争ふべきに非すとせず、三教（宗教の社會的）機能より三教調和論あり。其の尤明白割切なるを宋孝宗<sup>57</sup>の「原道論」〔佛祖歷代通載第二十〕となす。帝は、宋代（群）儒の斥佛論、旺勃と汚天下を風靡せる後に生れ、三教の教迹に熟鑑して相排し相争ふは、衡平に非ず。反りて天下の人心を分裂せしむるのみとなし、（以爲く）三教の道と立する所、佛の不殺・不淫・不盜・不飲酒・不妄語〔五戒〕は、儒の仁禮義智信に當り、老子の寶とする所の慈・儉・【第五冊→第六冊】不敢爲天下先と云ふも、亦之と別意なし。唯夫れ佛を以て心を修め、老を以て身を治め、儒を以て世を治むれば、斯に可なりと。明代

~~第二の三教調和論の内容は道教を現世利益を擧ぐる功利的鬼神教と見て佛教と相互に人氣ある信佛を我教の祭祀祈禱對象列に取入れ甚しきは儒教の忠臣義士をも攝取して斯に鬼神佛菩薩を以て一體となし、互に他に對して教勢を張らんとするなり。例へば佛教に於ても道教の鬼神なる~~

（此亦調和論中に加ふべきも今此の調和論は之を省く。）

三國・新羅及高麗時代の三教調和論に就ては前章既に之を述へたり。即高句麗は夙に初唐の影響を受けて（現世利益を重する）鬼神教的道教盛に行れ、其の末季の執權（蓋蘇文）は三教共行を以て國（家）教化の圓具となし、其一を廢すへからずとなし。新羅に在りては儒教初に入り佛教次て行はれ、道教亦老莊思想亦士流に迎へらる。慶州（甘山寺彌勒△上面赤字：△菩薩造像記、及甘山寺阿彌陀如來造像記〔聖徳王十八年、十九年／本府博物館藏〕）碑文に在るか如く、士官に仕へて職を執る間は専ら儒の教を則となし、曉（佛に）皈依して未來を頼み、晩年退居するに至りては専ら道家の書に親みて遺世高踏の生活に入る。三教共に廢せず、三教共に行はれて群生を教化せること、崔致遠「鸞郎碑序」の如し。而して當時君臣上下、佛教を以て最上教となし、深甚微妙の道理を説けりとなせり。高麗亦新羅に承けて三教の相争ふべき者に非すとせず、儒は淺近を説き、佛は至極を説くとせず。

（△上面赤字：△（國初）成宗元年上れる崔承老萬言疏〔＝上時務書：東文選〕は明白に佛弊を述へて同時に儒・佛二教各關する所別なりとす。

「臣聞、人之禍福貴賤、皆稟於有生之初、當順受之。況崇佛教者只種來生因果、鮮有益於見報。理國之要、恐不在此。且二教各有所業、而行之者、不可混而一之也。行釋教者、修身之本、行儒教者、理國之源。修身是來生之資、理國乃今日之務。今日至近、來生至遠、舍近求遠、不亦謬乎。」

（國末）李牧隱の（恭愍王への）上疏亦畧同様の意を述ふ。）

今傳はる羅・麗の文獻、洵に寥々たりと雖、三教・二教調和説は大抵儒士の側よりして唱出されしか如く、佛徒の此に關す説は甚少し。（文宗王子）大覺國師の如きは尤明白に儒教は僅に

人乗を説き、道家は天乗而シ佛家は菩薩乗を説けりと公言す。

李朝に至りて佛・道共に衰微に陥り、到底儒と並驅の力なきは前述の如し。然れども三教調和論は支那に在りて既に千年以前に合理的成立の基礎を立てし所の學説にして、朝鮮にも前朝既に儒士側より之を唱ふるあり。されは今李朝となりても、其の必要を感ずる者より之を唱へらるゝは當然なり。而シテ其は主として儒佛二教調和を主として論せらる。前述支那に於ける三教調和論の出現を検するに大體に於て儒士側に數少く〔(王通・)白樂天・張無盡(商英[護法論の著者])、楊龜山・劉謐[三教中心論] △上面: △明林兆恩・楊慎・袁宏道等〕、之に對して佛徒側甚多し。而して是等佛徒の調和論は、儒徒の斥佛論現れて一世を衝動せる後に現る、自家防禦の爲に製せられし者多し。例へば、唐に韓退之、出てゝ椽大の筆を奮て光炎萬丈に斥佛を唱ふるや、少しく晩れて華嚴の圭峰宗密、出てゝ三教調和論を唱ふ。宋代に於て歐陽脩、韓退之の説を承けて本論を作りて大に斥佛の氣炎を揚ぐるや、次で畧は同時代に鐔津契嵩「輔教篇」等を著して三教調和論を唱ふ。明の世宗、歴代崇佛の方針を覆して廢佛を強行し、嘉靖九年には文華殿東室の釋迦像を撤去し、同十五年には禁中に於ける佛殿を除き、代ふるに道觀を以てし、佛龕(燈)一時幽にして佛徒足を裹〔み〕、以て(次帝)穆宗に至れり。隆慶六年、道教の流布を禁止するに至りて佛教復た蘇す。此の後に當りて株宏・徳清・藕益の如き僧徒出てゝ大に三教調和論を唱へたり。即三教調和論は、三教鼎立の思想界に在りて當然生ずべき思想なるも、之を特に高調して之に大なる關心と努力とを拂ふは、教勢受身におかれたる教の側よりすること、(支那三教)歴史の明示する所あり。朝鮮亦是の如し。新羅・高麗に在りては儒士之を唱へしか、李朝となりては儒士は専ら勢に乗して佛を倒了~~せ~~せんとす

る攻撃的地位に在り、毫も三教・二教調和を唱ふる要なし。之を唱ふる必要ある者は、此に由りて儒士排撃の鋒を緩め、我か教法的位地を引擧げんとする佛徒の側なれさるへかす。されは、李朝佛徒の知慧あり識見ある者は、前後概ね此説を抱懷し、機會ある毎に之を儒士に向て説述せり。(△上面赤字: △而シテ其の朱子學に歸一せる社會に於て主唱せられしに由り(儒者に向ての議論なるか故に)主とシテ調和説の第一類に屬し、佛・儒の二教其の根本の道體の體用の眞義に徹見すれば何等相違なし。儒の佛を排斥するは、畢竟佛理を解せさるか爲なりと云ふを宗旨となす。)

今日傳はる李朝佛徒の文獻中、是論の載せらるゝ者、涵虛・普雨・休靜・(應祥)・霜月・仁岳、~~桃暎~~・蓮潭・默菴・無竟・白谷等諸師あり。今其の極めて概畧を列擧す。

## 一 涵虛

名は己和、號は得通、居る室を涵虛堂と曰ふ。忠州の劉氏。洪武九年生れ、弱冠にして成均館に入り名聲あり。廿一歳一日同窓の友の死に逢ひ、世間の無常を感じ出家の念を起し、冠岳山義湘庵に入りて削髮し、檜巖寺に王師無學に參ず。修行成りて世宗の皈依を得、辛丑秋命シ開城大慈庵に住せしむ。甲辰年之を辭し、諸方に雲遊す。世宗十五年慶南曦陽山鳳巖寺に於て示寂す。師、弟子に富み又著述に豊なり。『語録』の外、『圓覺疏』三卷、『金剛經五家說誼』二卷、『顯正論』一卷、『(儒釋) 質疑論』二卷(外に『般若懺文』『綸貫』(各) 一卷ありと云ふ。此内、後二種は未だ看るに及はず。三教論は『顯正論』及『質疑論』に於て之を述ふ。

『顯正論』に於ては、性情二字を以て大乘教理を圓説して朱子學の性理説と符節を合するを證し、更に進みて儒の五常と佛の五戒(上面赤字: 不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒食肉)とは同

實異名なるのみならず、儒の政治の極致は、徳治に在りて刑治に在らざるか故に（民の）善惡の賞罰に止るより、之に教ふるに因果の（道）理を以てすれば、更に一層心服するに至らしめて、徳化政治の實現、容易にして速なり。故に佛教行はるゝ國家に在りては儒教の政治（の理想）其の實現を見ること、儒教のみの國家に比して可能性より大なり、佛教は儒道を輔くと。

『質疑論』に於ては、問答體を以て佛教々理を説明し、往々三教の比較に論及し、三教共に心に基くと雖、佛（尤）深くして直に性を説き、道之に次て専ら氣を説き、儒に至りては形而下なる個人的心を説く。故に佛は眞に契し、儒は迹を攻め、道は兩面に跨る。國民家の民を治むる、宜し~~く~~須らく三教合せ、之を行ふへし。結論と云く

「儒而排老者、賞花而不知有樹也。老而排佛者、養樹而不知有根也。可謂智乎。」

彼か學、三教に亘りて又其の自持する所高く一步をも世儒に譲さんとせざる、氣魄の（磊）犖、爾後の李朝僧等と匹儔を異にするを見るへし。涵虛を以て李朝三教調和論の先驅となす。

## 二 普雨

普雨に就ては前章少しく之を述へたり。其の姓貫を詳にせず。彼は禪宗判事都大禪師となり、號を虛應堂、一に又懶菴と號す。彼は辮舌に長し又詩文を善くし、儒・佛に淹貫す。其著に虛應堂集外『虛應集詩』一卷、『禪偈雜著』一卷、『文』一卷ありと云ふ。今の予の看るに及へるは『懶菴雜著』一卷及「水月道場作觀文」一篇のみなり。『雜著』中に「敬菴銘并序」及「薦母印經跋」の二文ありて、程朱氏の性理・氣質説と佛教の性情・無明覺の教とは其理少しも殊ならず、何れも人々本具の靈性が氣質と欲望の爲に昏まされざるを覺破して以て眞實修業して（以て）性に復るを言ふに外ならず。「薦母印經

跋」に曰く

「人之有此性、如鏡之有明性。其四端五典、萬物萬事之理、無所不周。只緣氣昏欲熾、昧沒其性、而未能行職分之所當爲、則其違禽獸不遠。於是、大覺慈尊、開大悲門、隨衆生機、說種々經、若世醫之應病説藥、而使天下之人、自然知性之徳而能忠孝其君父。」

果汙然らば、佛説・儒説何等相差ふことあらざるなり。儒の排佛の如きは（只た）己を知りて彼を知らざるの固陋に坐するのみなり。蓋し普雨の炯眼達識なる、世代漸く降りて儒學益々盛なるに従て斥佛の説愈々鴟張すへければ、豫め之に備ふる爲に宋儒の哲學を研究して其の佛學と一源融會無罣なるを窮め、之を（説）演して以て儒者に對して自衛防禦の策を取りしなり。

## 三 休靜

休靜は即西山大師に云宣祖壬辰役の義僧の總大將、又李朝佛教中興の祖師なり。芙蓉靈觀に參し、禪教兩宗學に通し、明宗朝第一回僧科に及第し、禪教宗判事に拜せらる。完山の崔氏。十五歳進士の試に應し第せず、智異山に遊び、崇仁長老に逢ひて心を心空及第に回すへしと垂示せられ、遂に心を桑門に傾け、芙蓉會下に參す。道成りて聲譽、南北に遍く宣祖の知を得。壬辰役、宣祖義州に蒙塵するや、偶然彼を憶起し召して勤王を勵ます。彼慨然と云命に應ず。全道に檄して義僧軍を起し、到處功あり。其の門下亦多く義勇の僧將を出す。（萬曆二十年）功を以て正二品正卿に拜す。宣祖の卅七年、妙香山圓寂菴に寂す。享年八十五。全南大興寺の表忠祠、妙香山に酬忠祠ありて彼を祀享す。西山大師と云ふは、彼か生涯中尤長く妙香山に住せるか爲なり。彼の門流尤振ひ、繩々と云絶えず、今日猶大部分の朝鮮緇流は、彼の門派に屬す。彼學遂く能文著述に富む。『清虛集』四卷の外、『禪家龜鑑』『儒家龜鑑』『道家龜鑑』及『雲水壇』

各單行す。『禪家龜鑑』は其の傑作にして李朝佛教の禪主教從の一宗旨たる判教的根據を與へし者なり。休靜は『禪家龜鑑』の劈頭に六祖の語に則りて

「有一物於此、從本以來、昭々靈々、不曾生不曾滅、名不得狀不得。」

と喝破して（佛家の一元）唯心を明かにす。而して『儒家龜鑑』の冒頭に亦周子『太極圖說』の太極而無極、『古文書經』堯舜禹相傳の心法等を擧げて畢竟、儒の道亦一心の妙を明むるに外ならずと道破し、又『道家龜鑑』の開卷第一に老子の語を引き「有物渾成、先天地生云々」亦是れ一心の説明なりとし、此に三教共に其の教義の極源に溯すれば、一心を明にして居常人々本心に從て云爲行動するに歸すと斷し、三教の一致を高調す。

#### （四 松月應祥）

休靜の上足惟政の弟子にして、休靜にも參せる松月應祥、亦三教一致の論をなせると思はるゝは、栗谷の高弟鄭曄の『守夢集』卷三金剛山楡岾寺の項に

「夕食、上明寂菴々僧名應祥者、受業於休靜師、頗解經文意、言釋氏後傳法甚詳。與之論心性、有令人警發處。」〔金剛錄〕

と云ふに據りて知るへし。應祥、姓方氏。法を惟政泗溟に紹き、金剛山に在りて化を演ふること三十餘年。仁祖（二年）甲子朝廷、沙門に命て沔南漢山城を築かしむるや、彼を召して工を監せしめ、前（後兩）度八道都摠攝に除す。固辭して受けず。朝廷特に妙湛妙湛國一都大禪師の法號を賜ふ。仁祖二十三示寂す。享年七十四。

#### （五 霜月璽筠）

休靜の弟子鞭羊彦機の四世の法孫に霜月璽寰（筠）あり。姓は孫氏、字は混迷、順天の人。肅宗十三年生れ、雪巖和尚に師事し（法を得）、

廿七歳仙巖寺に於て講席を開く。盛となること近世罕なりと稱す。英宗卅年の（華嚴）講席には參者實に千二百餘人と傳ふ。英宗四十四年寂す。享年八十一。『霜月集』あり。儒氏と釋氏との學說其の名辭、相一致せざるも、其の意義は則相同しとなし

「儒家所稱未發氣象<sup>58</sup>、即吾佛家如々<sup>59</sup>理也。其所謂太極、即吾佛家一物也。其所謂理一分殊、即吾佛家一心萬法也。由是而引證上下、何嘗有儒釋之別耶。」

と。確に所見あり。李朝儒家にして是の如く明白的確に宋學と佛學との概念的の一致を闡明せる者あらず。霜月は、若し思想言論自由の世に生れしめは、朝鮮思想史に一（大）光彩を放つ佛佛調和論者たりし者なり。

#### 六 蓮潭有一

蓮潭有一、亦鞭羊派の巨匠なり。字は無二、開城の千氏、肅宗四十六年生る。幼に沔孤となり、十八歳削髮し、虎巖・霜月等に參し法を得。三十歳以後六十歳迄、東西南北の叢林に建幢して禪教を講す。英宗十四年逝く。壽八十。所著『蓮潭林下録』の外、『華嚴遺忘記』四十卷、『圓覺般若起信楞嚴の畫蛇』十餘卷、『圭峰禪源』都序節要釋要』二卷あり、皆（之を『蓮潭私記』と云ふ。今尚 朝鮮僧侶の講本となる。今華嚴宗學を講する、『仁嶽私記』に據るに非れば、『蓮潭私記』に據る。蓮潭又外典に精通し、朱子の學說に於て所見あり。其の「上<sub>二</sub>韓綾州<sub>一</sub>必壽<sub>二</sub>長<sub>一</sub>書」〔林下録卷四〕に滔々萬言を費して釋氏の説く所の理の道學者の説と相背馳せざるを説演す。初に、佛法は宏大無邊の法門なるか故に古來支那の學人之を信する者甚多く、例へば白樂天・房琯・蘇東坡・歐陽脩・司馬光・黄山谷・周濂溪等あり。又朱子其人さへ必しも一向に佛法を排斥せず、反りて私に其の教理に遊ひて以て修養の一助となせり。されは、朱子晩年「〔久雨〕

齋居誦經」の詩あり。曰く

「~~獨~~（閑）居獨無事、聊披釋氏書。暫息塵累牽、超然與道俱。門掩竹林密、禽鳴山雨餘。了此無爲法、身心政晏如。」

又朱子は一方には「佛彌近理而大亂眞」と云ひ、他方には「佛法如錦玉、儒如布粟」の語ありて能く佛法の長所を認識するに吝ならず。支那の大儒は、朝鮮の儒者の如く、佛法を以て一向に世道人心に有害なりとは倣さざるなり。師、更に（論）歩を進めて佛理の深遠なるを述べて曰く、儒者の所説理氣説に個々氣稟の清濁は何に因りて起るか。單に命に由るとなさんか。是れ、頗る淺薄なり。必ず前習の因縁を肯定して然後説明て完し。

「人之知愚善惡、皆由前習之因縁、而儒氏所論、皆天命之自然也。天命何其不均。」

又佛門に、人臨終に彌陀を十念すれば、縱令十惡の人と雖、能く往生を得と云ふ。然らば則、人平生耳目の欲を窮めて諸不善行をなし、唯た死時に於て十念すれば則救はる、猾者は何ぞ。平生の善行を思はんやと。師、之に對し、逆に儒者の説を擧げて説明し、是れ『書經』に「惟狂克念作聖」<sup>61</sup>の義に外ならず、平生惡を作して其の非を知らず、其臨終に頓に前非を覺り、眞性獨露す。比へば、千年暗室一夜明證を懸くるか如く善惡了然たり。儒・釋の説、何ぞ相異ならんと。

## 七 無竟子秀

休靜の弟子靜觀第三世に無竟子秀あり。姓は洪氏、~~字~~顯宗五年生る。十二歳出家祝髮し、秋溪長老に師事し、其法を得。肅宗朝八道の高僧を選抜して大法會を舍那寺に設くるや、師亦之に與る。英宗十三年寂す。壽七十四。『無竟集』五卷あり。其の禪を説き教を説くや、縱横快潤、天馬奔空の概あり。近世禪人、著什罕觀に屬す。卷二に「性情説」と「三教説」とあり。（曰く）

理は一元にして古今人物を通して不増不減不垢不淨なり。而汚此一元の理を明ける者即~~三教~~三教なり。三教は相須つへく相排すへきに非ず。故に三教を以て天の三光に比す。

「蓋以其跡而觀之、儒教崇仁義、老教崇自然、釋教崇寂滅。雖其所崇不同、所習各異也、猶（彼）三光之隱現不同而照耀各異也、以其理而觀之、猶彼三光之同出於一天、不有天外別有三光。則三教同出於一理、豈有理外、別有三教哉。」固より支那の三教調和論より來れりと雖、其の理は則取るへきあり。

## 八 默菴最叡

默菴は碧巖門派の第~~七~~（六）世なり。碧巖は浮休の嗣、浮休は西山の<sup>おとうと</sup>弟弟子、亦芙蓉の上足なり。西山流と朝鮮僧界を二分す。就中碧巖門派、最盛なり。字は耳食、密陽の朴氏、肅宗四十四年生る。十四歳出家祝髮す。時の大匠に歴參し、終に影海禪師の許に至りて透す。二十七歳より開堂して衆に接す。正宗十四年寂す。壽七十三。『默菴集』の外、『華嚴科圖』『諸教問答』『盤錯會要』各一卷あり。彼、内外兩典に博渉し、氣魄亦豪邁。世の俗僧か儒士に對して自ら卑下するの陋態なく、機會ある毎に堂々として儒・釋二教（其の一原に於て）一致不二なるを説く。畢竟俗儒か猥らに排佛を論~~汚~~得々たるは、儒の一方のみを知りて釋を識らざるに坐す。若し彼等にして彼自身の如き明經僧に依りて佛道を研鑽して其の奥旨を明めなは、必ず自ら態度を改むへき者と信せり。中卷「答任進士」に「孟子之備我、可以廓萬法唯心之旨也。將顔子之高堅、可以博水火不焚漂之堅固一著子也。以曾子之唯一貫、可以證迦葉之笑也。離四句<sup>62</sup>絶百非、亦何外於無聲臭之消息也。悲智願之三心、正符合於大學三綱也<sup>63</sup>。」集に「和宋三大賢詩」あり。三大賢とは陸象山~~九淵~~（兄弟）及朱子なり。

「英邁高風幾往欽、分明詩句玩若心。須知佛學連儒旨、更信南山（接）北嶺。七點星辰頻往復、雙輪日月互昇沈。試觀體用俱全地、無古今時有古今。」

## 九 白谷處能

白谷處能（字は慎守）、亦碧巖の嗣なり。姓は金氏、光海九年丁巳生る。十二歳出家祝髮し、東淮申翊聖に從て外典を學ぶ。詩文尤清健、縉紳間に知らる。既に沔智異山雙溪寺に入りて碧巖に參すること二十年、遂に其法を傳ふ。後南漢都摠攝たるもの二度、未久して辭し、南方の名山に法席を開き、大講師の名を縦にす。肅宗六年庚申、金溝金山寺に於て大法會を設けし、七月其丈室に示寂す。壽六十四。一代の詩人東溟鄭斗卿挽詩を作りて曰く

~~往哭東陽尉、今逢白谷師~~

今『白谷集』一冊を傳ふ。其詩文共に李朝僧人中の翹楚となすへし。中に「諫廢釋教疏」一篇あり。顯宗四年、京城内の尼僧を城外に逐出し、先后の内願堂慈壽・仁壽の兩尼院を廢し、又大凡寺刹所屬の土田奴婢を沒收し、僧尼共に嚴重に沙汰還俗せしむ。是に於て彼全國僧侶の總代として本疏を上る。滔々實に八萬言、所有李朝の疏文中、尤博大長辨を極む。中に（△上面：△劉元城・李屏山二氏の説を引きて）支那三教調和論者説を引きて、三教出現の時代同しからさるも、殊途同歸、決して相悖らずと痛論す。

「劉元城曰、孔子佛之言相爲終始。李屏山曰、三聖人者同出於周、如日月星辰之合於扶桑之上、江河淮漢之滙於尾閭之涯。迹此觀之、中庸所謂道并行而不相悖、繫辭所謂殊途而同歸者、可謂聖之不殊。」

其他、正宗十年に生れて哲宗二十年に寂せる、鞭羊の法系、華潭敬和の『三峰集』にも「論三教同異偶吟」ありて「先聖三教分、其本一元眞」と言ひて、三教本原一理共通なるを詠發す。

斯の如く李朝僧侶は、既に世宗朝より三教調和論を盛に唱道して以て國季に及へり。然るに獨り僧侶のみならず、士流讀書子中にも往々表面官學に歸一しつゝ裏面私かに異學を成す者あり。されは、宣祖朝既に科擧文に老莊の語句を使用するを禁し、又顯宗朝には科文に佛語を交ふるを禁す。然るに思想の自由は、人間自然の要求なるか故に、學者・讀書子・文章家の中には單一なる朱子の道學に満足せず、陰に他學を治むる者亦生ず。殊に宣祖の壬辰役の大亂、次て光海君の亂政、次て仁祖朝丙子役と相續て亂世となり、萬代不易と信せし宗主國大明さへ胡人の爲に滅亡するや、他方一般的生活困難、激烈なる官場の爭鬥及多數の犠牲者等の人生悲劇の繼續と相須ちて益々彼等を驅りて安心の地を老・佛に求めしむる傾向、著明となる。されは、當時文章家に沔老・佛を悦はさる者殆となく、就中李芝峰・張谿谷・申象村（申東涯）、下りて朴世堂（西溪）・朴世采玄石等は其の著名なる者なり。從て彼等は内心、老・佛を排斥し、之を朝鮮の思想圏外に放逐せざるへからずとは攻へず、反りて頗る調和論に接近す。殊に世級降りて英・正祖以後、老論久しく政道（治）の要路に立ち、少論・南人は權勢に離るゝや、少論派の學人は鄭齊斗を祖と沔多く陰に陽明學を治め、南人中には（隠れて）天主學を信する者あるに至れり。是れ、李朝思想史の大變なり。是頃に至り俄然、諺文小説の多く作られしを見る。此は明末清初小説輸入の影響なるも、又他面には當時の思想家等か匿名を以て其の人生觀を書き表して以て之を社會大衆即婦女子乃至市井の庶民に問ひし者なり。從て其中には或は大衆の思想に迎合せるもあり、或は自己の理想を以て大衆を動かさんとするもあり。是等小説は、恐らく漢文以て書かれし詩文に比して其の（よりよく）民衆の心を捉ひて之を感動せしめし事は、

彼の一人之を朗讀して多人數之を取圍みて熱心に聴く、朝鮮庶民の實際狀態に照して疑ふへからず。而して是等諺文小説の内、佛の功德を書做せる者、英雄神仙の不思議力を（材料として）使へる者極めて多し。玉皇上帝出て、觀音菩薩現れ、仙人働き、高僧活動す。此に由りて修身齊家治國平天下の儒教の外に不可思議力ある神佛の（神秘的）作用を認めて其の（ありて皆）因果の理法の實現に向て超神祕的作用を揮霍することを説く者にして、決して佛・道を排斥する者に非ず。三教調和論を實理論を通さず、實感的に讀者に銘鏤せしむるなり。例へば『沈青傳』は玉皇上帝と佛の功德を主たる筋となし、『九雲夢』は三教共に人生の尊き教法に於て其内佛教第一なるを説き表し、『謝氏南征記』には白衣觀音の妙智力を詠歎し、其他『洪將軍傳』『蘇大成傳』『金鈴傳』『江陵秋月（玉簫傳）』『朴氏傳』等には必ず仙人・鬼神登場す。されば朝廷の制令は佛教・道教を廢錮（○上面：○（し）、士君子は（表向單一）儒教信徒として文廟の祭祀、家庭の追遠慎終の禮儀に熟誠を籠めつゝありと）せりと雖、民庶の思想には猶依然とて二教は消滅せず、寧ろ（其教法）儒教に比して神祕性に富み（て彼の）平實以上の（神）恠秘密的對象を其宗教的生活に於て要求する民庶の要求（希望）に適應する者として存在す。是（處）に、彼等は猶三教を調和して三教の粹を取りたる所の何かの思想あらは、此こそ（人間）世間に於ける最完全無上の思想なりとなす無意識的信念を懷抱しつゝありと解釋するを得へし。此の朝鮮民衆の一般的信念を思想的地盤として發生し發達し、忽にして大勢力を構成するに至れる（朝鮮獨得の）宗教に東學あり。

### 〔東學〕

東學は、一八二四年〔純祖廿四年〕慶州に生れて四十歳〔哲宗十四年〕大邱に刑死せる崔福述（◎

上面：◎號は水雲齋と言ふと云ふ）の開教せる所なり。教徒、彼を濟愚と呼ぶ。（少くも）政府の認めし彼の名は福述なり〔李太王日省録〕。彼、三十五歳に至り、突然天命を受けたりと稱して、當時燎原の勢を以て嶺南地方に迄蔓延しつゝある（邪教西學）耶蘇教を防止するを標榜して新教を開立し、西學に對して東洋教學の粹を説く意味を以て自ら東學と稱す。朝鮮の用字法、教と學との概念上の區別なし。

朝鮮に於ける耶蘇教史に關しては、早く朝鮮天主教會編纂の佛文二冊の大著あり、後十九廿四年、之を節畧して英譯し、朝鮮に於ける天主教と題して香港に於て出版せり。猶米人の著『雜林八道物語』（上面：Story of Korea [Longford, Joseph H. 1911]）中にも朝鮮耶蘇教史の大體を附載す。先年李能和氏の大著『朝鮮基督史及外交史』出版され、本（昨）年〔昭和七年〕又『關異編』二冊出版さる。今日は畧其の詳細を知るを得へし。實に朝鮮に耶蘇教の布教の成功は、一個奇跡的事實と視做さる能はず。其の理由は〔一〕に朝鮮の嚴重なる瑣國主義なりしこと、〔二〕に朝鮮は儒國（教）立國に於て儒教以外の宗教は悉く異教とて其宣布を禁せること、〔三〕に朝鮮は漢人種以外の凡ての民族は之を胡夷と視て至極輕蔑を拂ふ。況んや紅毛駄舌の西鬼の宣布する教法なるをや。〔四〕に朝鮮社會は追遠祭の祭祀の禮を最重し、何物も之か爲には惜まざるに、耶蘇教は之を否定し不必要となす故に、耶蘇教を奉ずれば不孝の子となり、先祖をして皆不祀鬼たらしむ。如是四個の重大困難あるに拘らず、本教は既に正祖朝よりは漸く在支宣教師等の冒險的侵入に由る秘密布教に由りて信徒を此土に作出し、憲宗に至りては宣教師相踵きて殉教の碧血を此土に濺き、非常の迫害を蒙るに拘らず、哲宗十年には信徒數、既に一萬六千七百人に達し、其後六年大院君の根絶的大迫害迄は其數加速的に増加せり。

是の如き耶蘇教の蔓延は、畢竟李朝に於ける教政の缺欲に原因し、儒教一點張にて佛・道二教其の布教を禁せるか爲、一般民衆は常住宗教意識の満足<sup>の</sup>の途を杜絶せられたるに、今は彼の唯一の天帝を信すれば、死後最後の捌<sup>さばき</sup>に由り天國に往生すと説く、法味濃厚なる耶蘇教の將來に逢ひ、翕然と一切の法禁及社會慣習の統制力に打克ちて之に歸依せる也。而して耶蘇教か god を神と譯せず、支那流に天主と譯せるは、玉皇上帝を信する朝鮮の庶民には受容し易く、又(佛教法門中)念佛淨土の一門尤(廣く)民信を博する當時なれば、(死後)天堂往生の説は信受すること容易なり〔蔡樊巖の解釋參考〕。

崔福述は此に於て立てり。彼は元來、學問素養乏しき村民なるか故に、其の言ふ所も其の書く所も粗笨汎意的にして正確なる意義を成さず。今東學の經典なる者は、彼の作を輯むと傳ふる『東經大典』と、宋秉峻の侍天教か苦心して收拾して之に註解を施せる、教祖と二祖海月の遺文集と視るべき『天經正義』及『龍潭歌』の外なく、教祖の傳記は東學の後身天道教會・侍天教會の編纂に係る諸書に出つ。彼か其教を東學と稱するは、西學に對して東洋教學の精粹を以て打立てたる教學宗教の意義なり。(今更に)詳に其教法の源流を述ふ。

彼、卅二歳の時(貧の爲に)慶州より蔚山附近に移居し、晴耕雨讀の際、金剛山楡岾寺より來れる一僧侶を宿せしめ、一奇書を授けらる。之を精讀黙解して其深義を了し、此に豁然として自得する所ありて其の教法の根本立つに至る。是時僧侶の與へし書は、専ら儒・佛・道三教調和の説にして、彼は以て古今未嘗聞の深奥卓絶の教理を述へし者となす。此に至りて東學と前述李朝僧侶の師々相承けて説來りし三教調和論との間、關係を生ずるに至り。東學は、彼等僧侶に由り又彼等諺文小説家に由り、幾百年に亘り説き傳へされ、朝鮮一般民庶の間に最全最高思

想の形式として認められし所の三教調和説を、其教の成立し宣教せらるべき思想的地盤となして、此に勇ましく開教せられしと視るへし。三教調和論の東學教義に於ける現れは、第一に(は)天道の觀念となりて(にして)あらゆる東洋教學の根本は宇宙の大眞理なる天道の一元に皈し、其の表るゝや、天竺にては佛教となり、支那にては儒教となり道教となると云ふ(なす)。第二に、三教の長を採る思想となりて、佛教よりは捨利禁欲と衆生濟度を採り、儒教よりは人倫を明かにし仁義を行ひ、一身よりして世に違ふを採り、道教よりは虚無を體して榮辱を破除し、養生永生するを採ると云ふ。是に於て東學教徒は儒冠を戴き、念珠を掛け呪を誦し、欲を除きて長生無病を心掛り。但し教祖其人、本と素養低きか故に三教調和説の如きも到底是以上哲學的體系の成立を(教理の成立を)見るに至らずと雖、今其の意を推し測るに、前引南宋孝宗皇帝「原道論」に於て、三教調和の理を知らざる世人の惑を釋きて簡單明瞭に以佛修心、以老治身、以儒治世の三綱を挙げ、之(理)を了すれば、其惑を解くへしと云へる調和論の範圍を出ることなき者なるか如し。僧侶の傳へし説の要、亦恐く此に在りしものなるへし。

是の如く、三教調和合一を倡へて天道の由りて出る所の天主を立てゝ宇宙の唯一の主宰となし、彼自身、天主の代人と稱し、往々奇蹟に類する行爲をもなす(せりと傳ふ)。無智の百姓、翕然として之に信嚮し、優に耶蘇教の蔓延を防きて倏忽にして南鮮一帯に宣布す。忽ち左道亂(惑)民の罪科に當てられ、捉へられて大邱の獄に死す。時に僅に布教第六年なり。而して是時(既に)教徒三千人に達し、第二世海月崔時亨の晩年に至りては既に教徒三南に遍漫し、(李太王の高宗)甲午年古阜の全瑋準、其父か郡守の手に冤死せるを憤りて起つや、所在響應して其數々萬、官軍到處敗北し、教軍既に忠清北道に達し、京師



震駭、遂に百計盡きて袁世凱に討賊出兵を依頼し、之に由りて日清戦争和平破裂し、清軍半島より退却し、日本軍爲に教軍を討滅す。一説には東學黨と大院君とは聯絡あり、全琫準數次雲峴宮に出入せりと云ふ。明治卅一年(左脇：?)海(月)亦捕られ京城に刑死し、爾後東學は四分五裂し、教徒跡を潜む。而して明治卅八年伊藤統監來任し、李朝五百年の教政方針を一變して信教自由を宣するや死灰再燃し、天道教となりて現れ、既にして(◎上面：◎孫秉熙・李容九・金演局等、教經營方針の不一致の爲に)分裂して侍天教を分出し、侍天教中(徒の)野心家宋秉駿の攪亂の爲に侍天教更に金演局派・宋秉駿派の二派對立し(△上面：侍天教の勢愈々微弱となる。<sup>64</sup>)後大正八九年頃、総督府の操縦に由りて天道教、種々の小教會に分裂し、天道教勢亦衰ふ。既に孫秉熙没して(教の組織制度及教主問題に由りて)教中新舊二派に分裂し、同一屋内に在りて對抗し、一昨(々)年一旦和解(昨)年(昭和七年)復た分裂す。恐く將來亦長く同様の分裂復返の道程を繰返すならん。

天道教盛なるや、教徒實に三百萬人と注せらる。今は微々振はさるも、猶恐く東學の教義に由りて(たる)(三教調和合一論)天主等に由りて成立を取る大小の種々教の教徒を合すれば、優に百萬人を超ゆるなるへし。

此に東學か、彼か如く茫漠として、明白なる神學的體系を有せざる幼稚なる教法なるに拘らず、開教後倏忽にして信徒を得ること多數なるに至れる原因に就て私見を述べんとす。其第一は、何と云ふも、前述耶蘇教の場合と同しく、朝鮮民衆の何か宗教を求めつゝある宗教意識の熾烈を挙げさるへからず。東學の天主を立て其の代人を立て呪文を作り、祈禱儀を定めしは、能く民衆の此の要望に副ふを得(たるものなり)。

第二に、朝鮮平民等の間に長き間、壓制階級即

兩班・吏族等に對抗して其の利益を防衛するの必要上相集團して成黨せんとの強き(團結)意識を挙げさるへからず。海月の讖に(豫言に)我教には平民と貧民しか入來らずと云へるか如く(し)。故に若し外國よりの干渉なく、東學教軍、官軍に打克ち、彼等(平民)群衆か自身の團結力を自覺せる場合には、此は當然(△上面赤字：△五百年朱子學の名分論を破りて)(政治)革命社會革命と迄發展すべき性質なりしなり。

第三に、民衆の迷信の力となす。初祖・二祖の奇蹟的行爲を信じ(天主に供へし清水を服せば病を治し)、又呪文「侍天主造化定」を唱ふれば<sup>65</sup>(能く疾)銃身に水涌き教徒の身を傷くる能はずと云ふ如き。皆教徒の信仰を強め(信徒を増し)教勢を張る者なり。

第四に、三教調和、東洋教學の粹を集成すると云ふ標語の人心に投する魅力の四項を擧ぐるを得へし。

されば、耶蘇教の流行も東學の蔓延も、要するに李朝五百年教化政策の総勘定にして(國家社會に於ける)思想の強制的統一の破綻を示す。思想は導くべく、強制すべきに非ず。強制の政策は一時の急を極むも其の(對症的)効力あるも、其の無理か(長年)積集するの結果は強力なる爆發となりて國家社會の根底的破壊となるべきなり。

(×上面：×三教調和論か獨り朝鮮の過現のみならず支那の過現に在りても宗教製造家に由りて信徒を呼集むる最妙なる標語たり。甲子年即民國十三年[一九二四年]北京宣武門内に設けられし救世新教總會の宣布する救世新教なる者は、亦同しく全人類の大同宗教を標榜して儒・佛・道の外、基・回二教を加へて五教の粹を取りて教義を立つと言ふと雖、其實、基・回二教は劣根者の教と判し、佛・儒・道三教を以て人類の有せる最高宗教となし、而して此の中、道教最上位を占むへしとし、本新教は三教其長を取り、

儒教に由りて外修即世を治むるの教を立て、  
仙・佛は由りて内修即己を修むるの教を立つ。  
但し外修功成れば、必ず復た眞境に返りて性徳  
を養ひて超世間的安住を得べく、又内修功成れ  
は、出てゝ庶流を濟度すへしと。『救世新教々義』  
一卷、『救世教給綱新教々綱』一卷とあり。能く  
支那民衆の三教調和合一論に對して有する傳統  
的皈依の心理を證す。)【第六冊終】

### 【附記】

本稿は、(基盤研究(C))高橋亨「京城帝国大学  
講義」の研究(課題番号:16K02200)の成果の  
一部である。

### 注

- <sup>1</sup> 上面に赤字にて「天台の法華玄義／一乘、二乘、三乘／大、中、小／一乘を説かか爲の二、三乘に外ならず。」とある。
- <sup>2</sup> 右脇に赤字にて「持念業、小乘業」とある。
- <sup>3</sup> 上面に赤字にて「高麗大藏經補遺祖堂集に亦見ゆ。」とある。
- <sup>4</sup> 上面に赤字にて「大徳の上に別大徳あり」とある。
- <sup>5</sup> 右脇に赤字にて「正・空／偏・事」とある。
- <sup>6</sup> 次の追加文の右脇に赤字にて「教觀の語、本と天台に出つ。」とある。上面中央に「智慧と體驗の説明」と、赤字にて「行の哲學」とあり、上面中央左に赤字にて「觀とは體驗と行也」とある。
- <sup>7</sup> 右脇に赤字にて「法華文句、法華玄義、魔訶止觀／三大著」とある。いずれ、天台教学の大成者智顛の講義説明したものである。
- <sup>8</sup> 上面に「成道後、四十九年説法を時に分ちて一華嚴、二阿含、三方等、四般若、五法華となす。／又説教の深淺に就て八教を分ち、化法の四教を藏、通、別、圓となし。化儀の四教を頓、漸、秘密、不定となす。」とある。
- <sup>9</sup> 上面に「(妙蓮寺第三世台宗中興)天台無畏國師事蹟によれば、六山(の内五山)は五臺、水巖、槽淵、安樂、瑪瑙に、僊鳳を加ふれば六山となる。但し猶明確なるゝに至らず。」とある。
- <sup>10</sup> 上面に「翼宗釋師」とある。
- <sup>11</sup> 上面に赤字にて「混丘の碑參看」とある。『益齋亂稿』卷第七と『東文選』卷一百十八に「有元高麗國曹溪宗慈氏山瑩源寺寶鑑國師碑銘并序」がある。
- <sup>12</sup> 上面に赤字にて「染是執著也、掣肘也。／無我之我／在無差別境生活」とある。

- <sup>13</sup> 上面に「念佛要門 著再調」とある。
- <sup>14</sup> 上面に赤字にて「滿洲なるへし」とある。
- <sup>15</sup> 上面の右下面と右脇に次のような記述がある。  
一、沙彌科二年 朝暮誦呪。初心文、發心文、緇門誓願  
[日用切近之誨、不過過浮情誡邪業、以執乎正道。支那高僧之短著論誨訓を集む。栢庵序集註]  
二、四集科二年 禪源(諸)詮序都序、大慧書狀、法集別行録節要並入私記、高峯禪師要録。  
三、四教科四年 楞嚴、起信論、金剛經、圓覺經。  
四、大教科三年 華嚴、十地論、禪門枯頌、景德傳燈録  
[天親著、菩提流等譯、十地品の譯]  
<sup>16</sup> 「」は鉛筆による。  
<sup>17</sup> 上面に鉛筆にて「以下三門」とある。  
<sup>18</sup> 「」は赤字による。強調か。  
<sup>19</sup> 行間に赤字にて「キン」とある。  
<sup>20</sup> 上面に赤字にて「死句活句の解」とある。  
<sup>21</sup> 上面に赤字にて「太古は石屋清珙／懶翁は平山處林」とある。  
<sup>22</sup> 上面に「臣謹按松廣祖師普照遺制、講而行之、著爲常法。且使僧徒薰修朝夕、庶幾上報殿下弘道之恩。伏望領中外垂於不朽、則不萬々利於國家哉。」とある。  
<sup>23</sup> 上面に赤字にて「其極、順宗の帝妃を出すに至る。」とある。  
<sup>24</sup> 上面に「慎齋著竹溪志」とある。  
<sup>25</sup> 上面に赤字にて「晦軒事蹟に斯く録すれども、此の文今の『陽村集』にはなし。可疑之。」とある。  
<sup>26</sup> 上面に赤字にて「李益(齊)の朱子學に通せるは、其の五十八歳冬、忠穆王八歳にして即位するや進言、王者修徳の事に及へるに、王の左右として賢儒二人をおきて『孝經』『四書』を講せしめ以て格物致知誠意正心の道を習はしむへしと云へるに證すへし。」とある。  
<sup>27</sup> 上面に赤字にて「是れ、後李朝に經書諺解を制定するや、『永樂大全』に主依するの張本に、同時に其の解の後世批難多く、批難多くして而も遂に變更するに至らざりし所以也。」とある。  
<sup>28</sup> 上面に「故に『高麗圖經』第十七卷祠宇に於て八關齋は高句麗の毎十月祭天大會の東盟を繼承する意味残りて其月望日に舉行すと云へり。」とある。  
<sup>29</sup> 上面に「太一即太乙北辰神名也。――宋時尤崇祀之。建東西中之三太乙祠、以太乙飛在九宮每四十餘年而一徙。所臨之地、兵役不興、小旱不作。」とある。  
<sup>30</sup> 第四冊表紙には赤字にて「麗末太學形勢」と「第一章排佛教政より最新」とある。  
<sup>31</sup> 挿入場所の印がないが、ここが適当と判断した。  
<sup>32</sup> 上面に「辛禍十年太祖在安邊時、一夜夢萬鷄一時鳴。入破屋中負三椽以出。花落鏡墜。從一老嫗言、尋無學於雪峰山土窟中。無學爲釋夢曰／「萬家雞聲者、賀高貴位也。身負三椽者乃王字也。花落終有實、鏡落豈無聲。」／釋王寺を經始す。」とあり、また赤字にて『輿地勝覽』亦釋王寺は太祖潛邸時建と記す。」と続く。  
<sup>33</sup> 上面に赤字にて「猶曰小主」とある。  
<sup>34</sup> 上面に赤字にて「庇蔭也」とある。  
<sup>35</sup> 上面に『龍飛御天歌』本文の「滿朝히두쇼셔커늘正臣을올타호시니、滿國히즐기거늘聖性에외다터시니」が

- ある。「滿朝請置、正臣是許」と滿國酷好、聖性獨關」に対応する。
- <sup>36</sup> 上面に赤字にて「禪、天台、惣持南山即（眞言）律宗（の合宗）、華嚴、法相、中道神即（即）三論密教の合宗、始興宗未詳。」とある。
- <sup>37</sup> 『世宗實録』24年3月24日乙酉に「○始設興天寺慶讚會、五日乃罷。留都承旨金銚、姜碩德迭往興天、凡供佛飯僧之事、無不監辦。疏文內稱菩薩戒弟子朝鮮國王印押、識者歎之。」とある。なお、6年三月十二日戊子に「議忌晨齋疏式。前例、始面稱菩薩戒弟子、季後稱弟子無任虔禱之至。大提學卞季良議云、佛法未革則依舊何如。吏曹判書許稠云、非弟子而稱弟子未便。始面稱朝鮮國王、季後只稱無任虔禱之至何如。命仍舊。」とある。
- <sup>38</sup> 上面に赤字にて「奴婢、伶人、妓、喪舉軍、鞋匠、白丁、巫覡、僧」とある。
- <sup>39</sup> 上面に「高麗朝上下佛法に現世利益を與ふる法力ありとなすは、例證過多、不遑枚擧。二回大藏經板印雕は即其の尤著明なるものなるか、未來福田と認むるは、例へは『輿地勝覽』平安道順安法興寺、金富軾撰文に~~王~~仁宗王が妙清亂の爲に死没せる西京多數の人々の未來~~之~~福田の爲に本寺を再建せることを記し、文中唐太宗唐建國の爲に鋒鏑に罹れる無數の人の冥福を修する爲に寺塔を建て虞世南をして文を書せしめしを引用する者の如きは、其の好適例の一なり。」とある。
- <sup>40</sup> ここに空白がある。引用文追加の予定とみられる。第五冊1頁上面にあるこの文については、本文に挿入場所の印がない。ここが適当と判断し移動した。
- <sup>41</sup> 第四冊最後頁の裏面に「湛軒談叢洪大容」とあり、東西南北の印に「樓、室、夾室」の図面と、強調箇所異なる16マスの四角形の図面が二つある。
- <sup>42</sup> 上面に「×世宗五年十月〔卷廿二四枚〕／禮曹啓、新造寺社之禁、載六典。然無識之徒、寺社及墳墓齋庵續々新造。甚爲未便。」とある。赤色×の挿入場所の指示がない。前への移動が適当と判断した。
- <sup>43</sup> 上面に赤字にて「太宗十三年八月父母追薦佛排之數、尊卑に由りて差等ありて著令となれり。」とある。
- <sup>44</sup> 上面に赤字にて次のようにある。  
「氣とは質を包含する活動一盲目的  
理とは其活動の條理なり法則也一合理的」
- <sup>45</sup> 印なし。
- <sup>46</sup> 左脇に赤字にて「質的方面とは吾人の五官に認め得べき方面也」とある。
- <sup>47</sup> 右脇に赤字にて「planmäßig」とある。
- <sup>48</sup> 上面に「昭顯世子第一子也。」とある。
- <sup>49</sup> 上面に赤字にて「尹明齋の弟子〔肅宗朝〕」とある。
- <sup>50</sup> 上面に「洪良浩の『耳溪集』中興紀句〔昀〕曉嵐問天主教書〔與紀尙書書〕既にあり」とある。
- <sup>51</sup> 下面左脇に「朴趾源」とある。
- <sup>52</sup> 上面に「李裕元『林下筆記』卷卅一に曰く  
崔國輔、文士也。嘗語余曰、我今日謁某相公。方與一時宰相對話、皆書冊題也、古人名也。一場聞之、不知爲何書、何人。君或知之、否。我粗解文字、平生用工、不離於經史。而今於是作一字無識之人、何故也。

- 此固無他、近日攷據之學盛行、所道者無非稗官叢書。明季清初人而然也、後世之學、可以病矣。此言、未嘗非警語也。」と、「尤菴一（靜觀齋）農巖一閔貞菴〔遇洙〕一金止菴〔亮行〕一李竹莊〔友信〕一李華西〔恒老〕一崔益鉉〔勉菴〕」とある。
- <sup>53</sup> 赤色の印である。冒頭の重複部分も赤字による修正である。
- <sup>54</sup> 上面に「狩野直喜、支那上代の巫・巫咸に就て〔哲學研究一の四〕、説巫補遺〔藝文八の一〕」とある。
- <sup>55</sup> 以下、上下両面記述が始まる。
- <sup>56</sup> 上下両面の記述はここまで。
- <sup>57</sup> ここに空白がある。補足予定と思われる。なお、上面に赤字にて「年代」とある。
- <sup>58</sup> 右側に赤字にて「〔心の本體也〕」とある。
- <sup>59</sup> 上面に「一味平等理體即如、一切萬物皆如なるか故に如々と云ふ。〔楞伽經等〕」とある。
- <sup>60</sup> 上面に「或は丈？」とある。
- <sup>61</sup> 上面に赤字にて「再調出所／周（書）多方篇」とある。
- <sup>62</sup> 上面に「四勿也」とある。
- <sup>63</sup> 上面に「中庸三徳ならずや」とある。
- <sup>64</sup> 上面にこの追加文とすでに挿入した追加文を挿んで赤字にて次のようにある。「大體天道を政治方面にも利用せんとする一派と、純宗教として立たんとする一派とに分つと觀むべし。（△右横：△外に勿論此教の常套傳録の争も加はる。即第二世海月心法を金演局に密傳せりとす派と、孫秉熙に密傳せりとす派となり。而して實は東學教の宗旨には密傳すべき何者もなきは、上來畧述に由りて明白なる事實なり。笑ふべきに至なり。）孫・李は前者に後者は金演局也。而して孫・李既に死せること久しく、金獨り生存し、雞龍山下新都内に本部を移し、上帝教と改稱す。即東學より天道教となり、次に侍天教となり、次に上帝教となる。」とある。
- <sup>65</sup> 上面に赤字にて「心法を修して天主と合一して造化を動す力を得と解すべきか如し。」とある。